川柳塔

平成九年二月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年　通巻八三七号

日川協加盟

No. 837

二月号

川柳大原400号記念大会

とき　4月6日（日）午前9時
ところ　大原町総合センター
お　話　大森風来子氏（川柳岡山社）
兼題と選者（各題2句）
「駅」　大森風来子・河内　天笑
「原」　土居　哲秋・山口　流木
「芽」　林　荒介・土橋　螢
「続」　森田　熊生・神原日出夫
事前投句　「うれしい」小林　妻子謝選
会　費　2000円（発表誌・昼食等）
◎昼食・宿泊準備のために、宿泊者はハガキで**1月31日**までに事前投句を左記へ出句してください。
〒707-04　岡山県英田郡大原町下庄町
小林　妻子
＊欠席投句およびご芳志は拝辞いたします。
主　催　大原川柳社
後　援　大原町文化協会

第3回　鳥取県民文化祭参加
第20回　鳥取県川柳大会

とき　3月30日（日）午前10時開場
ところ　米子市文化ホール（米子駅前左向かい側）
（☎〇八五―三五―四一七一　米子空港からバス25分）
お　話　文学博士　平宗星氏
兼題と選者
「冠」　橘高薫風選
「通る」　小松原爽介選
「動く」　森中恵美子選
「雲」　濱野奇童選
「北」　土居哲秋選
「宇宙」　小島蘭幸選
「浅い」　原章峰選
「傾く」　但見石花菜選
出句締切　午前11時半厳守（各題2句・席題なし）
参加費　出席者　2000円（昼食・発表誌呈）
欠席投句者　1000円（発表誌呈）
欠席投句　**3月10日**までに〒689-35　米子市吉岡34　角田千秋へ
前夜祭　3月29日（土）午後6時半
ホテルハーベストイン米子　会費5000円
宿　泊　同ホテル（各自清算）シングル5500円
◎前夜祭・宿泊申込み締切　2月28日
連絡先　〒683米子市花園町53　林　荒介　☎〇八五―三一四三三
主　催　鳥取県川柳作家協会・県民文化祭実行委員会
後　援　鳥取県・米子市・新日本海新聞社ほか

初夢

橘高　薫風

十二月三十日、一ヶ月ほども引きずった風邪にどんづまりが来て、近くの病院に入院した。妻の同乗したタクシーで病院に向かう身は検束されるに似て引かれ者の思いがする。救急治療室からの入院なので主治医も決まらぬ病室で二十四時間点滴がはじまり、その間、反省反省の連続だった。反省はまた新しいものを知ることから始まると知る。

小出智子さん、山下美津留さんの病状の経過はどうなのか。先ずはお互い速やかに健康を回復しなければならない。

そして四先生の回忌法要と追悼大会を成功させたい。

また早急に次代の川柳塔を背負う人材を選び育成しなければならない。これは川柳塔同人、誌友各位が決めることだ。

①作品の充実②文章力③話術④経営感覚（同人育成をはじめ印刷その他雑誌製作の知識）⑤日川協への貢献知名度⑥本社地方支部をはじめ他柳社との交流密度等々、資質を伸ばし養うため、その修練と活躍の舞台をしつらえ、その人柄の充実ぶりを誌上に示さなければならない。

西尾栞先生は昭和五十七年、七十二歳で主幹に就任、十四年間代表として尽力されたが、晩年は老齢により種々の難渋を味わわれた。私は栞先生の就任のお年の頃合いに主幹を譲ることになるが、そこへ来るのが二十一世紀である。

二十世紀の始まりは一九〇一年から、二十一世紀は二〇〇一年からと、百年前にローマ法王らによって定められたそうだが、昨今では二〇〇〇年を新世紀の出発年として各国ともに派手なイベントを計画、名のあるホテルはすでに予約が殺到しているらしい。

カナダでは、ミレニュームと称する千年単位の構想でスケールの大きい企画が相次いでいるそうだが、わが川柳界も、その情熱とエネルギーが欲しい。明治から平成、四代のアンソロジーが今年の私の初夢であった。

今更、万葉集の言霊の偉なるを思う。

◇　◇

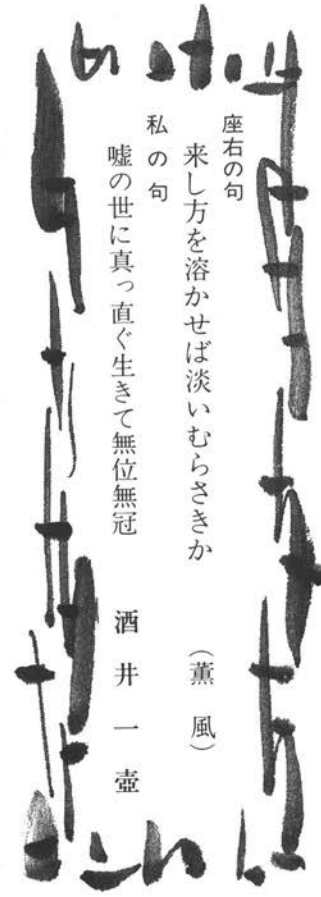
肺炎へこの元旦の空のいろ

レントゲン寒冷前線通過中

咳の数生き身も枯葉払うなり

友を思いわが身を思う窓の星

西の風邪東の風邪に爺と孫



座右の句

来し方を溶かせば淡いむらさきか　（薫風）

私の句

嘘の世に真っ直ぐ生きて無位無冠　酒井一壺

川柳塔　二月号目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言　初夢……橘高薫風……（1）
町の灯が消えた……高杉鬼遊……（2）
川柳塔（同人吟）……橘高薫風選……（4）
自選集……（45）
川柳の群像　桂枝太郎……東野大八……（48）
古川柳歳時記『初午』……清博美……（50）
水煙抄……高杉鬼遊選……（54）
秀句鑑賞［同人吟……新家完司……（52）
　　水煙抄……高須賀金太……（81）
大空のこころ（73）……橘高薫風……（91）
渺湖抄……八木千代選……（78）

町の灯が消えた

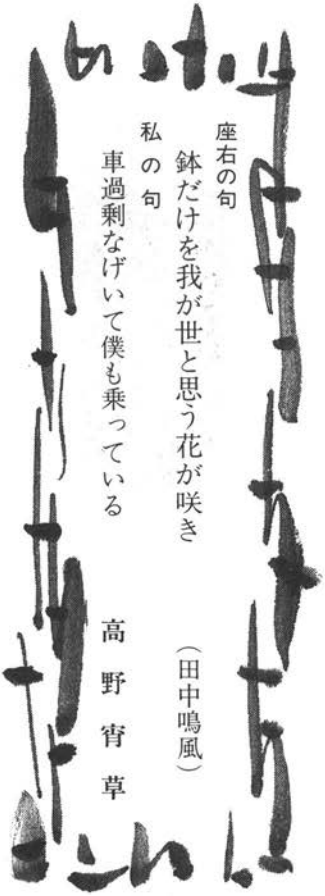
高杉鬼遊

「このたび諸般の事情により十月三十一日をもって廃業することになりました…」

こんなビラが近くの銭湯に貼り出されて、町の噂になった。近くに銭湯があって便利だと家を買う条件の一つでもあり、今の家に住んで三十数年になる。近鉄大阪線高安駅を降りて西へ十分、風呂屋の前を通り、横の路地を抜けるのが帰宅のコースである。金曜日は定休日なので銭湯の明りが消え、すこし寂しい。これからずっと寂しい日が続くのかと思うと哀しくなって来る。わが家には小さい風呂があるが、時々気まぐれのように妻を誘って銭湯へ行く。

ひところ流行った「神田川」の歌詞とメロディーが独身時代の風景と重なる。〝貴方はもう忘れたかしら／赤い手ぬぐいマフラーにして／二人で行った横丁の風呂屋／一緒に出ようねって言ったのに／いつも私が待たされ

茴香の花……西出楓楽選…(82)
「干　支」……寺田甚一選…(84)
一路集「縛　る」……土橋はるお選…(84)
「うとい」……堀江芳子選…(85)
初歩教室「水」……吐田公一…(86)
路郎賞・川柳塔賞中間発表……(88)
久家代仕男会長を悼む……尼　れいじ…(92)
丸山よし津さんを偲ぶ……門谷たず子…(93)
一月本社句会……(94)
各地柳壇（佳句地十選／田中輝子）……(98)
柳界展望……(112)
二月各地句会案内……(113)
■編集後記……(114)



座右の句

鉢だけを我が世と思う花が咲き　（田中鳴風）

私の句

車過剰なげいて僕も乗っている　高野宵草

た／洗い髪が芯まで冷えて／小さな石鹸カタカタ鳴った（以下略）〃引用が長くなって作詞の喜多條忠さんにすまないが、ここまで書かないと話にならない。赤地に金で小さな亀甲模様があったセルロイドの石鹸函は、遙か遠い青春と共に今はない。そして妻は待ってくれない。

銭湯の貼り紙の後半に「長い間ご利用いただきまして、ありがとうございました。店主敬白」とある。「ご利用」の文字が切実に感じられる。孫が帰省するたびに「お風呂屋さんへ行こう」とせがむ。そのたびに「利用」させていただいた。銭湯はわが家にとって生活の一部である。

三十一日の夜、カメラを持って入浴に出かけた。雨が降っている、空が泣いている。高安温泉を正面から撮る。大人三二〇円、洗髪料一〇円である。貴重品は番台へ、カメラを顔馴染みのお姉さんに預けながら「女湯を撮りたい」と冗談を言う。「あしたなら」と軽く流される。脱衣箱は四十五番だった。別に決めてはいないが上段の空いた箱へ入れる。終りの日だと言うのに閑散としている。広い湯舟に一人、首まで浸かると地球上の喧騒はどこかに消えて私はしあわせである。客は至福であっても、これでは営業にならない。

橘高薫風選

米子市　林　荒介

大太鼓　小太鼓鳴って雪の乱
この町が好きで括弧の中に居る
たましいの塒があって灯をともす
響かねばならぬ私の持ち時間
風たちが支えてくれた坂だった
遺書にしてあれこれ指図してやろう

生駒市　麻生アート

秋刀魚さんま何処か男の匂いする
頭上注意 足許注意 杖ついて
枳殻の刺は青いよ酢っぱいよ
何んとなくインターネット息ぐるし
黄門さんつけっぱなして人は留守
ポケットを零れて落ちる嘘の数

鳥取市　武田帆雀

本社からマダムキラーの草履取り
敵中横断して来た靴を脱ぐ
私より弱い味方が味方する
蓮の葉が滑って登れない蛙
雨垂れに鳴っているのは猫の皿
剃刀の秘書にジャンボな胸がある

八尾市　宮崎シマ子

我なりに老いの十訓年女
たくましい冬芽初日を丸のみに
一色が足らぬ七草庭のもの
声高の正月があり実家の居間
古希過ぎて角が一本増えた丑
春日灯籠　千の祈りよまほろばよ

唐津市　久保正剣

不確かな世情に挑む屠蘇を酌む
念力にビクともしない木のスプン
七人の敵を待たせているサウナ
小役人でも呼べば接待費で落ちる
貞節を愚直に守る嗤えない
朋友相信じレジを通り抜け

唐津市　山門幸夫

南無阿弥陀仏　南無阿弥陀仏の京奈良路
手を繋ぎこの態にして吉田寺
幻のリバテイ浮ぶ田辺港
忘帰洞　戦友偲ばるる丸い海
蟻の列熊野詣での老い二匹
秋刀魚鮨　頭としっぽ残しけり

唐津市　山門タミ

そろそろと終着駅よ身繕い
水族館　人も魚も睨めっこ
水平線タンカーが行く小舟行く
旅二組　別れの握手四つ巴
山頂の露天風呂から見る夕陽
散る紅葉残る紅葉の美しさ

弘前市　高橋岳水

手のひらに団栗のせて人を恋う
人の世や落ち目になれば潮が引く
熱燗を酌み今生の幸とせん
大寒のいよいよ丸き老母の背中
凍天の星が動いて人が逝く
こめかみの辺から老いが忍びよる

弘前市　斉藤劦

どの干支も一作一創の顔よ
ピエロふと雪を見上げる悲しげに
電線が埋った街へ出てみよう
少年の凧に大空あげましょう
コンテストに出てる料理は店にない
枝打ちの音に誘われ森づくり

藤井寺市　吉岡美房

正眼に構え直した十二月
初夢に富士を見たのは黙っとく
地下街を出ると真冬になっていた
逢わないと決めると冬が目に刺さる
ゆりかもめ恋した頃の君だった
上役の真似していたら逮捕され

横浜市　菱田満秋

初春や手酌の屠蘇もめでたけれ
本人が留守を告げてる電話きく
義理チョコも来ないじじいになり果てる

菓子折を出して娘をくれという
満洲で生れたことは変えられぬ
小便をしながら人事話される

鳥取県　鈴木公弘

冬が来て老いたる母の長電話
おりおりに咲いた話と散るはなし
靴下やサンタの来ない子を思う
水ぐるま流れに背きたくなった
低金利わたしの歳が増えただけ
除夜の鐘まだ降参はしていない

吹田市　古川喜美子

今が旬ネジ全開にしておこう
旬の鯖　有田の皿に身を余す
赤福の三個が多いお母さん
大根がもっとも大根らしく炊け
目くばせをされて少ない血がさわぐ
寝てる間も川へ無限に雪消える

岡山市　川端柳子

待つ人の居るしあわせのベル鳴らし
すばらしい夕焼け今日へ最敬礼
歳月が奪うわたしのうららかさ
忘れまいリンゴの気持　子の気持
思い出に生きるゆっくり立ち上がり
とある日のわたしの肩にかかる雪

黒石市　相馬一花

釣り上げた鯛にも餌を少しやる
食い溜めの代りをさせる冷蔵庫
ライターでロウソク灯す里帰り
一枚もカードが無くて日々新た
垂直に煙が上がる大往生

弘前市　高瀬霜石

人生のあちこちにある急カーブ
筋いっぽん通して男嫌われる
天井と睨めっこする負け戦
亡父のこと言われてお辞儀ばかりする
逃げるから追いかけられるのだファイト

弘前市　一戸ツネ

臘八の鐘に誘われ雪を踏む
一期一会　虚しさ残る月と雲
陽炎に八十の欠片燃えている
寂静の足音は弥陀か　耳を向け
地吹雪は老いに殺意の牙を剥く

弘前市　佐治千加子

揺さぶられはらはら過去がこぼれゆく
意志がある眼をして狸徳利下げ
悪だくみ抱いた狸は昼寝する
口約束　心配そうな昼の月
繭ごもる蚕のように何を待つ

老童子歓喜一輪福寿草
山門に念仏となえ初雀
新年を祝うモッケの冬ねぷた
鈍ながら亀の人生それで良い
生き抜いた軌跡は僕の宝物

弘前市　岡本花匠

津軽路は雪また雪に汗の日々
深呼吸ああ休田に策見えず
米価引き下げ全てに上がる消費税
無理は覚悟で麦踏み習う万歩計
還暦の男が探す入門書

弘前市　相馬銀波

何見てもびくびくしないお月様
冬将軍碁石の音で逃げて行く
竹スキー　ニセコの山の夢を見る
北国の雪は昔は美味かった
雪国の眼鏡は何時も赤信号

弘前市　中山雅城

傷の分やさしさの海深くなる
幾種もの秋を重ねて四十五
セロリだったはず　生麩と暮らす今
丸裸どうだんつつじの曲線美
カッコイイが全て逆さま十六歳

弘前市　肥後和香子

退いてから世間が見える鳥瞰図
出しゃばりのお米もいない過疎の村
吹雪の夜ゴッホの絵など恋しくて
夫の居ぬ家にやませが吹き溜り
やませ吹くノックするのは雪おんな

弘前市　今生恵子

小気味よく啖呵きってる無位無冠
大口を叩いて重荷背負い込み
津軽三味　風にちぎれて聞えます
喜怒哀楽お酒がいつも付きまとう
新部長　私腹をこやすことに長け

十和田市　阿部進

すりへった靴底が知る胸の内
ひっそりと生きて妥協を拒む背
鉛筆の芯は偽善を許さない
ことさらに力んでみせる劣等感
午後八時　鱈汁食って雪を掻く

青森県　西谷大吾

体調快適　蔵王くっきり光ってる
朱竹の軸を掲げて九十三
軽い怪我だからしこたま叱られる
春夏秋冬　好き嫌いは勝手なり
落ち葉拾いから始める菊作り

仙台市　川村映輝

町田市　竹内紫錆

病棟の真下は往き来した青春（母校の付属病院にて）
検査入院　機械めぐりの旅三日
超音波マップへ患者息をのみ
シンチグラムいい骸骨を撮って欲し
長生き中です点滴の日はふえて

横浜市　清水潮華

陽だまりのブランコ孫にこいでやる
百万を越すと読めない数になり
残高を数え余命を四捨五入
灰までと言わぬが胸の活火山
キーワード自由と決めて初詣で

静岡市　安本晃授

冬の峰刃物のようにつんと起つ
母の手は静かに普賢菩薩抱く
無口の父　時には放つホームラン
コロコロと変わる料理は嫁の味
毎日が日曜と言う忙しい日

富士宮市　渥美弧秀

暁の樹の間に光る星は亡友
冬暮色　故郷の知人も老いたもう
楽音に雨だれ窓に唱和する
師の詩を鍵盤に乗せ供養する
残る日を大事にしよう夫婦きり

静岡県　薗田獏沓

ふと妻が弱気を洩らす湿布薬
お姑と言うより生活知恵袋
缶ビール何時しか冬の装いに
葦は枯れてその根は水を澄ませてる
補助金で老人ホーム造ろうか

富山市　舟渡杏花

蠟梅や老父に昼の酒すこし
敗者復活いきりたってるのがひとり
無印でやっとここまで辿り着く
住専の切れた尻尾が掌に残る
女神様の嫉妬忘れていた不覚

富山市　酒井輝

モノクロの知らぬ娘が僕の母
母ちゃんが叔母さんだった物心
たかが俺されども明日へ賭けて生き
親と子に孝行をして独り居る
ポックリと逝く日へ残す住所録

大阪市　河井庸佑

労多く功少なくも敢えて受け
頑固でも納得させる策を持つ
撤退のチャンス逃さぬのも策士
ひと言が昨日の友を敵にする
正攻法　最後の勝利信じ切る

大阪市　中田あい子

たっぷりの湯舟につかり明日思う
マスコミを油断した身のスキャンダル
若水も蛇口でうける都市暮し
何事もないが一番母のくせ
たっぷりの時間みつもる父母の旅

大阪市　北勝美

寄せ書きの文字にそれぞれ顔がある
やさしい文字やさしい顔と限らない
同じ筆　朝昼夕で変る文字
絵の具ではとても出せない黄櫨もみじ
また訃報反古にさせてる年賀状

大阪市　神夏磯典子

今年こそことしこそはと花の種
本心にそろそろ触れる酔うている
豪雪に安易な妥協叱られる
もつれ糸　祖母の辛抱にかなわない
小さい善　公認されて恥ずかしい

大阪市　本間満津子

変体仮名　友へ楽しい年賀状
平穏な道で居眠りしてしまい
茶の間で気炎あげても虚し世の流れ
お雑煮にらしさ味わうお正月
水仙の呼吸静かに小さな家

大阪市　清水利武

美人でもままにならない車椅子
わいろ賄賂　妻はタイルの風呂をほめ
厚生官ニッコリ笑えば金包み
世は平和巡りくる新春酒美味し
政治何時かわいろに様変り

大阪市　藤田頂留子

年の豆まかずお口へ福は内
人影は沖あいの無事祈るらし
ギブスとれて握れる箸にありがとう
年金をもらうと命おしくなり
転がされやっと落ちつく庭の石

大阪市　辻川慶子

突然の用事が出来る十二月
忙中閑見たい映画は見ることに
手作りのとうふ屋さんに和む街
祖母に借り貸し下されと言う如し
六十代　終となる日の大晦日

大阪市　桝本蕗児

夕焼けを川も唄っている顔だ
コロッケの中に泪と青春と
み仏の微笑に私救われる
コーヒの香　散歩はここで終りです
農家留守トイレを無断借用す

大阪市　川原章久

あともどりならぬ人生踏む落ち葉
冬牡丹庭の主は耳遠し
万引を見た襟巻の狐の目
どっこいしょ賀状書く気がやっと出る
黒い霧もうゴメンなり菊日和

大阪市　大野武太

喜寿までは生きるつもりの予定表
老妻と血圧計で確かめ合う
網走へ嫁ぐ妹の釣具店
人生の第二はゆったり夢をもつ
兵無惨　顔の歪みをもちつづけ

大阪市　小糸昭子

オカリナの音に誘われ弾む足
不器用に生きてもこころ持っている
胸に矢が当るが如き冬の月
こつこつと牛の涎の商いか
今日もまた辛味苦味を消化する

堺市　板尾岳人

積雪の街でポストは空腹だ
鉛筆で鶴を一匹画きました
喪が明けて川の流れが速くなる
雪景色春を夢見る寒四郎
父と母　遠い遠い街に棲む

堺市　柿花紀美女

両腕にぬくもり残し孫嫁ぐ
息抜きに騒音の中イブの街
捨てるもの今年も捨てず十二月
総入歯余生をしっかり噛みしめる
外は雨ハッピーエンドの本を読む

堺市　一瀬福一

正札がすぐ半額になる不思議
気の弱い鬼で時々経をよむ
もう先が見える頃きたよいポスト
多情多恨女が変える髪の型
無風地帯きっと男を駄目にする

堺市　吉本菁風

考える力を奪う塾へ行き
なんとなく気持が晴れる四天王寺
数学は苦手でしたと土を捏ね
一日が長いと思う酒を止め
世話焼きが減って結婚相談所

堺市　黒田真砂

謎秘めた微笑の奥にある痛み
百花繚乱フラワー展の友多弁
着替えして今日の戦を振り返る
一枚の紙　表裏あり人のエゴ
木枯しに我が身を処するすべもなし

堺市　桑原道夫

仕事場で風邪の話をくり返す
遮断機の前で拳を握りしめ
焚火に背を向けてそ知らぬ顔をする
ゴキブリの肌は時間を煮た色か
欠伸して人生少し軽くなり

豊中市　田中正坊

どうとでもとれる答を用意する
日記書くいのちを刻むように書く
ハイテクへすぐにとびつくお父さん
年下の友から「遺書」という冊子
冬がもう来たなと思うにごり酒

豊中市　安藤寿美子

きさらぎは何かの予感ただよわせ
世紀末フォッサマグナも暴れ出す
カレンダーぺらり一枚十二月
あかぎれの薬買いこむ十二月
ばあちゃんはいつでもグーを出してやる
納めるとこは納めなならぬ十二月
嘘をつくとこが写っているテレビ
変身をしたのに元へ戻ってる
もどらない神戸の夜空ヘルミナリエ
枯葉踏むしゃりしゃり骨の音がする

豊中市　滝北博史

鬼だろう老人福祉食いものに
届けますハートと花をクリスマス
後朝に雪　牛車渋滞した都
とも白髪　犬養孝聴く師走
除夜の鐘　急に無口になる夫婦

豊中市　稲葉真郎

面影を浮べつつ書く年賀状
くさめ出て噂しそうな人浮ぶ
フルムーンの土産で孫に地理話す
育てた娘のファッション好きも母に似る
鼠の後大きな牛のカレンダー

池田市　金崎峰子

非常用リュック今日はハイキング
世の中の裏ばかり見て夢もなく
決心のたびにハードル一つ越え
毎日が駈け足ですぎ十二月
閻魔さん今も信じて嘘言えず

池田市　岡本吉太郎

言い勝って老いて淋しさ感じてる
残り火が私の老後を支えてる
涙流し愛の歌聞く老い二人
これっきりと社長マイクを放さない
宇宙とは分れば分るほど不思議

箕面市　椎江清芳

老いた鹿　人を見る目が肥えてくる
火葬場の椅子でうっかり出る欠伸
アメリカと妻には喧嘩出来ぬわけ
夢の中亡母は無言で後ろ向き
晩学に父の辞典が重た過ぎ

箕面市　岩津ようじ

秘書の書く送別の辞にほめられる
青い瞳も月見とシャレる日本慣れ
じいちゃんの馬鹿その齢で二日酔い
もう不惑と思うたころが懐かしい
神さまもいたずらなさりたいらしい

吹田市　瀬戸まさよ

十二月八日忘れてギョッとする
推敲に推敲芭蕉賢治の詩
エネルギー太陽と風それでよし
おこぼれを貰う官僚群雀
童心のプラスマイナス九十歳

吹田市　栗谷春子

このさきに桜落ち葉のいいところ
末の孫の絵馬あげに行く秋日和
三年は重いと一年日記買う
時として八十はずるいかくれ蓑
私には宝のようなお正月

吹田市　茂見よ志子

落ち葉掃く愚痴に夫は風情愛で
落ち葉降る女の繰り言こぼすかに
やみくもに人が恋しい枯れ芒
押しつまり周囲ばかりが慌ただし
エリートも金に溺れて見る地獄

吹田市　山本希久子

やさしさが少し足りない私の名前
寒風にカニサボテンは意地を見せ
病院へ行くといっぱいいる仲間
握りしめてる錯覚ばかり風ばかり
冬の梢に私を隠す術がない

茨木市　藤井正雄

日替わりランチ旬を一品添えて出る
社長室人を退け観る相撲
連休二日好きな帽子と小旅行
おしぼりも出ないうどん屋だが旨い
自分史も下巻に入る喜寿祝い

茨木市　井上森生

転生を悟れば遙か星の旅
定年で自分のために朝起きる
続編のドラマ還暦のかくし味
煩悩多し信ずるものが多いから
立ち直るチャンスはいつも蕗の薹

十五年一人芝居の破れ衣装
歌唱碑の旅愁の里に母おわす
故郷の峠に休む椅子がある
神様のマリオネットか千鳥足
納豆も舌になじんで古希に入る

摂津市　井上源一

沸点の低い議論に噛む欠伸
温室に育ち情けを知らぬ花
禁煙は仕掛け花火で終わりそう
定年の虎がだんだん猫になる
不器用な十指で悪事に遠くいる

高槻市　川島諷云児

なぜかくも曲った道をえらいさん
好きな人作って遊べとお坊さん
捨て猫をマンションだものゆるしてね
塾通い知識詰めるか恋するか
大好きな器眺めて君想う

高槻市　井上照子

ビビッドなソックス脳を目覚めさせ
ぶじに目覚めて一本の藁を手に
葉牡丹のくすんだぼたん色が好き
正直は美徳に非ず目を落とす
ヤジロベー銭にかたむき眠くなる

寝屋川市　柴田英壬子

思い出が思い出を呼ぶ秋灯下
息抜きに人波歩く歳の市
思い立って暮れの一日を石の庭
糸のない凧のごとくに生きたい日
短いという一年の変りよう

寝屋川市　堀江光子

訓練の時だけうまくいく消火
来客が帰るとつづき叱られる
下請の顔　徳利に見えるらし
オリオン座きれい今夜はきっと鍋
スカートめくりやめましょうシクラメン

寝屋川市　江口度

親孝行されに行くのも疲れます
八重州口　丸ノ内口　万歩計
母さんは及第ですと子が言うた
椀ひとつ持っても山頭火になれぬ
米を磨ぐ遊び疲れて寝る前も

寝屋川市　岸野あやめ

横一線走り出したら縦の列
傘と傘触れて情けも争いも
五十年へたな人生笑い合う
携帯電話　窓の景色も見ておれず
湯豆腐も紅く染まったもみじがり

寝屋川市　後藤黎之助

枚方市　海老池　洋

今が旬と魚屋さんに薦められ
形状記憶かやはりおせちをつくる妻
ジャンボくじ左団扇の夢ばかり
故郷の雪を案じる雪だるま
男心へ桜は桜バラはバラ

枚方市　前　たもつ

震災二年　直視はできぬ仮設小屋
小さめの器に旬を盛るもよし
死に際の美学を思う青畳
ディズニーランドへ妻と娘をお見送り
政官財とっても仲がよい日本

交野市　福崎　しげお

矍鑠と素振り子達に見はなされ
花道でたたらを踏んで燃え尽きる
自問して握った拳また開き
血圧が上がるだろうに黙秘権
喝采は明治の気炎コップ酒

守口市　結城　君子

ああ孫も携帯デンワ持っていた
七十を越すと誕生日が早い
無農薬と書いてあるから無農薬
冬耕の後ろ姿へ頭さげ
自分を眠らす自分自身へ子守唄

東大阪市　指宿　千枝子

今生の別れにひと夜添い寝をし
まどろみに白衣の後ろ姿見ゆ
遠い日を眠った振りで回想し
愛の賛歌秋にふさわし聞かせてよ
花嫁の姿重なる白椿

松原市　小池　しげお

考えを変えてなかった乾電池
万年青の実雨降って止み降って止み
霜柱　無口な人と連れになる
決断をするまで待っている冬至
橋龍のコートの裏は赤だろう

松原市　玉置　重人

一椀のぬくみの中で生かされる
珈琲屋にモンローがいる万歩計
カニ蟹カニ蟹が誘いにきた寒波
曾孫誕生おもちゃ屋に立ち止まる
喜寿傘寿めざしペースを崩さない

藤井寺市　田中　透太

合せ味噌ほどよい味に出来上がり
欲張った分だけ風が強くなる
大胆に女が跨ぐ水たまり
再会の友も一人で生きている
運のない男とまわす風車

藤井寺市　中島志洋

年の功　乾杯役が板につき
金なんか無いよと先に断わられ
週刊誌見出しに釣られ無駄を買う
招かれて自慢話を聞かされる
相思相愛　占いなんか気にしない

羽曳野市　吉川寿美

馬齢六たび初春を迎えた男舞い
今日までの道のり思う豆の数
冬の天ものの見事な忘れぐせ
写経終え悟りに遠い掌を洗う
親友と呼ぶえにしの日々よ星仰ぐ（親友の急死）

八尾市　宮西弥生

雪吊りへ雪がどんどん解け出した
神さまも好みあるらし逆さごと
蓬莱の豚まんぬくぬく終電車
タコ焼き屋　背中合わせの十二月
今ここに札束がほし十二月

八尾市　吉村一風

臆病でいつもどんでん返し待つ
霧晴れてぱっと吊り橋現れる
コスモスに囲まれ孫をあやしてる
妻にネジ捲かれて歩く冬の空
酒のみの父を真似てる訳じゃない

八尾市　山下美津留

肝臓へ酒一滴の新春あける
本人は泣かずに妻と娘が泣いた
まあ泣くな死ぬと決まったわけでない
人様が何んと言おうとわしゃ生きる
腹水を三キロ抜いて五キロ痩せ

岸和田市　岩佐ダン吉

まだ仮設　人災でなく何だろう
耐えるだけ耐えた私の出番かも
片減りの靴よ希望に満ちたころ
鉛筆を削ると倒された森に
足音がせまる地球が飢える日の

岸和田市　寺田甚一

カイワレを泣かせた役所揺れている
岡目八目　急所に石がまだ来ない
白旗を振って歩けば敵がない
路地裏に昔の匂いまだ残り
温もりの記事が胸うつ朝のお茶

岸和田市　田中文時

駄目だとは言わなくなった駄目な党
パンツだけ嫁に洗わせない舅
家計簿に深傷負わせたお正月
空白が続く平穏無事日記
姑に気兼ねダイヤはせず年始

人間も冬眠したい時がある
名水が都市を満たして涸れてくる
決め付ける人差し指と言う凶器
窓際で老眼鏡の度が進み
甘い話乗ってみようか肌の冷え

岸和田市　井齋一齋

警笛が聞こえる亡父の近くなり
嘘盛った皿はしっかり割っておく
去りがたし見ていて嬉しあめ細工
仲直りどちらか嘘を秘めている
夏と冬別れの音が違いすぎ

富田林市　片岡智恵子

呑んべえの客は呑んべえの牛となり
むしろなら花のむしろが望ましい
北風も南の風も吹き溜る
ままごとのような量です病人食
一人言孫は大きな瞳なり

富田林市　松本今日子

牛歩でも昭和が遠く離れかけ
風通し良すぎ噂がたまらない
悪人へボーナスやる国どこにある
道草が好きで冥土へ嫌われる
飲み仲間おらず六十路の苦い酒

河内長野市　井上喜酔

一合に弾む男の心良し
うたかたの恋遠くなり六十路坂
蘭植えて妻の余白は夢囲う
花柄のエプロン女華やいで
乱れ髪いで湯は女を磨き上げ

和泉市　西岡洛酔

力には負けるが胸にクルス抱く
美しい的だ狙いは定まらぬ
下積みの石には悲し声がある
胸の矢を黙って抜いた年の功
まだ欲しい銚子を振っている屋台

大阪府　八十田洞庵

子の目には父を大きく見せてやる
子離れをせかす大風二度三度
亡き母の答えそのまま娘にこたえ
すすきコスモスゆれてやさしい秋惜しむ
過ぎ去った日々美しく内に住む

神戸市　木村貴代子

冬の雷遠のく暴走族は憎し
母逝きて次々忌みごとは襲う
説教の仏の加護を信じない
インドへいってしまった孫よなに思うて
鈴掛の鈴二三個の年の暮れ

尼崎市　春城年代

尼崎市　春城武庫坊

酔いがさめると考える顔になる
悪口一杯　僕は愉快に酔っている
年の暮れ脳に詰った塵洗う
終い弘法　冬日を抱いて善探す
楕円球弾み大きな新春を待つ

尼崎市　田中薫

ぷつんと消息絶え　逆光のすすき
動物園の霧に靴濡れゴリラ一匹
砂噛んでひと遠くなるあさり汁
枯れ芦の次第細りにわが手足
ごりの目の点点点と十二月

西宮市　奥田みつ子

ワイン傾け今日は開戦記念日か
朝の机プラス思考とつぶやいた
神はいたずら危ない方へ引き寄せる
ポインセチアの赤だまされてみたくなる
シクラメンやさし　病の人はいま

西宮市　門谷たず子

小菊一輪匂う机で春を書く
小春日の鏡逢いたい人がある
信号は青　心変りのせぬ中に
先ざきは思わぬことに目ぐすりよ
風まかせの凧をあやつる母の糸

西宮市　秋元てる

どやどやと来て苔の寺小半時（吟行　二句）
季の移る音を丹波路の旅で
遺言が恋文めいて来て困り
忘られる怖さに言わでもがなのこと
箸取ればいいよにひたすら待つお鍋

西宮市　山本義子

野仏さんのそばで春待つこぼれ種
口説かれて損を承知で走ってる
青春キップ面はゆいけどつこてます
許すまで二幕たっぷり科白あり
ほんまもんといまさら言えぬ猫目石

西宮市　牧渕富喜子

振り向くと漫画になっていたわたし
通過してまだほろ苦い駅がある
答えたくないのでにっこり笑っとく
友の墓前で古い校歌を合唱す
赤蕪　少しやる気になってきた

西宮市　久保まさお

歳末商戦こぞりて唄うクリスマス
汚濁一杯　街を流れる聖しこの夜
みな負けるな天井鼠の運動会
キリストも仏も笑顔初詣で
老兵のいのち届ける年賀状

西宮市　西口いわゑ

あの扉破れば何とかなるだろう
甘党も辛党もいて気をつかい
淋しくて痛い痛いと訴える
ひとりではなくてよかった風邪の床
神様の答はまだまだ頂けぬ

芦屋市　黒田能子

ひらひらと舞い下りて雪のじゅうたん
水面澄み白鳥一羽舞い下りる
眠りから覚めたヒロインわたしなり
一服の清涼剤に無駄ばなし
孫六人おんな平成生まれなり

伊丹市　山崎君子

白い息　桐葉さくさく競争馬
大根だきは仏の温み寺まいり
割烹着破魔矢作りのアルバイト
若松に水引かけて祖母の初春
待ち呆けおまえもひとり雪だるま

川西市　松本ただし

完璧を望むと花が散りたがる
寒月を背負った影に鞭を打つ
ビルの裏猫も鼠も住んでいた
法善寺昔と今が行き違い
贅沢と言えぬ便利なものばかり

川西市　氏林洋敏

ジャンボクジ当ればゆとりすぐ出来る
花道に落し穴など作らない
善人の命短いなと思う
お目当ての人と指切りして帰り
閉めきったわが家に風の通り道

宝塚市　上田佳秋

草を食むなんと涼しい牛の瞳よ
正月もやはり目刺しを焼く男
正月の薬どっさり渡される
地球から神はとっくに居なくなる
ライバルと手袋のまま握手する

宝塚市　嵯峨根保子

ブティックは派手な方から着せたがる
雑音の届かぬ耳もさびしいね
遅咲きのバラ一輪のプライドよ
来年は翔ぼう十年パスポート
伝説に女の鬼は出てこない

加古川市　吐田公一

寒風に逆らえずいる二度の職
たこ梅ののれんをくぐる冬の酒
父の手の節が支えて来た暮し
四捨五入して人生を若返る
舌打ちの癖が邪魔した平社員

相生市　中塚礎石

しみじみと自分史語る置きごたつ
すきま風やさしい風を待っている
半鐘はないが櫓は道しるべ
正直な人で騙すに騙されず
神さまの仕打ちは恋にひどすぎる

京都市　都倉求芽

もう時間ないのに新聞離せない
ていねいにていねいに蜜柑の筋をとるひとり
あやふやな答を三つ用意する
微分積分りんごひとつよう剝かず
ひとりのカレーあっと言う間に食べ終る

京都市　山海友熙

山茶花の赤へ嫉妬をくり返す
いい予感させて立春風が舞う
コンパクト宝のように持つ秘密
花冷えの甘酒に酔ういちもんめ
後悔のあとでつまらぬ風に逢う

京都府　稲葉冬葉

ふる里へ帰りたくなる影法師
泣いている顔へ電話の弾む声
過敏性だったと思う落椿
はんせいはんせい煩悩はつづくなり
スライスの脳を見ている冬木立

奈良市　宮口笛生

老人になり切り赤い色似合う
通院の日課楽しく老いて行く
晴耕雨読七十歳をぼちぼちと
冷え切った不況と十二月が来る
雪ちらり野良猫飯をねだるなり

奈良市　天正千梢

ちぎれ雲満月を引きたてる
左遷地の土あたたかし水清し
一瞬のドラマ火口湖かおを出し
世の中へしっぽ振る気は更になし
真似をして大怪我をする破目になり

奈良市　吉田笑女

転居した奈良は坂道登り道
泣きながらつげ口してる隣の子
朝霧をすっぽりかぶった奈良の町
物言えばまたかと思う金の事
今更に逝った夫を思い出す

生駒市　北山悟郎

振り返り千尋の谷とびこえて
ジングルベル　リズムが合わぬ老いの足
あかね雲今日の疲れを塗り潰す
失敗を恐れてならぬ男意地
幾度か岐路に立たされ道一つ

大和郡山市　坊農柳弘

還暦で牛歩牛歩の当り年
二十歳には二十歳の言い分小正月
やけ酒を知っているのか寒の月
窓際で貴方待ってるシクラメン
道楽の域で済まないお節介

大和郡山市　榊原彗心

水引を蝶に結んでまたうれし
十二支も年の始めは畏まる
気まぐれな風にまかせてついて行く
白髪の父がだんだん叱らない
里帰り下戸のオヤジが酒を出す

和歌山市　垂井千寿子

華やかに振袖　新雪踏んで行く
イブの日も合掌をして箸を持つ
暖房の四季知らぬ花咲き乱れ
病室の壁一枚の暮れの町
パスポート残り少なく病んでいる

和歌山市　堀端三男

握手したとたんに名前思い出し
後味を考えここで折れておく
ブランドを着たいとせがむ雪おんな
枯山水いくさの跡は語らない
ふくよかな胸の谷間のキーワード

和歌山市　宮口克子

今年こそ一陽来復期待して
雑沓に意馬心猿を泳がせる
理論より実践度胸のある男
真剣に生きる男のヘルメット
そうですかそれはそれはという笑顔

和歌山市　青枝鉄治

本流のうまみを知らぬ雑魚の群
手の内を曝すと雑魚は寄ってくる
リストラの波に課長も二軍落ち
哲学は持たぬがタダの酒飲まぬ
実力が買われて胸のすく人事

和歌山市　細川稚代

満潮に乗って舟出の帆がかるい
つれづれに会う人でよしこぼれ梅
糸電話ぷっつり切れて外は雪
膨らんでしぼんで夢は叶わない
命の火燃やす明日へ掌を合わす

和歌山市　岩本美智子

灰色の帷空から下りた海
身の裡に握った拳いつか解け
歯を削る石砕くよう削られる
歯科の椅子機銃掃射を思い出す
清濁を合わせ呑めよと噛めぬ歯に

和歌山市　木本朱夏

水になろうと跪いたあとのある日記
スペードを並べてさむい指のさき
恋をした数だけ岬知っている
スリッパに微熱が溜る冬籠り
背凭れのやさしい椅子に流れつく

和歌山市　福井桂香

ばあちゃんになるひ一月二十五日
われものに注意わたし入っています
悲劇にも喜劇にもなる種を採る
溺れそうな人には近づかぬ手紙
恋人が出来ておしゃれになる切手

和歌山市　古久保和子

ピーナツをそうかそうかと剝いている
反抗期やたらに騒ぐDNA
会長さんは四文字熟語好きな人
かあさんの放課後うたた寝してしまう
寒そうな骨　鮟鱇の吊し切り

和歌山市　田中輝子

愉びと響き合ってる山の峰
夕闇といっしょに届く人の恩
遠浅に油断が一つおいてあり
シャンデリアの下で本音の吐けぬ宴
枯野にて耳がだんだん聡くなる

海南市　三宅保州

風向きが変わると消えている男
何やかや言うても風になびく旗
岐路に立つときは私が二人居る
実力を高めてくれる好敵手
老人の割引使わない矜持

岡山市　井上柳五郎

木の葉みな落ちつくし空高くなり
凍る日と母から聞いた生れた日
聞く耳の時を選んで頼みごと
すらすらと代読　淀みない代理
思い出し日記の白を埋めて書き

岡山市　時末一灯

エリートの道を飾るは造花たち
沈黙が攻撃である人といて
リストラにされたか病後の電話減る
成仏できるかなバー街望む墓地
実体の見えぬ会議も夜に入る

倉敷市　田辺灸六

無口でも笑い話が好きな亀
瞑想へピアノがくれる無の境地
吹き溜り烏合の衆となる落ち葉
陣痛のつらさは言わぬ母心
忠告がどすんと重い友の檄

倉敷市　小野克枝

この街の人情が好き風が好き
無遠慮の通る友情ありがたし
孫三人三つの寝相面白い
七歳に「ノックしてね」と睨まれる
長々の無沙汰　幸せですと書く

倉敷市　井上富子

渡り鳥迎え村村活気づき
甘党にちょっと悲しい血糖値
一言で孤独になった桜貝
肯定をしてから首が重くなる
お汁粉に目の無い母の二重顎

岡山県　二宗吟平

ご先祖のお墓　古城址守る藪
倅達の力で出来たわが句集
寡婦となる娘を案じつつ目がさえる
またしても永六輔の本を読み
笑顔一つ老いの私の目がうるむ

岡山県　荻野鮫虎狼

一物を肚に集まる祝賀会
観音の里で欠伸を一つする
孫のため出雲へ詣る用が出来
十二月写真は斜めの方がよい
良心は未だ酔うてない縄のれん

岡山県　小林妻子

雲が流れて古い戦の跡ばかり
燃え尽きた火種よ春の日向ぼこ
薬指　暇もてあます孤独感
伝統の正月雑煮塩鰯
三文印それでも僕の代理です

岡山県　矢内寿恵子

平成九年　生きるシナリオ書き変える
芒の穂ゆれて歴史をさかのぼる
女系三代　揚げ羽の蝶の物語
百羅漢　心ひとつにある祈り
芒野の磁石は西を指したがる

岡山県　山本玉恵

謎解きの鍵が私にずっしりと
半びらきの傘に残した炎の想い
命整え只今始発駅に立つ
空白のページは心のおまつり日
泣き笑いつづけ命の果つるまで

廿日市市　林野甦光

今日は自分あすは他人の為動く
留守電の向う怒った顔が見え
満腹で跳ねる小牛の目が可愛い
店卸し色々合点行かぬ事
ざるそばの味　隣と似て非なる

蜃気楼よ其処は過去かな未来かな
表札が齢を取ったと呟いた
法話聞く補聴器そっと忍ばせて
お医者さまお薬屋さん儲かっていますか
明けきらぬ海　焼き玉の音がする

呉市　槇田英詩

日溜りで浄土の風と逢うている
季の流れ時の流れよ花時計
苗を抱く土柔らかくさせてやる
孫が来て家の音階高くさす
阿呆という言葉がなんとなく温い

竹原市　時広一路

親睦の酒ぐじゃぐじゃになっている
九十キロになったらジムへ行きなさい
黙黙黙たったひとりの陸上部
夫唱婦随は恋の魔法が解けてから
林檎が届き蜜柑が届く友がいる

竹原市　小島蘭幸

これからも婦唱夫随でなあ妻よ
立春へ鬼も交じえて酌む地酒
無人駅春には桜咲かせます
無職にもこだわりがある万歩計
終章のカット椿に決めている

竹原市　古谷節夫

ハンサムな男はみんな敵である
いさかいのもとは秋刀魚の二百円
ポン菓子が鳴って昔がやって来た
夕焼け小焼け母子の影も手をつなぎ
解体の家キイキイと泣くのなり

広島県　藤解静風

秋の酒やたら告白したくなる
平成を測りかねてる鯨尺
もういくつ寝ると年金貰える日
いつ行って見ても役所はティータイム
自叙伝へ兎昼寝のとこは伏せ

宇部市　平田実男

災害地の空に星が輝いて
千人針が私の過去の記念品
腕白の思い出　右手の古いきず
誤解まだ解けずに妻は不貞寝する
旅先の写真妻が笑ってる

柳井市　弘津柳慶

快方に向かい聖書よさようなら
とまり木にシラノの鼻が落ちていた
文学をかじっていますベレー帽
シナリオが狂いお客にうけました
リストラがあって会社を休めない

美祢市　安平次弘道

下関市　石川侃流洞

吹き溜る落ち葉のぬくみ倶会一処
脳内革命ふっと私は無人駅
すすきの穂　故郷も年を取っている
茶漬さらさら寂しきものよ冬銀河
いつ死んでもいいと心の窓開けず

鳥取市　両川洋々

人妻のこころ盗まれそうに干す
父の樹をゆすると父の脈が打つ
忘却という名の風を待つのかい
督促状　時々閻魔から届く
ああ師走サイフも脈が切れそうだ

鳥取市　岩原喬水

あだ名では失礼だけど名が出ない
男です一直線に生きている
順風で無限の欲が罪つくる
老妻の主張は痛いところ刺す
うちの子はいじめる方に居るらしい

鳥取市　美田旋風

ほどほどに道草食って若返る
戦力外へ油断めさるな部長さん
危なげな吊り橋渡る青い虫
風の子が笑顔をくれた草野球
越境した落ち葉掃くのもボランティア

鳥取市　春木圭一郎

置き石のカラス楽しく生きている
政治屋に舌切り雀読んでやる
あほうどり名前に誇り持っている
にわとりも昔は空を飛んでいた
とんびには鷹を生みたい夢がある

鳥取市　倉益一瑶

ふらありふらり生きてみたいな風のまま
墨をする刻の流れにいて気まま
涙した数だけやさし女です
ちょっといい話に出合うバス通り
サザエさんわたしがモデルかも知れぬ

鳥取市　植田一京

不景気を飛ばす門松どんと建て
ローマ字が溢れ方角見えぬ街
故里の森でいきいきして帰る
これだけの力と悟る幕切れだ
頂上へ登る準備の一呼吸

鳥取市　杉本孝男

貝がら節のルーツを抱いた浜に立つ
浮き雲と流れて行った苦い恋
弁舌がさわやか過ぎて疑われ
花時計の秒針今日は早過ぎる
お見合いも素顔を見せて気に入られ

倉吉市　野口節子

ふれ合いが好きで人間やめられぬ
恋人の視線が他所を向きたがる
寝顔には本音で言える有難う
欲望は一刀両断には切れぬ
感謝状束ね母さん有難う

倉吉市　松本よしえ

誰も来ぬ岬で虎が吼えてみる
みの虫に梢の風よそっと吹け
もう風としゃべる気は無い枯れすすき
年金の暮しぎりぎり音がする
痛いこと言う人だから大事です

米子市　林瑞枝

切り花の薔薇よ蕾で居て欲しい
巣籠りの鶴のかたちの居眠りよ
牛の背に揺られる夢も年おんな
茅葺きの大屋根にあった青春
嘘つきは誰かと如雨露で水をやる

米子市　光井玲子

走馬灯がゆらめく古里の岬
星月夜　亡兄のピアノが聞こえそう
余所見してあとの祭りになっていた
乱雑な母の部屋だがあったかい
こころない人がいるいる掃きにゆく

米子市　白根ふみ

残菊のひそかに誰かきてほしい
主役には遠いおんなの紅をひく
脇役で終る痛みがいとおしい
貧しかったころ豊かだったこころ
花筏のせたいものがふところに

米子市　石垣花子

父の怒声　家中響いたときもある
頂点で人の痛みに気がつかぬ
ふところが温いか優しい顔してる
犬や猫ばかり私の後を追う
覚悟して一気に背負う大きな荷

米子市　木村富美子

岬の灯信じて波が寄せて来る
海のこと何んでも知っている岬
ふる里の歌を忘れているピアノ
思い出が痛い貴女が逝った街
朝までに機嫌直していい顔で

米子市　澤田千春

雨のち晴れともしびいつもふところに
黄水仙　岬の果てで群れて咲く
朝の海　昨日のことはもう言わぬ
楚々として控えめなのは山椿
うわついた心に遮断機がおりる

米子市　野坂なみ

痛いものみな受容れて千年杉
折返し点このあとこそが勝負だな
日野富子ならずとも抱く花の乱
私のこころよもっと柔軟に
掃き寄せて見れば思わぬ拾い物

米子市　鷲見正子

わたくしの望みを猫へ打ちあける
踊りたい私にあった靴がない
スピードを落とせば楽に生きられる
サンタクロースの家を知ってる冬の月
助手席で指図しているお父さん

鳥取県　羽津川公乃

深酒を問えばすかさずアイラブユー
太い足気にせず大地踏みしめる
どんぐりがころころ唄う吹き溜まり
のびのびと期待せぬ子のホームラン
しみじみと日本国籍感謝する

鳥取県　さえきやえ

わたしの掌に百合をのこして逝った人（秋女さんへ　二句）
あなたの百合を生涯咲かすことでしょう
似合いの椅子がそっと窓辺においてある
体中が目玉になった加茂遺跡
仏さま　さやが大学決めました

鳥取県　西原艶子

新年のあいさつ絆縒りなおす
こころまで温めて帰る喫茶店
向き合うて女同士の話する
にらめっここころの中でしてしまう
清貧のなかで文化の華が咲き（会長　文部大臣賞受賞）

鳥取県　乾隆風

阿呆気な話へ焚火良く燃える
札束がルールの網をすり抜ける
一族の系図を笠に着るなかれ
百歳へまだまだ二十五年ある
余生なし雑木林で春を待つ

鳥取県　上田俊路

雑念を刈って心の風入れる
刎頸の友こそ宝だと思う
人生ゲーム　ルールが邪魔なときもある
抜群の友との距離が遠くなる
持参した酒でぼやきを聞かされる

鳥取県　新家完司

ともだちの骨を拾えば時雨かな
独り酌めば思い出ばかり冬の酒
雪を賜る馬鹿な私の頭にも
雪の降る街はひとりで歩くべし
ともだちが四人も死んだ暗い年

鳥取県　谷口次男

牛の瞳は昔も今も澄んでいる
先輩が牛のよだれの如く生き
ケラケラと笑って過ごす術習う
ペコペコと夢の中でも謝った
目いっぱい派手な宴の叙勲かな

鳥取県　大角正道

噴水の前で流れてゆく時間
束縛を外すと沖へ出てしまう
迷わずに苦いコーヒー飲んでいる
みそっぱが笑うと父は騙される
記念樹に迷わず水をやっている

鳥取県　土橋睦子（ちか）

福を呼ぶ春の扉を開けておく
み仏に供える花の種を蒔く
掌にあまる幸せ忘れ愚痴を言う
恋もまだ世間並みです炎えてます
火を守り妻のつとめを無事終る

鳥取県　田村きみ子

紙人形知人の家へお嫁入り
初給料で娘がくれた皮財布
ビール一杯あれば機嫌のいい息子
敵もさるものわたしにあだ名つけて呼ぶ
山茶花をいたわるように雪の舞い

鳥取県　土橋はるお

口実をつけなきゃ飲みに行けないの
火葬場の煙突が法螺吹いている
金切り声で女が呼んでいる岬
地獄行きの切符サービスしてあげる
人生バラ色　鯛焼屋しています

鳥取県　土橋螢

生死去来　正月の雪曼陀羅
澄みきった天から落ちてくる恵み
古稀喜寿と歩く天下の風来坊
平成九年元旦の深呼吸
奥さまによろしくという賀状くる

鳥取県　太田幸枝

湯治場の朝カラコロと下駄ひびく
独居老人肌恋し日暮れどき
ニューハーフに女心は分るまい
折々は昔の傷をなめてみる
ズバ抜けた頭脳が走る悪の道

鳥取県　林露杖

立春やぼんやり暮れた誕生日
満八十思いそこばく二月尽
節分の鬼についてけ貧乏神
大根を引いた穴から土匂う
旅立ちの思い歩きの靴をはく

出雲市　尼　れいじ

留守番をおおせつかった休肝日
残り火をじっと見つめているニトロ
用意周到　瓶には水が満ちている
お開きが近づくタヌキ消えている
飽食の烏が時々ホーホケキョ

出雲市　岸　桂子

和服着て今日は心をやわらげる
冬枯れの財布に重い診察券
骨のある言葉でさようならを言う
嘘言えば顔は斜めになりやすい
世の中が乱れ渇きがひどくなる

出雲市　園山　多賀子

初雪が訃報もたらす朝の冷え（久家会長逝去）
人憎むことを許さぬ不整脈
惰性から時々忘れる句読点
軟らかな掌だからそっと握手する
そよぐ葦風の噂に耳を貸す

出雲市　吉岡　きみえ

春を待って春の色を編んでいる
子も孫も寝たか今夜も十二打つ
氷雨ふるこころ残りがあるように
ふたごころあなたへ袱紗さばけない
ごたごたがあってごたごた不整脈

出雲市　板垣　草丘

白鳥が湖岸に鳴いて悲しい日（久家会長を偲んで　三句）
ことさらに刈田に寒い氷雨降る
斐伊川の蛇行が遠い道にする
大根を漬けてのっかりたい気持ち
ゆかぬ娘がいます今年もお父さん

出雲市　伊藤　寿美

朱鷺一羽舞う楢山に雪が降る
降る雪に着ぶくれている母の墓
首の皺かくすスカーフ買うて冬
灯ともしや冬のスリッパ買いかえる
法恩講さん和尚と食べるとろろ汁

出雲市　竹治　ちかし

高級な器は知らぬ飯の味
母の味上手に誉めて子は帰り
結婚をしてブランドに遠く住む
銅鐸の模様に生きているトンボ
町民を一つにさせた出土品

島根県　松本　文子

遠くに居ても病母を忘れぬ毛糸針
孫の号令　六十歳の宙がえり
恩師逝く明治は雲の高さかな
セーラームーンもミッキーマウスも寝せてから
輝いて生きる何にもないけれど

島根県　佐々木　鳳笙

リハビリへ五体投地のように伏せ
私ならこの恥じらいの花を選る
三面鏡覗く偽善の顔三つ
汚職記事苦い薬を飲みながら
空腹が快感となるダイエット

島根県　西村　早苗

お雛さまも孫もはたちの春となる
そんな日もあったわねェと笑える日
やまびこの影かな丘を抜けて来る
雨しとどそしてしずくも春の音
指切りげんまんちょっとおしゃれな雪女

島根県　小砂　白汀

辛夷(こぶし)咲く雪子が架けしちぎり絵か
恋すずめ五万ボルトの電線上
塩かげんその上火かげん水かげん
忙しや見る聞く話すめしも食う
楢山が用意してある長寿国

島根県　藤原　鈴江

親子孫なんと楽しい温泉かな
もう一度夢を見させる曽孫でき
病得て心安らぐ日をもらい
雪の花めでて浄める日がつづき
人生の裏も表も見た病院

島根県　堀江　正朗

片目だが見えたらいいな年の暮れ
年末も同じ歩幅で同じ日々
点字打ちながら八十六の初春
雪しきり軍歌で寒さ吹き飛ばそ
ほろほろと歳が酔わせた昼の酒

島根県　堀江　芳子

喜寿そこにまだ人生は半ばとも
がむしゃらに歩き人生夢に似て
夫に肩揉んでもらっている炬燵
老いの良さ　とぼけ上手に間が持てる
縋られる良さわびしさよ三日病む

香川県　木村　あきら

トンネルを抜けると月が冴えてくる
来世紀夢いっぱいの子の瞳
絵に描いた餅売りにくる選挙戦
助走路に立ち一陣の向い風
漁り火と月が浮いてる凪の浜

香川県　工藤　吟笑

人生の逆転狙う宝クジ
マージャンの貸しご破算でご栄転
Uターンしてふる里の月に逢う
神無月　神サン留守に秋祭り
先代の家が過疎地で眠りこけ

香川県　成重放任

戸を締めて出る七人の敵の中
古里の歴史を語る戸の軋み
平和すぎ裏に汚職が付きまとい
庭訓をまたも破った午前様
馬鹿になるママの笑顔が客を呼ぶ

香川県　川崎ひかり

語りつぎ忘れてならぬきのこ雲
姿見がほこりかむっている師走
丸く住む支点 力点 作用点
すんなりとのびたしもやけ知らぬ指
とは言えどやはり気になる世間体

香川県　池内かおり

青天の霹靂一通の手紙
抜けがらになって一週間が過ぎ
泣けるだけ泣いたら起きて来るが良い
強くなれそしてやさしくなるだろう
生きるとはあんなに泣いて食べること

松山市　白石春嶺

寒鮒を釣る風の子の赤い素手
思い出のコケシ訛りが聞こえそう
伝説を背に団体の記念撮る
約束を違えず土を割る新芽
ロボットが欠伸　休暇が多過ぎる

松山市　宮尾みのり

口笛が上手に吹けた懐かしさ
万華鏡だったネ駄菓子屋のケース
情報の海で孤独をもてあます
わたくし流　全うしたい茜雲
九十の姑と義妹に挟まれる

松山市　丹下美津子

お互いに苦手があっていい夫婦
手の皺がとても気になる晴れの席
耳遠い母へ速達便にする
妻の目が図星言い訳通らない
街頭芸人　面白おかし天王寺

西条市　片上明水

頬かむり外し農家に春の風
春祭りホウレン草が伸びたまま
雪とけて都はるみがまちへ来る
店閉めた訳の一つを口にせず
アルバムのこの人と遇う朝の駅

今治市　越智一水

陽だまりがあるから村を離れない
野菊折る妻を見直す肩の線
老妻が腕組んでくる夕紅葉（愛媛面河渓）
紅葉のジュウタン踏んで愛つのる
そう言えばそうにも見える虎の滝

今治市　野村京子

いそがしい主婦してるのにイヤリング
煮つまった愛　大根が辛すぎる
冬の海きれい事では済まされぬ
どんなことも許してくれて恐いはは
図書館の空気たくさん吸ってくる

高知県　赤川菊野

戦争が生んだ哀しい大地の子
まんじゅしゃげ私に過ぎた亡夫だった
鍋ものを一人でつつくわびしさよ
中国の壺へ日本の新春を生け
桂浜　土佐の顔です竜馬像

唐津市　田口虹汀

倖せが続くと人は眠くなる
倖せな人形　首がよく回り
本当の嘘は言わない方がいい
家の内裏は七ツ違いで皺がない
降る雪に感謝炬燵の味を抱く

唐津市　仁部四郎

信号を見ていて学ぶニヒリズム
思惑が絡んで蛇行した噂
お薬はのんだと書いて日記すみ
逆説で叩くともろい法の壁
選挙カー結果としての嘘を撒き

唐津市　山口高明

今年も同じ顔触れ名士劇
うわばみの噂おんなも二十八
産気づく客に慌てた運転手
若い日の俺を見るよな子の謀反
女房に前借りしてる煙草銭

唐津市　市丸晴翠

別姓の夫婦を縛る独りっ子
訂正印ばかり目立った年が行く
やせたのは消しゴムばかり年の暮れ
微笑みをまぶしく受けて席譲る
たっぷりと牛の歩みで辿る古稀

熊本市　永田俊子

ニギニギのことは知らない仏さま
ロボットが給料袋をにらんでる
句読点打ちそこなった子の乱れ
夢の字を大きく書いてる障害児
遺言書書いていよいよ冬の章

熊本県　高野宵草

無味無臭ヤボな野菜が幅きかす
水虫も食べさせている歩合給
有名な方もほらほら白髪だよ
暇だから食べて余生の胃をこわす
叩かれて父老いたなァという痛さ

遠近両用だけでは嘘を見抜けない
風化した絆を頼り老いてゆく
発信器つけたい靴が脱いである
夕焼けるわたしの夢も夕焼ける

砂川市　大橋政良

少年の辞書から消えてゆく活字
花咲かぬ茄子でポッカリ父が逝く
縄文のまほろば朝と語り合う
晩酌に不調の端がちとこぼれ

弘前市　小寺花峯

骨休め兼ねた研修出してくれ
五グラムのレモンが朝に活を入れ
幸せはレモンの香る朝のお茶
トラブルが出そうサッカー二国場

弘前市　須郷井蛙

憧れの登山を神は嘉せらる
アンデスの山むかしのゆめが甦る
マチュピチュ遺跡　悠然と這うトカゲ達
おとぎのくに煌く彩の樹氷雲

弘前市　櫻庭順三

白血病憎い憎いと日記つけ
門礼にデカイ声出す子が二人
真実を通して逝くと決めている
お年玉作り孫達の笑顔待つ

八戸市　島田昭治

茶も水も喉を通らぬ闇にいる
献上のリンゴ運良いことですか
恋破れアンコが冷たいタイ焼き君
言い訳の職業病がなおらない

青森県　諏訪柳々

三つ指がいつしか足で戸を開ける
正信偈院主の調子やっと追う
大聖寺　寺院の萩が人を惹く
雪吊りがよくて兼六園に来てる

羽咋市　三宅ろ亭

振り向けば亡母の姿に似た他人
雲晴れ間ちょっぴり無理を言ってみる
風向きが雲の顔色変えてゆく
還暦へ八十三の回診医

富山市　島ひかる

故旧あり野麦峠の村に住む
総理だけやっと名前を知っただけ
この頃は三猿主義でやってます
はしくれの生業なれど子にのこす

大阪市　大野武太

鬼ごろし女ごろしはおまへんか
乾杯のグラスの向こう幸がある
カレンダーあと一枚ははがないで
皆んな嗅ぎ松茸の味うせないか

大阪市　寺井東雲

大阪市　大塚節子

或る日ふと歩幅のせまい父を見た
よっこらしょ炬燵の母を猫が呼ぶ
お向かいと四時間ずれて夜の冬
群生の水仙あっちむきこっちむき

大阪市　井上白峰

大海に出てふる里の井を忘れ
喉にまで来てる本音が吐き出せず
生き残るために白旗振っている
点と線辿って人生黄昏れる

大阪市　津守柳伸

束の間の余情コロコロ舞う枯葉
食べ上る雑煮年々小さくする
郷愁や大根棚は雪模様
焼きガニが匂う民宿蟹三昧

大阪市　町田達子

ささやかな誕生　味コースで祝う
冬景色の中に采女がふっと浮く
仏像のことなど女将と小半時
一輪がツンと燃えてるバラの自負

大阪市　稲木凡子

皆勤の私にエール贈りたい
半分ずつにするものさしがやわらかい
平凡な暮しがなんとむつかしい
幸せは二人の娘に背負われる

大阪市　板東倫子

キリストも仏陀も見えぬ虚飾の目
ひとかかえの空気の重さ羽毛ぶとん
もういいかい　まあだだよとは死ぬ話
私にも私を賞めたい時がある

大阪市　松尾柳右子

孫々と増えて財布は細り行く
香蘭峡一緒に行った友が病む
焼ガニに魅せられ丹後また訪ね
雑炊を今は御馳走だと思う

大阪市　川端一歩

地下延伸わが家建つよな嬉しい日
新百景大阪ドームの仲間入り
山登り今年も行くよと年賀状
古日記白いページは無言の訴

大阪市　清水絹子

タラップを降りて掛け金おしくなり
救急車の友よも一度眼をあけて
乱筆で遅れおくれになる返事
木枯らしよ吹けふくほど温し春の風

大阪市　渡部さと美

ぐんぐんと天をひとりじめするカイト
男子誕生光さし込む新春の膳
部屋丸く掃いて話もまるく聞く
片鱗の鬼が美人の眉に棲む

脇役も宴会だけは主役です
父親は仕送りマシンで年を取り
円満な家庭夢見た薬指
ドラフトは人権無視の夢芝居

大阪市　川内叭笑

国境に木の橋架かり犬が行く（オーストリア・ハンガリー）
子の焼いた茶碗とろろがよく映える
東野田ここは父母住んだとこ
そのうちに漢字を全部忘れそう

大阪市　玉置英子

初みくじ半吉とでるこれでよし
初鏡しわの顔さえあらたまる
つらい時　心に開く母の辞書
人生の実りがこれか佗び住居

大阪市　奥田良子

退院を祝うてくれて日本晴
入院ベッド　パジャマの変化で季節知る
しっかりと生きろとやさし車椅子
ちる紅葉これも栞と二三枚

堺市　中野欅子

一瞬の錯覚だった過去の恋
消去法　最後に残るのは愛か
的を射ているから笑えないジョーク
白昼夢さめて錯覚だけ残る

高石市　浅野房子

オリーブと分教場が寄り添うて（小豆島）
再会も別れた時の中之島
三日振り小春日和のガラス拭き
片思いを白状してるクラス会

豊中市　月原方郎

降り出した雨で本音が流れそう
温泉の下駄焼き入れた宿の文字
ときどきの嘘で本音をさそい出す
春夏秋冬　馬の背中で暮す騎手

豊中市　江口明光

十二月八日を知らぬ人ばかり
寒い夜　風邪にかこつけたまご酒
消し炭を知らぬ若者アンティーク
手早くはもうゆかぬ辞書カタカナ語

豊中市　湯浅馬洗

終章の旅を飾ろう花造り
亡母の旅あの世も桜咲く頃か
木守柿　赤一点の青い空
秋の雲　芸術超えたたたずまい

豊中市　井上直次

木蓮の露の匂いに置く孤独
藪椿恋の破滅のように落ち
オシロイ花はにかみながらしおれてる
利口なるカラスに行革聞いてみよ

池田市　藤井計光

返す傘そのまま借りる雪もよい　茨木市　堀　良江

一日が十二時間の年の暮れ
十二月福井のらっきょ届く頃
大つごもり今日一日という日なり　茨木市　島元ふみ

この頃が旬だったねと写真繰る
お互いの年にあきれる老夫婦
見たくないもののひとつに娘の白髪
反骨の子も世渡りに丸くなり　高槻市　芦田静江

大津絵の鬼を信じる豆の数
帰山式　日蓮を抱く水しぶき
牛わらう今年招かれ桜花祭
千両を担う赤ベコ春を待つ　守口市　森川まさお

尼寺の一樹のもみじ艶やかに
がに股の漁師が海の怖さ言う
重文の旧家の畳冷えている
足重し枯れ蓮の池波立てず　寝屋川市　酒井勇太朗

会うだけが聞くだけとなり買わされる
八十路まで生きて年金元を取り
ご苦労さんお疲れさんと第九聞く
忘れたいことほど何故か夢枕　寝屋川市　坂上高栄

星飛んで何処か誰かが身籠れり
血統書付きの犬ですちゃんちゃんこ
読めぬ字の系図を覗く虫眼鏡
寝そべって牛は思案を噛みもどす　寝屋川市　平松かすみ

寒中の裸はじっとしていない
野鳥来てうなずきながら食べている
成長をしない我が家の寅の子よ
七歳のいちばん好きなヨーイドン　寝屋川市　太田とし子

今年こそ今年こそはとお正月
オイと呼びハイで築いたお城です
嫁の留守みんな無口で気をつかい
元気だと褒められ齢がまた走る　寝屋川市　森　茜

シャル ウイ ダンスふわり綿雲てのひらに
外反拇趾にやさしい枯れ葉ざっくざっく
嫁と娘の子育て談にわく炬燵
這い這いで末っ子仲をとりもちに　寝屋川市　北岡波留吉

亡母の味染み込んでいる欠け茶碗
前例にこだわり進歩遅れ勝ち
悪妻を庇って貝になる嫁御
瀬戸際で巧みに摑む時の運

寝屋川市　太田藍子

大見栄を切り過ぎた首戻れない
すげかえた首も次々汚れてる
食べたいと思い込んでたほどでなし
お誘いが待っていますの春よ来い

寝屋川市　籠島恵子

心のこりに師走の風が背なをおす
うまいうまいと言われてつくる茶わん蒸し
義姉さんの手の平にのる帰省中
夫婦して実家の影がうすくなる

寝屋川市　冨山ルイ子

眠られぬ長い夜にふと過去のこと
業火炎ゆ我が身焼きつくされるまで
相身互いだからと友の優しい手
懸命に生きる私を少し褒め

枚方市　二宮山久

再会の約束たしかな車窓
人柄をかわれて受ける役の数
出張の宿で生きぬく人生考える
人生のくずにはならぬ趣味多忙

枚方市　八田敏

平成の孫に明治の子守歌
秋彼岸　僧の読経を亡母と聞く
手を抜いて今日もおでんの年の暮れ
医者通いせぬ日は寝てる自家用車

東大阪市　森下愛論

九十の春自信へ追い風加勢する
言うだけは言わして上座揺るがない
潮どきが過ぎて才女はまだひとり
初夢を詰めた袋を持ち歩き

東大阪市　西村哲夫

元旦はおせちお雑煮　猪口で酒
どこかしら嘘でかためた娑婆の縁
無駄だとは思いたくない業がある
罪人はドロ舟乗らぬ智慧がある

東大阪市　安永暁子

ご無沙汰を書きたくなって雪がふる
福豆も年の数など食べられぬ
重そうに幸せそうにサンタさん
酒ずきのさよならできぬ午前様

藤井寺市　高田美代子

口喧嘩はいつものことで仲がいい
意気ごんでみても六十路の靴の音
正直な人で困った顔をする
言い訳も愚痴も嫌いで竹が伸び

藤井寺市　福元みのる

左脳錆びて右脳眠ってる
あれ以来　運も尻尾を捲いたまま
改革は自分にもわが家庭にも
直感や本能活かすわが暮らし

羽曳野市　酒井一壺

あっさりと手遅れですと聴診器
あの世へは妻より遅く行きたいよ
トンネルへ最終列車汽笛消ゆ
玄関の音に躾がよくわかり

八尾市　高杉千歩

また一つ歳を重ねて冬の底
カルシウム六〇〇ミリへ桜えび
山田かまちに溺れ動かぬ置炬燵
同窓会　絶交の友に奢られる

八尾市　高橋夕花

再びの友の笑顔に新春近し
美味しいもの頂き素顔まるくなる
茶を点てて袱紗さばきも鈍くなり
地獄絵図拘わりもなくテレビ消す

八尾市　大内朝子

新しい電池をいれて朝を行く
ノックされ恋の小窓は紅くなる
まのぬけたわたしに欲しい地獄耳
編みかけのセーターほどく未練絶つ

八尾市　生嶋ますみ

冬帽子少し斜めに洒落てみる
地下街を出れば時雨の過ぎたあと
大地摑むかたちに軍手落ちている
親指をまたもさされるバラの刺

岸和田市　芳地狸村

紅葉に染まってくぐる数珠の門（赤山禅院）
紅葉の彩にとけこむ枯山水　（曼殊院　二句）
あの世からおいでおいでと幽霊画
情熱が満ちてる胸があたたかい

岸和田市　原さよ子

眼科にはおともが出来ぬ文庫本
暮れだなと思う激安チラシ増え
耳打ちの耳朶くすぐるいい話
安らぎがほしくて少し墨をする

岸和田市　古野ひで

長所とも短所とも言う紙一重
神様に初水捧げ無垢になる
十二月　山へ登って見たくなる
十二月せっせせっせと風が吹く

岸和田市　長谷川呂万

核心に触れると矢弾飛ぶ会議
銀行のカメラ内側見張れない
いたずらな女神が仕組む老いの恋
年賀状終えてゆとりのストレッチ

岸和田市　藪野けい子

新米を炊いて忘れたダイエット
外国でお産いそいそする支度
ワカバマークつけ助手席で肝冷やす
当選にダルマの目玉筆選ぶ

貝塚市　池田寿美子

新しい夜明け地球を包み込む
乾杯にグラスの向こう倖せを
ブーメランに信頼感を取戻す
残り火は水仙の香に負けられぬ

富田林市　池森子

終章は我が温もりを身に纏い
恩のある首をゆっくり座らせる
太陽と月を情けにして生きる
だらだら坂だった薄情な月よ

河内長野市　植村喜代

病院出てなんとわびしい冬の空
息抜きに安い買物誘われる
怖い人とも知らず信じてる夫
嘘を覚えてどこまでも嘘をつき

和泉市　岡井やすお

お役所は二月三月おいそがし
国民を勉強させるビッグバン
お前もかラグビー界にスポンサー
官を見てわが振り直せ立法府

大阪府　籾山隆盛

夫婦独楽よくぞと思う回りよう
経文の如く句集の丸暗記
新調のサイズ合わないままの服
シートナンバー生存の運　死の不運

神戸市　山口美穂

老母と犬と日向ぼっこの年の暮れ
わたしへのご褒美テレビ買い換える
銅鐸のメッセージがよくきこえない
生きていることへの感謝初日の出

西宮市　菊池トミヱ

初日の出　燦々と受け福寿草
過ぎし日の悲しさ残し福寿草
目に見えぬ壁めぐらせて反抗期
風の音独り暮しにじんとくる

西宮市　亀岡哲子

ささやかなゆとりコーヒー飲む部屋着
カクテルを一つ覚えて聖夜なり
薄い爪苦労が足りぬかも知れぬ
テレビ出演いつものパパと違うパパ

西宮市　池田善守

六十になって初めて赤を着る
古傷は思わぬ時に痛み出す
秋の夜パントマイムの老夫婦
他人にはすんなり咲いた花に見え

西宮市　刈田泰司

裏方は裏方なりに虹を見る
ひとり酒隅に落ちつく席がある
運だとは思いたくないアーチスト
深酒をとがめる妻でない女

伊丹市　小熊江美

柳友と紙すき体験した旅行
人生いろいろ一人住まいも良い心地
主婦達のストレス発散良く喋る
運動会一番びりは家の孫

宝塚市　中田純次

ご法話にうたたね誘うありがたさ
心臓も肺も眠たい時がある
眠れぬ夜も一度辿るこぞの旅
名人事職場に活気とり戻す

奈良市　米田恭昌

旅仕度出張慣れしていて悲し
二人して演技していたオフィスラブ
伏竜と言われ続けて黄昏れる
冬枯れて植物園に雨しとど（万葉散歩）

大和高田市　岸本豊平次

毎日の服薬　病と仲良しに
ぬか漬けが古漬になる老い二人
禿げ具合　白髪を比べ同窓会
菊花展どう見分けたのか金銀銅

奈良県　長谷川春蘭

賀状見てたぐる追慕の幾山河
年賀状返事来ぬ友今如何に
去年今年　牛はよだれを流してる
息白しぶっきらぼうの返事待つ

和歌山市　福本英子

のど飴を一ついただくバスの席
涙もろくてすぐに握手をしてしまう
つつましい膳にたまさか載った蟹
森を出てこけし生命の洗濯に

和歌山市　桜井千秀

グループの中で見抜いた人間味
チンチンとオアズケだけは教えねば
沈んだり浮かんだりして流される
褒め立てるお方ご遠慮申し上げ

和歌山市　池永正甫

明星ニコリ今日はいい日になりそうだ
堂々とお国ことばで語る齢
五十年前は全く時代劇
明るさも冷たさもあるガラス窓

和歌山市　玉井豊太

曲りなり心が座り綿帽子
ビール注ぐ身振り手ぶりに愛がある
コーヒーが浮いた話に耳たてる
祝盃へ苦戦の山が高かった

和歌山市　山田高夫

ご来迎まさにこの世の絵曼陀羅
忘れまじ世界遺産のモニュメント
二度とないチャンス逃がしてから落ち目
それしきに動じはしない芯柱

和歌山市　山口三千子

水面下次の下絵が出来あがり
嫌なことを息子の電話中和さす
裏道で思わぬコント見てしまう
心から信じた道に裏があり

和歌山市　堀畑靖子

無念さがわかる私も落ちこぼれ
無抵抗主義はだか木の強かさ
生き残りゲーム白髪が増えてくる
別れ急がぬと魂抜かれそう

和歌山市　榎原公子

秋寒に耐える電話の鳴らない日
脚光は他人様だけのものじゃない
一日をこじ開けて持つティータイム
飛び出して失くした夢に逢いにゆく

和歌山市　玉置当代

腰下ろしバッタと遊ぶ草紅葉
一言がとても嬉しいラブレター
これでよしこれでいいよと独り言
初日の出揃うて拝む夫婦箸

和歌山市　川上大輪

方位学行きたい方を吉とする
大海も知らずチョベリバ繰り返す
人間に化けると元に戻れない
原点に戻ると腹が減ってきた

和歌山市　川上富湖

雪花菜煎る豆腐のカスと言うなかれ
チリ紙交換使い古しの札を出す
飛び込んだ噂真っ赤にして流す
試着室で鏡はいつも舌を出す

岡山市　花田たけ志

わが道を通せば越せぬ坂がある
無造作に承諾したがいばら道
したたかさ丸味を帯びて来る余生
趣味ひとつ減らせと齢に叱られる

岡山県　岩道博友

回り道　寄り道　戦国史を尋ね
久し振り魂引かれ法話聞く
温熱療法　帰る野道は師走風
お互いに笑って師走にくじを買う

岡山県　江口有一朗

二度と来ぬこの世ゆったり生きてやる
未だ一つ夢を見つめて八十路坂
子を想う親の心の片想い
群れ離れ鴉一羽の物思い

岡山県　福原悦子

人脈を持たぬ軽さで生きている
ワープロに語らせておく独り言
公園で遊ぶ子供が減って冬
ピアノから遠いロマンの彩揺れて

岡山県　大石あすなろ

一つ目の山で早くも妥協する
ときめいて人指し指で愛と書く
五目ずし世間話もまぜ合せ
未知へまだときめくものを持っている

広島市　森田　文

念ずれば冬の樹木が花をつけ
沖縄の渚　軍歌か子守唄か
むかし寅という男じつは菩薩かも
遺言の手本上手に書いてある

竹原市　森井菁居

天寿全う未練はあった百二歳
処置室があふれ日本が病んでいる
火の女ばかりの中で目立たない
バルドーの皺が不思議な週刊誌

竹原市　岩本笑子

天下太平サンマも少し高くなり
百人一首のゆとりを少しいただこう
何ぼでも忘れることがある師走
ティーカップ小指も遊ぶことがある

鳥取市　前田一枝

粗品出す列に何でも並びたい
胸張っていばってみても無一文
宝くじ今日は神棚からおろす
まだ脈がありそう口説き直すかな

鳥取市　西村黙光

暮れなずむ浜辺へ老いの蜃気楼
酔ったふり寝たふり爪を研ぎすます
置き炬燵向き合いながら見るテレビ
同人誌プライド重くのしかかる

鳥取市　坂田和歌子

朝見の写真我が家の宝なり
折に触れ綺麗な花を観ています
紙風船民話を含みふわり飛ぶ
風化する頑固な父の力瘤

倉吉市　米田幸子

古狸などとあだ名をいただいた
風雪に堪えた女の座り胼胝
札束の餌にはきっと食らい付く
数え唄忘れた毬が迷い込む

倉吉市　最上和枝

部品ガタガタ心は若いままでいる
バラの棘触れて男の不整脈
母の膝リンゴ一つを置き忘れ
家事育児抜群若いお父さん

倉吉市　淡路ゆり子

一日を咀嚼しつつ牛の歩み
恵方の海に手放す亡父と亡母の船
そして歳月夫婦の坂はまだ途中
別れ際　母の白髪を二本抜く

米子市　政岡日枝子

花開く音が本から伝わらぬ
先々代が趣味で開いた古本屋
背表紙の金が栄華を物語る
赤ちゃんの絵本いつでも読める位置

米子市　青戸田鶴

晴れ上がった今をだいじに過さねば
文化財の家で風にはすぐ響く
思考まで老い時々の風が沁む
おさまらぬこころに鍋を磨き出す

米子市　田中亜弥

折々に見せた笑顔は薔薇のよう
親亀をめでたい席にすわらせる
七十一歳今もミヨチャンにてとおる
隣から紙飛行機が着陸す

米子市　中井ゆき

突然に雪がおどしをかけて来た
これからは春よ春よとくらすだろう
どん亀の意地さ峠も越えて来た
冬銀河しみじみ思う遠い距離

米子市　木村春枝

折々に母の仕草を真似ている
アンティーク探し出しては磨いてる
遠い絵にピアノかすかに鳴っている
街の音変えてゆくのは誰だろう

米子市　永井三津子

扉一枚　表と裏の顔があり
ハートよりお札の束が温かい
ウロチョロと乳房の奥に夜叉が棲む
弱いから涙隠して生きてます

鳥取県　津村八重子

茶柱が立ったよ今日の此の佳き日
よい種を選って新たな土にまく
春の夢おぼろな影が追ってくる
言う事のないありがたい世に生きて

鳥取県　黒田くに子

生かされて折々使うありがとう
大工一筋　師として仰ぐ父の背な
天皇を仰ぎ畏れた日もあった
真珠めく悔いの涙が美しい

鳥取県　石尾かつ乃

おはようと言って昨日をご破算に
かえり咲く捨ててはいない肝っ玉
その気持わかるわかると酒交わす
初春を迎える準備　孫や子と

鳥取県　西川和子

当らずさわらず冷めた紅茶を飲んでいる
冷え込みに母のおでんの味が増す
一杯のビールに眠くなって来る
説教はこのへんにして飲み直す

雲間から射す太陽のおかげさま
老いてまだ喉ときめきを響かせる
夕焼けの鐘楼おだやかに打とう
長寿だな愚痴も怒りも忘れ去り

鳥取県　乾　喜与志

資格などいらぬ技術で勝負する
良い声で唄うと嫁に来いと言う
再起した日を記念日にして祝う
罪ひとつ抱いて修業の旅に出る

鳥取県　幸家　単車

ふところの十八番が急きたてる
忘れよう犬に噛まれたことにして
傷心を癒やす港を母はもつ
冷えかけた溝を笑顔の子が埋める

鳥取県　石谷　美恵子

売薬で効く慢性と居る師走
濡れ落葉小春日和もよう舞わぬ
薬害の内に薬の飲み忘れ
世は移り寂しいものに餅つき機

松江市　舟木　与根一

男です疲れた顔は見せません
プラトニックラブ私のエネルギー
描いた絵に心の乱れ教えられ
花一輪ハガキの隅に描いて出す

松江市　柳楽　鶴丸

ストーブの回り噂がうわさ呼ぶ
浮き草の行き着くあたり我が港
我が余生寒ざむとしたすき間風
医学書で医者の知らない気の病

出雲市　久谷　まこと

農政に泣いても鍬は捨てられず
残業の疲れを酒がもみほぐす
僕の影踏んでいるから動かれず
ぶった手がはっと後悔して痛む

出雲市　板垣　夢酔

出土した銅鐸町が燃えている
笑わない犬だが悲しい顔をする
相談へ私も困る年の暮れ
いやいやで登った木から落ちた猿

出雲市　小玉　満江

平和だなころころころと豆を煎る
はいはいと打切り上手な妻に負け
優しい人をまた連れてゆく冬の風
卵酒風邪の機嫌を取りながら

出雲市　石倉　芙佐子

出稼ぎの軍手も洗う感謝の日
いい日柄こたつ布団も派手にする
飼主を信じ近よる牛の声
紙よりも軽い政治で困らせる

出雲市　小白金　房子

銅鐸が語る出雲の大ロマン
ブランドと聞くとまたまた引き返す
ふところに似合わぬ見栄を追っている
酔うほどに休肝日の効きめ出る

出雲市　富田蘭水

手話の子の瞳に希望笑いかけ
真実を語れば絆やせて行く
札所寺女の業を捨てに行く
友情を踏台にした棒グラフ

香川県　山地マツヱ

りんとして一人ぽっちの寒卵
ネオンの街へ渡る極楽橋へ佇つ
結論を出してゆっくり考える
晴れた日がいいな背中があたたかい

今治市　矢野佳雲

接待に慣れて身銭の切れぬ酒
人生にこんな日もあり父子酌む
つっかけで曲り角まで見送られ
一灯を残して闇を深くする

北九州市　梅田宣司

山と海合せ持ってた亡父を恋う
あれこれと持たせてくれた亡父母の愛
昇龍とはゆかぬがわが松重みよし
身ぎれいな妹藍の心をいつも着て

唐津市　浜本ちよ

鳥の群　囀り交わす楽天地
サボテンの鉢は満開部屋温し
最高の魅力で並ぶショーウインド
初冠の阿蘇へカメラが慌て出す

熊本県　岩切康子

「サークル檸檬」句会報から

文には散文と韻文とがある。詩歌はもとより韻文である。韻文とは韻律を整えた文であり、韻律は辞書によれば、「詩の音楽的な形式。アクセントによるものと、和歌・俳句などのように音数の形式によるものとがある」とあり、英語のリズムにあたる。およそリズミカルでないものは、詩歌と言うことはできない。

田中　正坊

五七調や七五調というリズムはこわい。指を折って、音数を合わせるだけで、どんなにしょうもないものでも、それなりのカタチになってしまうところが怖い。だから俳句や、川柳や、短歌を作るときは、そのへんに十分注意しなくてはいけない。リズムがいいだけでは詩ではない。内容があって、表現に長けてこその詩なのである。

小林　一夫

おねがい　各地の句会報から、随時、転載したいと思いますので編集部あてに句会報を送ってくださいますようお願い申します。なお、紙面の関係上、適宜、抜粋・要約することもありますが、御諒承ください。

（編集部）

自選集

庇いあう悪に公的助成金
一泊二日鬼が薬を持ってゆく
福知山ズルソックスの国訛り
寒の冷え鬼がいただく鬼ごろし
銭湯の煙突さむいまま冬に

高杉鬼遊

川柳の道大臣に励まされ
大臣の名前表彰状で知り
賞状へ仲間の顔が透けてくる
大臣賞古来稀なる年となり
東京の空の青さよ授賞式

小林由多香

すってんころりんと奈落へおちた
ゆさぶってみてもなんにも落ちてこず
十二月とつぶやいてから眼を瞑る
夢をみていたら今日も昏れた
友だちが来て現世に引き戻す

小出智子

陽よ風よ僕も自然の一部分
聞く耳がまだついてない青リンゴ
祭壇はいま月の出を待つばかり
たましいを遊ばせている月の弦
情念や月は芒を焼き尽くす

河内天笑

ぽちぽちと椿あつめて冬支度
気短の椿から目が離せない
母や姉の指紋　椿の葉の裏に
椿落ちてからは途方もなく長い
同じ世に咲けて椿と手をつなぐ

八木千代

初恋がキラキラ光る瀬戸の海
老い二人ツリーひそかに点滅す
住所録記念切手の友を選る
傘寿まだ大きな夢を見ています
ハーバーランドお伽の世界に来たようで

松川杜的

新年の賀会でお祝い受ける幸
長生きの幸せ　孝行してくれる
統計は女性上位で結婚難
少子化対策　政治のん気そうに見え
春を待つ夢はふくらむ詩の宴

藤井明朗

躓いた石の痛さがわかる愛
夜行性　朝には弱い尾骶骨
骨休めしてます真っ昼間のテレビ
少子化のつけが不安な鬼瓦
いつの世も私腹は痩せている下級

恒松町紅

泡立草　瑞穂国を占拠する
食欲にまだ忘却の兆がない
ライバルが健在ファイト湧いてくる
完敗の姿で点滴受けている
みなし児に山彦という味方あり

月原宵明

大きなる夢が大きな実を結ぶ
志のある人生は美しい
いざと言う時に伝統ものを言う
雨の街人に疲れて人を恋う
野心家の能弁なのが気にかかり

奥谷弘朗

夢ならばお金があって未亡人
会合に欠かせぬとぼけ役が居る
ドロドロと過去いよいよの終盤戦
お上手の一つが言えた自己嫌悪
ふところが寒いわたしの持病です

遠山可住

手で招く雪女には近寄れぬ
ボランティアの妻送りだし留守まもる
脳細胞の留守へ自治会もめてきた
手を洗い菩薩抱きたい母性愛
残り火をせかして霧が背なを押す

小西雄々

倖せは心に迫る美に出遇い
戸惑いは史観論議を決め迷い
巨視的に歴史を視よう考えよう
人類の愚行　戦争禁止せよ
最大の愚行反省するばかり

野村太茂津

橋渡る下駄の音だけ耳にある
通ぶって鍋の湯気顔へくる
雨の日は雨の音たのしんで
生きてきた道それぞれに花があり
腹の立つことばかりを覚えてい

正本水客

地図にない島も浮かんで好い眺め
年よりをいたわる言葉嘘がない
意味深長うれしい謎がとけてくる
どう見てもしとやかでないLサイズ
うっすらの化粧に色気ある喪服

辻　白渓子

福寿草咲いてはじまる花暦
よい年へお宮の鈴が鳴り止まず
発車ベル車掌の手袋真っ白い
音もなく朽木飾った雪の花
初釜の床に一輪紅椿

藤村〆女

もう一つの杖は元気な女房殿
杖ついて片手で拝む初日の出
来年のことかと軽うあしらわれ
投函をして少し言いすぎたかと思う
祝われてそうかそうかの誕生日

野田素身郎

一筆啓上　寒気が少し酷すぎる
まどろめばはは笑顔の懐かしさ
真心と名の付く駒に負けている
さそり座の運を器用に走り抜け
一本の指を哀しむ冬ごもり

波多野五楽庵

白寿まで生きたら祝いしてもらお
呆けたなと口に出る程どじを踏む
名声はないが誇りで生きて行く
ベストセラーやそうな私も読んで見よ
体調よし自転車のまま坂登る

金井文秋

ほっとけば良いのにひと言口を出し
人生の地図が破れてきて困り
土壇場ですんなり決まる金の嵩
弱点を知ってるように酒をつぐ
こだわりを捨てられぬまま電話

児島与呂志

九十年なんぞは夢の夢の中
五十年妻に死なれた日を憶う
言うだけは言うたとさり気ない返事
ませて来た曽孫に教えられるもの
初日の出見に来た海は雲ばかり

黒川紫香

友情も通じぬ警護の中に居る
有り余る時代の夢に未だすがり
彩重ねだんだんイメージから逸れる
せんど迷うて何も買わずに出る母娘
なみはやがオリンピックを招き寄せ

西田柳宏子

川柳太平記（225）

川柳の群像

桂枝太郎

東野大八

落語家で川柳人という異色、枝太郎師匠宅へ随分と昔、一度だけ訪れたことがある。

東京文京区根津権現さま近くの門前町、江戸期には根津遊廓が軒を並べていたところで、その横丁のまた横丁、いわゆるその長屋の中であった。落語でいう熊さん、八さんの世界である。

「噺家（はなしか）の道に入ったのが23歳の時でね。師匠は三代前の古今亭今輔だったが、まず初手っぱなは〝夏の医者〟てえつまらんはなしで、こんなの仕様がねえ、別口の面白い話はござんせんか、といったら大目玉を食って、そんなのはおれがやってるよ、という次第。いわばこれが落語のセオリーって奴で、その話し方のコツを会得しろというワケさ。江戸前といやぁ柳多留で、これを十回以上も読みこなしていなくちゃあ、川柳家じゃねえ、柳多留の縁からはなし家になっちまったというのがスジだな。十七歳ごろから古川柳にかぶれて川柳をかじり出した」

さすがプロの噺家、歯切れよくスタスタと小気味よいおしゃべりが続いた。

本名は池田芳次郎。日本橋は人形町の薬種商で明治28年5月7日に生れ、寄席好きの親父のおかげで町内近くのトキワ小学校のころからこの次男坊は、家業筋の明治薬学校（現明治薬科大学）を出たころには、ついに寄席気分が抜けず、噺家の道へ走った。最もその直接のキッカケは関東大震災にある。

焼野原のお江戸でめしのタネは芸能界に限るという家の方の見立てもあって、父親が出入りしていた古今亭今輔師匠に弟子入りした。時に三十歳というのだから、この道では大変なオクテだった由。芸名ははじめ宝輔、呆助じゃあるまいとすぐ助好、雷蔵、小金治と歩き出したそうだ。

この修業入りから十年前の大正二年ごろ、イキ筋の川柳家で知られた平瀬鳶雄に誘われて、井上剣花坊の柳樽寺一門に名を連ねた。

やがて川柳千鳥会同人にもなり、終戦後は芸能界の本場である大阪に移り、川柳せんば同人から番傘同人に加わった。そんなことから東京へ戻り、江戸前枝太郎の本領を発揮、川柳人協会や川柳長屋連の店子、柳友会、十二草番傘、中央区川柳連盟の各顧問や、鹿連会仔鹿連などで〝チャキチャキの川柳人〟になりおおせた。

噺家という職業柄、趣味は大いに活用すべしで、この間、俳句もかじって羊柳亭枝江の俳号を名乗り、やがては中央区俳句連盟顧問にまでまつり上げられたが、どどいつも色濃い稼業縁とあって、小沢扇太郎主宰のしらさぎ吟社を引き継ぐ傍ら、都々逸やよい吟社を興し、作ってよし、うなってはよし、その中に末摘花のおいろけもはさんでいた由。

「ぼくがおつきあいを親身で頂いたのは、実は川柳よりこのどどいつの方ですな。南鶴師匠の肝いりで羊羊会のおれきれきのご厄介

をかけましてね。実はこの会はひつじ歳の生ればかりの集りで、文弥、正蔵、百生といったそうそうたるこの道の方々と、枝太郎の名でそりゃあお世話になりましてなあ。川柳の方は番傘の桂枝太郎で通ったものの、羊羊会の方はそりゃあ、親身のおつきあいで、義理づくの山でしてなあ」と枝太郎師匠の職歴だんぎを次から次へと聞かされた。

「それにしても薬大出のインテリの身分で30代になってからの芸能界入りとはねえ」

「なぜこのおれが、噺家なぞになったのか今もってその動機をきかれてもサッパリわからねえ。学生のころ、女郎買いの味を覚え、仲間四、五人でシケ込んではカネがなくなるとつけ馬を連れるのがきまっておれでね。馬を連れて家に行っても親父が頭ごなしに叱るだけで金など払ってくれない。馬の代りに居残りまでおれはやったんだよな。残ると幸いにもおれは字が書けるから、女郎の手紙の代筆をやった。書きながら酒持って来い、タバコがほしいと駄々をこぬる。それがまたうまく運んでね。そうかと思うと、大正から昭和にかけての高座ではハカマをつけて出てたんだよ。一金二円でセルのハカマを買ってやり、それを仲間五人でカケ持ちで付けて出る。まあそんな極道の世界が、いつの間にかおれを噺家にしちまったんだな」

古い話だが、大阪での川柳大陸同窓会の集りでの以上のバカ話、懐かしい大人物だった。

師匠は昭和24年以来、延べ28年間も各地の刑務所慰問をやっている。その肩書も晩年まで中野刑務所篤志面接委員から横浜刑務所委員まで、ズラリと公的役職の名が真っ黒になっている名刺を持ち歩いた。

「忘れもせぬ戦後早々の昭和24年、府中にある関東医療少年院へ慰問に行った。連れはほんの駆け出しの浪曲家玉川勝太郎、それに曲芸までつけていったんだが、帰りに寿司桶が一同へ出て、おれに金一封をくれたんだねえ。おっと今日は商売じゃねえ、イモンだから一文も頂かねえ、とつっぱねたんだ。往復三時間もかけて、一座を組んでゾロゾロきて薄っぺらな金一封じゃあ間尺にあわねえ。そこでそれ抜きの慰問ならいつでもくるよ。とえらいこと言って見栄を張ったばかりに、ずっとそれからは、無料奉仕だね。考えてみりゃあ、延べ二十八年間も刑務所慰問とはいえ二千万円見当は、自腹を切ってきた勘定になる」

そのためか、昭和52年6月、桂枝太郎師匠は藍綬褒章を受章している。

「こんなクンショウを頂いたおかげで、多くの人たちがお祝いにわんさと馳せつけてくれたよ。川柳界も、俳句界もどどいつの会の連中たちが、エライ人に混じってうんときて頂いた。お返しにウンとカネも使ったがね。このようなクンショウは一度きりでごめんだというのが本心だよ」と便りをもらった翌年の昭和53年3月6日、急性肺炎で死去した。享年82歳。

「おれの川柳の師匠は、井上剣花坊先生だよ。長いこと番傘の同人にもなりご厄介をかけたが、こんな素養でわしは古典落語などはやらず、オール川柳の下地で新作落語ばかりやってきた。古典落語は、いわばはなしの基本みたいなもんだが、それを修業したあとは古川柳の持つうがち、おかしみ、軽味を新作に持ち込むことを心がけてきた」というのがいわば遺言代りの筆者あての絶筆だった。最後に枝太郎川柳の一部を紹介しよう。

会長も名誉とついて喜寿を越え　枝太郎
謝恩会先生だけが古い服　〃
囁きがまだ耳にある乱れ髪　〃
オペラグラス桟敷の女美しい　〃
島台に海老悠然とヒゲを張り　〃
受章して八十路の夏を若返る　〃

▼次号は「**池田　可宵**」

古川柳歳時記

『初午』

清博美

毎年二月、最初の午の日を初午と称し、稲荷祭がおこなわれた。祭神の宇賀御魂命（うかのみたまのみこと）が、和銅四年（七一一）の二月初午の日に稲荷山に現われたと伝えられていることによるのである。

また、稲荷祭は子供達が自主的におこなう祭りでもあった。

『守貞漫稿』に、「二月初午諸国ともに稲荷明神を祭る。京師は専ら稲荷山の神社に詣す。初午の稲荷詣古より有こと也。貫之集に延喜六年三月初午稲荷詣の和歌を載せ又源順集にも載レ之。大坂は専ら城辺の荒野（城の馬場と云）に群集し凧を上げ戯る（凧を上げ戯る今日を盛りとす）。荒野に筵を布き筵塀を建て茶或は荀蒻の田楽等を売る。市民老少男女等専ら弁当酒瓢等を携て来て遊宴す。……江戸にては武家及ひ市中稲荷祠ある事其数知へからす（武家及び市中巨戸必らず一二祠レ之無レ之地面甚稀とす）。諺に江戸に多きを云て伊勢屋稲荷に犬の糞と云也。今日必らす皆祭二是稲荷祠一正月下旬以来太鼓を担い市中を売り巡る。是屠児等なり太鼓と呼す撥を以て太鼓を伯ち行く。皆今日の所用なり又貧家の小児五七人連り狐描きたる絵馬板を携へ市店戸口に来て十二銭或は一銭三銭を与ふ。其祠に稲荷さんの御勸化御十二銅おあげと云。多くは一銭を与ふのみ今日江戸の稲荷祭の盛にして数所なる大坂七月廿四日の地蔵祭に似て然も百倍の祭所なり。又三都ともに今日専ら小豆飯に辛し菜の味噌あへを調し供レ之食レ之」とある。

稲荷は、宇賀御魂命を祀るところから、五穀の神として信仰されたが、江戸では専ら町内安全の神とされ、むやみやたらに稲荷社が勧請され、少なくとも一町に一社、多いところでは二つも三つもあったのである。さらに、大名旗本の屋敷内、豪家大家の庭などに、個人的に奉祀した稲荷も少なくなかった。

初午の日、市中では「裏長屋の入口露路木戸外へ染幟一対を左右に立て木戸の屋根へ武者を畫がきし大行燈をつる。露路の両側なる長屋より表家共所中の借地借家の戸々に地口畫田楽灯籠をかゝぐ。稲荷の社前にて地所の児童太鼓を打鳴して踊り遊ぶ」とあり、武家屋敷では、「武家邸内なる初午稲荷祭は邸の前町なる町家の子供を邸内に入ることを許して遊ばしめられ邸内にて囃屋台を出来廿五座三十五座の神楽を奏し又は手踊の催しより種々なる作物あり花傘掩へる地口畫灯籠を数多く庭裏より家中の長屋の門口へ立夜に入るや武骨の武士女子のいでだちして俄踊りの余興など始まるもあり殿君奥方若君姫君より御殿女中方の透見もし給ふあり去れば二月初午は例年市中賑ふことおびただし」（『絵本風俗往来』）とあり、『東都歳時記』は、「江府はすべて稲荷勧請の社夥しく、武家は屋敷毎に鎮守の社あり、市中には一町に三五社勧請せざ

る事なし。…挑灯行燈をともし、五彩の幟等建てつらね、神前には供物灯火をささげ、修験祢宜を請て法楽す。又男児祠前に集して終夜鼓吹す」と報告している。

この日は、武家・町人の差別なく、面白可笑しく賑やかに過ごしたのであろう。社頭に建てた「正一位稲荷大明神」の幟が春風に靡き、子供達が打鳴らす太鼓の音が辺りに響きわたり、町は祭り気分一杯だったのである。

また、『江戸時代文化』（第一巻・第二号、昭和二年）に、「江戸の稲荷」と題した鶴岡春蓙楼氏の一文あり、「江戸の初午祭の囃し言葉は、私共少年の頃まで節をつけて謡ったものである。思ひ出す儘に書付けて置く。稲荷万年講、稲荷様のお初穂、お十二銅お上げ、お上げに戸上、戸上のだんから落こつて赤いちんこすりむいた。膏薬代をお呉れ、おオ呉れ〳〵、呉れない内は動かない、絵に書いた地震だ、壁に書いた大まらだ。さう云つて銭を貫って歩くのである。で銭を呉れなければ貧乏や〳〵と罵言を吐き、呉れゝばその銭の額によって、十銭ならば十両の身上と囃し、五銭なれば五両の身上と囃すのである。斯うして町内や、お組屋敷の各戸を廻つて貰ひ集めた銭で、何か買って来て皆んなして食べるのだ。然しこれは中流以下の戯れで少し上品な家の子供はそんなとこへは決して出さなかった」とあって、祭り当日の子供の生態が浮き彫りにされている。

また、この初午の日から、学齢に達した児童が、手習い師匠につくのを習慣としていた。これを「寺入り」とか「寺上り」と言った。

「江戸の児童男女共武家町家とも六七歳より文字かくことを習ふに当時幼童筆学の師なるもの市中町毎になき所なく此師孩子を預て仕立ける預り置時間は毎日朝より午後までとす弟子の多きは百人余少なきは五十人に下らず師たる人質素にして而して懇切なりよく孩子を教育す」（『絵本風俗往来』）とあり、『風柳志道軒伝』には、「浅之進七八歳の頃より、寺入りの初清書、人の親の心は闇にあらねど、子を思ふ闇に、真っ黒な牛の角文字ゆがみなりも、器用な手筋と誉めそやし…」などと書かれている。

*

はつ午ハこよみて見出すまつりなり　天五花2

—初午は毎年同じ日ではなかった。

初午ハ角ミつこばかりさわかしい　一七23

—稲荷はたいがい露路裏や屋敷の隅っこにある。

女房の礼はつ午とひつくるみ　明八桜4

—女性の年始回りは遅れるものと相場が決まっていた。この女房殿は、初午に年始回り。

神前に初午そうな柳腰　三七15

—若い娘が稲荷詣で、スラッとした細い腰つきが実に魅力的である。

初午にてんでに二本持ている　四五13

—子供が太鼓を叩く撥を。

初午に夜ルたゝくのハおとな也　玉1

—昼は子供が独占。

初午にたこを上ゲるハすねたやつ　七13

けんくわしたやつ初午に凧を上ヶ　籠三22

—友達付合いが出来なかったり、喧嘩した子は、仲間から離れて凧を上げている。

はつ午に今戸の硯りよくうれる　安五松2

—手習い用の安い硯。

はつ午の弟子に四角な顔ハ無シ　宝十一鶴1

—皆悪戯盛りで丸っこい顔をしている。

はつ午の日から夫婦ハちっと息キ　宝十三天1

—悪童が半日家を留守にする。師匠のしつけもあって多少はおとなしくなるかも知れない。特に母親がホッとする。

初午に牛の角から書キ習ひ　五一5

—牛の角は「い」の字。

初午の日から踏れぬ影が出来　四五13

—七尺下がって師の影を踏ます。

秀句鑑賞

同人吟新家完司

―1月号から

一月号は当然ながら新年の句が多く見受けられた。しかし、この鑑賞文を書いている今現在は十二月十七日で、正月気分にはほど遠く釈然としない。

文芸は創作であるから、十一月に正月の句を作ってはいけない、というものでもないが、頭の中でこしらえた想像上の正月は、正月の匂いが希薄な気がしてならない。

余生とや風姿花伝を読み返す

舟渡杏花

能楽の幽玄な世界が本当に判り、切実に身にしみて来るのは、老境に入ってからかも知れない。花伝書の深い奥義に触れるためにも惚けてなどいられない。

闇の向こうの何かに誘われて逝った

政岡日枝子

人も岸も闇に吸い込まれる直前のひととき逢魔が時（大禍時）に金山夕子さんは逝った。闇の向こうには何が待っているのか、それを知った者は、再び戻ることは出来ない。

電線や冬をぼろんと奏でんか

桑原道夫

電線を地下に埋設した新しい街は確かに美しいが、どこかよそよそしくて表情に乏しい。風と電線が奏でる歌は四季の歌。ひとりぼっちの冬のわたしを慰めてくれる。

広告の量ほど明日があるのなら

西山幸

政治も経済も、個人生活とは関係なく滔々と流れて行く。ズッシリと新聞に折り込まれたチラシが発散するエネルギーは、すでに二十一世紀。快適、便利、おいしい物が欲望を刺激するが、私が消えてもこのように続いて行くのかと思うと、慄然とさせられる。

法善寺こんな処に昼の月

麻生アート

昼間の法善寺横丁は何となく鄙びて、田舎の秋祭りの風情。狭い路地を覗いている昼のお月さまの密やかな姿に気がつく人は稀で、「こんなところに」という一瞬の心の動きを活字に定着できる人は、正しく詩人。

花がらを摘む穏やかな日に戻り

大河未佐子

悲しみ事、喜び事、慌ただしい人生の山と谷の間に、ふっと穏やかで静かな日が戻る。厳しい試練を越えてきた人だけが、この穏やかなひとときのありがたさが判る。

山越えてきてうどんやの深い軒

森川まさお

一歩出ずれば旅人。ならば山を越えて行くのはさすらい人か。田舎の軒深いうどん屋はおふくろのように、疲れた体とこころをホッコリ包んで休ませてくれる。

秋が来るたびに買い替えたい目鼻

池森子

ご先祖から連綿と受け継いできたこの目鼻。不満など言えばバチがあたるかも知れないがそぞろ物想う季節には、バチあたりなことを考えてしまう。目鼻が無理ならば、スーツでも新調してこころのリフレッシュを。

ポケットに忘れたままの清め塩

氏林洋敏

何気なく行っている習慣も、よく考えてみると不合理なものが多い。疫病や迷信が蔓延していた昔と同じように、死体や葬家を穢れたものとするのは死者に失礼。清め塩はハイキングのゆで玉子用にとっておくとよい。

剛直に人黙らせて月曜の電車

田中　薫

沈黙の羊たちを詰め込んで、月曜の電車は陰鬱に揺れる。鋼鉄の車内は墓場より静か。

あまりよく見ると幸せ逃げてゆく

植田一京

「しあわせ」は陽炎のようなもの。見詰めすぎてはいけない。問い詰めてもいけない。分析してもいけない。ぼんやり、ほんわか、ただ、なんとなく幸せ、というのが一番。

亡母に似たお人よどうぞしあわせに

川端柳子

心ゆくまで充分に親孝行をした、と思える人は幸せだ。多くの人は「もう少し」という悔いを残している。亡母に似た人、亡父に似た人に会うたびに、胸が痛くなる。

窓際の席で感じている季節

竹治ちかし

最前線で猛烈に働いている間は、春も夏もなかったが、ふと気がついてみると、窓の外は冬。まるで、これからの私のような。

見えぬ目が眠たがるのも不思議だね

堀江正朗

「実感句」には、稚拙な「つくりごと」が及びもつかないパワーがある。「見えぬ目」は、目の不自由な人にしか詠えない。

教会のノブを握って引き返す

森田文

教会も寺院も神社も、来る人を拒まない。しかし、これでもかと飾り立てられた祭壇はいかにも胡散臭く、眉にツバをつけたくなる。個人の祈りは純粋で美しいが、宗教という組織になったとき、権威主義に陥ってしまう。

あらかたは承知している妻の愚痴

藤解静風

何を言いたいかは、顔を見れば判る。同じ愚痴には同じ返答で応えるしかない。しかし愚痴を言い合っている間は夫婦円満。家庭内離婚状況になれば声さえかけてもらえない。

すぐおろす金だがまずは預金する

川崎ひかり

どうせすぐに消えてなくなる金だが、預金している間は財産で裕福な気分。それにしても、昨今の超低金利では預金する意欲も萎える。そのうちに保管料を取られるかも。

透析の窓　雲ばかり数えさせ

片上明水

透析を受けなければ生きて行けない人の辛さは、透析を受けている人でないと判らない。気まぐれにする献血でさえ、いやいやしている身には尚更わからない。哀しみに耐え、辛さに耐えるほど、こころは深くなって行く。

生きているはずだが出も欠も来ぬ

梅田宣司

幹事や会計は気苦労ばかり多くて、投げ出したくなるが、ハガキの隅の「ありがとう」のひとことに救われる。横着な人は死ぬまで横着で、他人の苦労に応える術も知らない。

老いらくの恋　海鳴りは聞こえない

芦田静江

分別がつく歳になってからの恋は、周囲の思惑ばかり考えて「怒濤の如く」とは行かない。海鳴りの聞こえぬ位置で、静かに大切に育む恋もまた美しい。

マルクスにおぼれた頃の安い酒

籾山隆盛

安酒を呷り革命を語った頃は、金と体制が敵であった。あれから幾星霜、安楽椅子と旨い酒は手中にしたが、純粋な精神を失った。

菊日和　飽くことのない米の飯

春城年代

世界の国々がどれほど一体化されようともどの国も固有の文化を喪失してはならない。緋毛氈、野点、菊の香、そして米の飯。

古稀すぎて何を探している眼鏡

小林妻子

悟り切って泰然としている人よりも、迷い、探し、悩んでいる人の方が人間的で味がある。

高杉鬼遊選

横浜市　川島良子

母さんが生きてるわたし死ねません
一人ですチンと鳴りますハイごはん
一年の御礼宅配便に乗せ
いい人でそれから先が進まない
大晦日　夫は鯛を釣りにいく

河内長野市　大西文次

天国で会えばよそみをしておこう
八十七にしては元気で医者通い
門灯が消えてて嫌な予感する
胸ぽんとたたいて何もしてくれず
相合傘　誰も振り向いてはくれず

鳥取市　岸本宏章

段取りの悪さを秋の陽が叱る
箸を割る森の嘆きを聞きながら
冬支度させて初雪さっと溶け
足腰が冷えると知恵が回らない
子の名前顔も忘れて老母が逝く

東大阪市　谷口義

風やんで思えばあれは何だった
女医さんの愚痴を聞いてる年の暮れ
四季報も塩漬けされて本棚に
気の強い嫁がついてる息子達
大人にもなれずおばあさんになった

新潟県　高野不二

折り込みの方が記事より面白い
人並に金利困ったふりをする
味噌でさえ特上　並があるらしい
後で読むつもりの本が並ぶ棚
消費税　買わずに暮らす外はない

北九州市　岡田幸生

留守番はお好み焼にビール付き
溜息を洩らすわが家のファクシミリ
天秤座よろずよしとて出掛ける気
渦潮と汽笛の町に戻り住む
引っ越した先も活断層の上

豊中市　みきわきみ

よく出来た孫に俺似だわたし似だ
東大の教養課程で何してた
ペースメーカー入れて電池で生きている
中学の弁当以来鮭が好き
夫婦句集　路郎　葭乃を知る一人

今治市　渡辺南奉

幸せのドラマ短編しか書けぬ
まっすぐに生きても敵の二三人
損をする意固地知ってるのも自分
以下同文読み間違いを直せない
どんぐりの家族で意地も欲もない

尼崎市　尾宮弘治

もっと不幸な世間話で慰める
惜しまれて枯れよと諭す寂聴尼
遊んでます言いつつ伸ばす棒グラフ
欲しいものねだり尽して孫が去ぬ
御神輿を担いで睦む出向地

尼崎市　長浜澄子

生き方を変えるかレモン絞り切る
クロワッサン匂い一日いい予感
十二月の鏡　熟柿が覗きこむ
海鬼灯わたしも苦労すると言う
本音吐くには至って都合よい酒量

横浜市　金森徳三

好きだった鰻で偲ぶ通夜帰り
本音では知らずにいたい訃が届く
何もせず座っていても年は暮れ
初日の出　月は静かに消えて行く
生きてます現況届に切手貼る

大阪市　中井正秀

三食と無理矢理食べることはない
大正もストレス溜めて生きてます
友見舞一緒に食べる栗饅頭
鳥取で堺の包丁買うてくる
政治家もボランティアでしませんか

富田林市　藤田泰子

十二月　虹を見たのは錯覚か
紅葉に負けないように燃えている
嫁さんは外人さんだそう思い
虚しいと思う日は無しカレンダー
口実として風が吹く雨が降る

高知市　細木子龍

列島の寒波を睨む処方箋
早春の目鼻にとまる花粉症
バーゲンとローンで暮す青い息
もうすでに時効の沙汰と知って紅
裏口へとかく小声の水面下

乾杯のビールぐらいが後を引き
別姓の墓のデザイン考える
まだ生きている証明の市長印
愚痴を言う相手は村の地蔵さん
金縁の皿でチンしたこと内緒

八尾市　神原　まさと

まほろばの土偶の咳が聞こえそう
残り火のほこほこほこに眠られぬ
風邪ですかそれがきっかけだったよう
冬ひとり唐子の酒器でのんでいる
ひたすらに眠り続ける夢をみる

堺市　志田千代

遮断機が夫婦の仲へ降りてくる
夫婦別姓　判も二つとなるさむさ
無精ひげあなたは夢を捨てたのか
不眠症しっかり金は貯めている
ジャズは流れてむかしの恋に血がもどる

豊中市　石川　勝

好き嫌いあって人間面白い
叱られた子がブランコで揺れている
生きているからゴミが出る愚痴が出る
歯車が合わない酒とコカコーラ
持ち駒をいっぱい持って負けている

犬山市　早川盛夫

飽食の世に生まれきて心病む
ご婦人をその気にさせるやせ薬
コマーシャル　ビール飲みたくなってきた
息災の祖母が仏の守り役
外面のよいご主人に悩む日々

十和田市　阿部　喜久江

手作りの無党派層にしてやられ
原色の派手を派手ともせず若い
校長室が春の吉報待っている
財布買う縁起かついだ春財布
定年へ誰の力も借りず着く

愛媛県　中居善信

談合をします算盤忘れずに
孤老にもひょこっとサンタ来ないかな
墓掃除すませ師走に柝が入る
この歳で満も数えもしれたこと
ジングルベル今宵ひと夜のクリスチャン

泉佐野市　稲葉　洋

文化祭皆輝いている舞台
終の地と決めて柿の木植えておく
不覚にも転んであたり見渡せり
左脳の感度がにぶる冬至ごろ
沙羅の木のある本堂にかしこまる

松江市　佐野木　みえ

二日酔い酒は止めると午前中
何故違うマネキン妻も同じ服
寄せて上げ締めて細めて逢いに行く
仲のよい夫婦で通すバスツアー
バスツアー先ず写真屋に並ばされ

八尾市　篠原　いつふみ

ままごとで離婚されてる男の子
税重く声なき声に雪無限
今年また妻に秘密の墓参り
バーゲンに妻を誘拐されたまま
御趣味はと聞かれ健康管理です

和歌山市　木村　親踏

プラスばかりで人間生きていられない
妻の嵐を静めるケーキ買うてくる
ゼロの多さに恐れをなしている財布
野良猫も好き嫌いして食べている
病室の母さんの愚痴持ち帰る

八尾市　村上　ミツ子

叱られた父の拳と肩ぐるま
相槌を打てばそこから秋になる
車間距離守り女にうとまれる
梅干に秘密いっぱい詰めておく
走るだけ走り突然恋をする

富田林市　中井　アキ

また一つ買い足している年の暮れ
スーパーの木馬百円分子守り
好きだからする意地悪も罪ですか
蓑虫のほどよい長さドアチェーン

川崎市　和泉　見早子

イチローの粘りにみんな励まされ
やっぱりと用意の喪服出してくる
だまされた私がなんでわるいんや
忘れたと言って平気な妻に慣れ

羽曳野市　三好　専平

松茸の旬待つ内に買いそびれ
靴までが世間騒がすこの世相
お魚が寝てては困る水族館
相合傘　真似でいいからしてみたい

吹田市　野下　之男

フルコース終りリハビリ室を出る
脳内にアドレナリンが湧く政治
迂闊にもアンケート書き呼び出され
着ぶくれて現在未来過去捨てる

河内長野市　水谷　笙子

高くした鼻ひっかかり裁かれる
子離れの妻がだんだん太りだす
もぎたてのリンゴ齧って秋ですね
リストラの呻きを聞いている机

尼崎市　森安　夢之助

プライドを気にする花は実らない
愛の文字三角型の中で冷え
四捨五入　四捨の涙を買い戻す
ガールハントに哲学がある男たち

大阪市　一本勇太

風どこを向いて吹こうがマイペース
墜落のように利息がおちてゆく
通勤のホームは誰も無口なり
ビル街の人情論がすり切れる

広島市　流奈美子

不燃建材作る工場が火事を出し
良いにつけ悪いにつけて高齢化
法学部出た秀才が金に負け
医療費の上がらぬ内になおしたい

岡山市　清水金太郎

母さんに当るしかない父の酒
もう夢に出て来ぬ人は時効です
学校の隣に住んで遅刻する
子育てに希望があった頃が華

八尾市　平川幸枝

六十九まだまだ積木積んでいる
手を出せば胸の蛍が灯を放つ
酔えばまた月の砂漠を口ずさむ
六十路には六十路の愛が湧いてくる

岡山市　藤原一平

鍵穴のひとつを探す迷い道
けがされぬままに初霜とけていく
つかの間の虹に託そうシャボン玉
生かされて生きて歩いた靴の減り

和歌山県　杉山精子

古希祝う酒を卒寿が注いでやり
お日様に埃だらけを咎められ
せっかちの銀杏は青いままで散り
ぬかるみも石ころも無いニュータウン

高槻市　左右田泰雄

喪の葉書いちまい書いてまた憶い
百ヶ日やはり彼岸へ逝った亡夫
桂浜手の鳴る方へ波が打つ
柳号でにぎやかそうに雲の句座

伊丹市　樫谷郁子

独りではないのだ妻と今生きる
靖国で逢う約束を果し得ず
秋灯下寝酒重ねて眠られず
蟋蟀のすでに果てたる秋の庭

八尾市　鷲見章

長湯する老母へたびたび声をかけ
ハッスルにおっちょこちょいと出た評価
二度の職　息子に頼む保証人
身についた作法崩さぬ老いの足

横浜市　丹下智洋子

紅葉に背く一本青いまま
歩き疲れて飲む甘酒に命乞い
ワープロと競うハガキに筆を買う
研究会　表通りに裏通り

尼崎市　軸丸勝巳

白いカラスになれたら招待されるかな
脳内革命　今更無理な石頭
右ひだり聞いた噂がくい違い
泣けるだけ泣いた女はまた食べる

今治市　村上久美子

今年また生きる証の年賀状
緞帳を降ろせいつまで猿芝居
板長の講釈　箸がまだ割れぬ
目線変え皆様並に妥協する

大阪府　大家風太

犬に似た雲は呼んでも知らぬげに
師走来る良いも悪いも皆包む
おばあちゃん言われ振り向く同じ年
早一年残る日めくり捨てがたい

八尾市　高橋明子

束の間の苦楽この世は揚げ花火
情報をキャッチ　セールス飛んで来る
絵馬の数　自信のなさの裏返し
御不満もあろうが幹事締め括る

高槻市　乙倉武史

十二月嫌いボーナス無い暮らし
喪中欠礼多き年なり氷雨降る
あり金をはたいて財布買いました
幸せを貰いましたと仏前へ

大阪府　原みえこ

孫二人　金魚博士に星博士
縁日で値切った梅が満開だ
判るはず父の拳の温もりが
石頭寝ると園児と同じ顔

富田林市　山原昭水

痛い痛い飛んでけ三度撫でてやり
強情に杖ことわって直ぐ転び
信じない予報に小さい傘を持ち
泣くものか媚びるものかと女生き

高槻市　執行稲子

辞書にある勿体ないが風化する
悪口を言うな故人になった人
贅沢な悩みに見えるダイエット
父さんがしょんぼり見える休肝日

愛媛県　安野案山子

夫逝って気まぐれ癖が行き詰まる
和の色紙かけて一人の佗び住居
話しよい息子に気兼ねして平和
亡夫の忌が済めば師走の風が吹く

香川県　田中ふみ

八尾市　村上剛治

情けには金も拳固もかなわない
先頭を行くから強い風に会う
かずら橋渡ってからの仲直り
人恋し下戸も屋台へついてゆく

大阪市　川久保睦子

枯れてくる脳細胞へ水をやり
十本の指で数える百の夢
素焼鉢　味方の数に入れますか
火消し壺余熱を抱いた手がきれい

羽曳野市　川田晋

いつもなら妻も勝ち気で散る火花
何回もメモが中断さす会議
振り向けば許す気のない妻の顔
粘るのが取り柄ともまた傷だとも

羽曳野市　西村りつえ

たった一つお聞き下さい初詣で
くたびれは馬鹿になれない半端者
きな臭い話聞いてた鍋の底
乗せられてつい弱点を曝し出し

札幌市　三浦強一

チャンネルに忠臣蔵が出て師走
義理不義理秤にかけてから迷い
ふしくれているが汚職を知らぬ指
本命のはずが小さなチョコレート

大阪狭山市　伊藤尚子

季節柄すこし淋しい冬ざくら
貧乏でこころ豊かな子に育ち
呑むほどに大きくなって行く話
足音がでっかくなっていく息子

堺市　梶本哲平

テレクラのティッシュ配りに無視される
ハンカチを手に待つときは出ぬ嚏
人に会う風邪じゃないですアレルギー
嚏出たあとのクションはおまけです

羽曳野市　徳山みつこ

ゆっくりと答弁スジを曲げながら
厚生省につける薬を急がねば
助手席の妻がハンドルとりにくる
ゆっくりと食べてたっぷり寝ています

西宮市　古谷ひろ子

犯人が隣に住んでいる都会
水が合うたか嫁すんなりと大阪弁
日本晴れ孫にもらったスニーカー
泥縄の詫び書き添える年賀状

大阪市　尾崎黄紅

年会費送り今年もやる気です
三浪の灯と月も知っている
贈り物花より団子心得る
鍵の輪と耐えてきました靴すべり

和泉市　中川　楓

ルワンダに遺言状はないだろう
プラスワンその一言で立直り
スケジュールなしのこの世が面白い
プロよりもおふくろの味重箱に

岡山県　土居　ひでの

つかず離れず陰の味方でつくしんぼ
カレンダー抱えきれないスケジュール
生かされてハイと返事の出来る孫
履物を揃えて今日の日が暮れる

大阪市　亀井円女

建前で話すお方は苦手です
捨て猫もうまく育って美男美女
長らえて厭な日本を見てしまう
手を合わす思い風呂あり寝床あり

綾部市　藤田芳郎

走らねばこける二人の九十九折
美談だと聞いて疑い深くなる
村おこし山が無口になっていく
罪深き森で神だの仏だの

島根県　武島ちよえ

冷静に下界見ている寒の月
訥弁の気を揉みながら義理の席
労りのひとこと欲しい使い捨て
格好をつける雑木は雑木です

岸和田市　不破仁緑

裏側を覗けば仮面山積みに
振り返る今年も悔む事ばかり
しんどいと言いながら待つ子の帰省
沈黙が続くと帰り支度する

兵庫県　谷田多美子

おはじきも知らないままに母となり
留守電に風邪を引くなと老母の声
梅色の和菓子もてなす奥座敷
海ゆかばわだつみたちの鬨の声（十二月八日）

東大阪市　松山隆

ウインドーの裏を拭いてる明日の顔
石庭の小波に自問自答する
奈落でも輝いている蜘蛛の糸
枯落葉　人の輪廻によく似てる

米子市　小塩智加恵

レストラン右に倣えの五人連れ
木曜日通院日課空いてる日
テレビから銀座のパンが香り見せ
十二月拝見料の通知表

枚方市　森本節子

九州場所終わり賀状にとりかかる
字のうまい亡夫に頼った年賀状
ゴミの日はカラスも肩をいからせる
淀川の暮色にひたりコーヒー喫む

笑くぼまであばたに変わり冷えてゆく　兵庫県　大谷幸次郎

正月は神様ごめんモナコにて
結局は留守番役の寝正月
牛づれの旅の道のり遙かなり　鳥取市　岸本孝子

金持たぬ人の笛には踊らない
乱雑な部屋から知恵が湧いてくる
欲張って敵も味方にみえてきた
脈があるうちに話をつけておく　三重県　佐々木森哉

胎児死す　御仏の掌の揺りかごへ
ススメススメ　ネジを巻かれたあの昭和
愛の海すこし酸欠気味である
弓張りの月で自虐の首を刎ね　横浜市　明渡トヨ子

こんなはずではなかったと登り坂
僕も五十任せなさいと子に言われ
私って不思議　故人が夢枕
八十の姉妹で旅の出来る幸　八尾市　與田明

内視鏡ただいま腹を散歩中
カルシウム大切なこと骨に沁み
傘立てに妻のと二本だけの傘
万両を植えて世間も低金利

体裁を気にしていたら乗り遅れ
孫自慢したくて年賀状増やす
四季のある暮らし幸せ紅葉狩り
交通費よりは安いと長電話　横浜市　鈴江純子

厄年にご祈祷料のランク上げ
年金も賞与が欲しい年の暮れ
割り勘と分かっていればついて来ず
正さずに妻の誤審が通ります　高槻市　傍島克治

突き当る壁に抜け穴きっとある
妥協して一円玉の軽さなり
亡母想う過去が点滅しています
人情に脆く恋には遠い人　大阪市　三浦千津子

はしゃぎ過ぎすこし詫びてる無礼講
お話の続き聞いてる子の寝顔
簡単な手術ですよと医者は言い
ライバルに勝った今から追われる身　静岡市　大村正雄

診断書片手に回るヨーロッパ
目覚ましを進ませやはり朝寝坊
努力とはかかわりないか運不運
冬空は私のうつをそのままに　兵庫県　徳平毬子

即答は出来ぬ妻にも聞いて見る
かも知れぬ夢と欲とで宝くじ
美人見て元気が出ればまだ若い
我が家ほど気楽な場所は外にない

海南市　谷口義男

おばの便り　りんご送った雪ふった
前売りを買った時からコンサート
彼のことさよならしたら見えてきた
悲しみを落としているよ洗濯機

大阪市　立蔵信子

暖かさ伝えるために手をつなぐ
手の平で豆腐を切ってギャルに見せ
虹を見て携帯電話かけてみる
小春日和　途中下車などしたくなり

唐津市　松本圭

ありがとう厨で交わす仲になり
職を退き淡いバラ色など未来
馬鹿ばかと畳ごしごし拭いている
乱の章どこか慎ましさを隠す

鳥取市　徳田ひろ子

税金を納める方が頭下げ
包丁が切れぬ浮気がばれそうで
過去帳の余白を妻と考える
その時は本気で買った多宝塔

枚方市　奥田淳一朗

シャルウイダンス大根の鍋見える位置
歯を削る時は懺悔をしてしまう
泣かすのも喜ばすのもヒト科です

鳥取市　石上悦子

六地蔵過疎の村では大家族
喜寿近く時々見ます地獄絵図
国なまりただそれだけで信じたい

鳥取市　西村半畳

脱け殻のような私もいそがしい
老い先をこぼすと笑う泣きぼくろ
ボーナスをくれた息子の背に感謝

兵庫県　高見末野

疑いが晴れたら雨も止むだろう
人真似の上手な猿は金が好き
うどん屋の猫はうどんが大嫌い

尼崎市　田辺鹿太

年の瀬にしんどい話持って来る
急ぐほどに機嫌の悪いボールペン
言いたいが言えない訳のインタビュー

寝屋川市　井上すみれ

来し方を顧みる日の多くなり
丹精の白菜大根娘に送り
カレンダー去年と同じ貰いもの

河内長野市　木太久正一

静岡市　小木久子

工場の跡地やっぱり駐車場
種切れになってむずかる孫の守り
集まりに目立ちたがりやが一人いる

大阪府　奥野義夫

またくすりビールの欲しい快復期
生きたくて飯は薬のために食う
悩みごと持ち寄ってくる母の背

和歌山市　森口美羽

釣り糸の長さ程度でつながれる
おだやかな波でも心揺れ動く
ほどほどの欲を盛ってるめし茶わん

泉佐野市　大工静子

バザーにはポット茶碗に皿小鉢
もみ手する棟梁　今日は上棟式
ない袖を振り肩並べ何処へ行く

橿原市　西本保夫

洗面所知らぬ女患と話する
妻にだけもう退院と打ちあける
やあやあで入院して来た顔見知り

静岡市　増田扶美

あなどった風邪に外出左右され
初産の娘に細々と夜が更ける
苦労したことごと偲ぶしわの手よ

羽曳野市　森田四三郎

紅葉眺め右往左往のカメラマン
政も医も福祉までもが汚職する
ジャンボくじ億の夢へと懸けてみる

鳥取県　宮脇道子

紅落葉踏みちらかして気がとがめ
冷えた仲　昔話に灯がともる
血税が霞が関に吸いこまれ

島根県　大野蒼流

月おぼろ明日は他人の雨となる
欠け茶碗そのまま夫婦の長い雨期
過去追えば過去美しく化粧する

今治市　野村清美

明日は晴　逢う約束の茜雲
海鳴りが強くなれよと押し寄せる
寒空の尖った月に斬られそう

唐津市　江川青琴

午前二時犬のいびきに目が覚める
気持だけ忙しく体ついて来ず
酔っぱらい都合の悪い事忘れ

兵庫県　中野とよ子

若者の街に活気の波が寄せ
甘えびの味わからずに食べている
歩くこと出来て大地に足がつく

長生きが幸せだとも限らない
一線を退きそれなりの友が増え
あれこれと誉めたあげくに買わぬ客

高知県　百田　幸

くしゃみくっしゃみきょうは胡椒の初舞台
ダーリンにポロシャツよりもラガーシャツ
川に映った欲ばり犬を笑えない

和歌山市　楠見章子

火遊びが好きや言うても焚火やねん
簡単と言うが尻から内視鏡
本体を水族館で見た切身

大阪市　平井露芳

この年になってわかった事もあり
世が変わりゴミにも値段つけられる
進展のしない喧嘩でうまくいき

東京都　清原悦子

仏壇に田舎から来た柿二つ
一年がアッと言う間に暮れの蕎麦
過疎の村　表札の字が蹲る

尼崎市　松下比呂志

これがいいあれもいいねと服売場
母さんが留守でのんびり眠る子等
温かい言葉が好きな両の耳

島根県　三代朝子

弁当を一口残しチョコパフェ
斠にも処し方のあり旅の宿
助手席のナビゲーターはよく喋る

兵庫県　緒方美津子

雑草のようにはなれぬ不登校
泳げないから散骨は富士の裾
ねじ巻いて巻かれて男敵の中

横浜市　宮村ちよ路

浪花路の便り恋しい冬籠り
賀状書く牛のよだれのおつきあい
春の句を老妻の車を押しながら

秋田県　湊修水

人という字になり切っている余生
木守柿　温い情けで残される
家と車無用のチラシ手に余る

和歌山市　吉村さち子

うし年がいてねんごろに初詣で
娘から貰い年玉孫にゆく
ごちそうを目で食べてます少食で

沖縄県　杉谷一栄

天国は満員娑婆で待つ余生
鬼の留守　新歌舞伎座へ洗濯に
豆つぶて逃れた鬼の行き処

富田林市　欄智久

鳴門市　八木芳水

太鼓判押され不安がまたおこる
内緒です障子の穴を塞いどく
あつ燗に溶け込んでゆくわだかまり

尾張旭市　三浦きぬ

墓詣り許されるとは思わぬが
日々好日ど忘れ辞典膝に置き
さあ寝よう一人住まいのひとり言

八尾市　井尻民子

せめてもの贅沢ですよ湯があふれ
ストレスを捨てにシニアの映画館
受話器の愚痴にひととき耳を貸す

高槻市　江原秀夫

大正の反骨筆で年賀状
ちょっとぼけ浮世の風を受け流す
改革の歩み気になる丑の年

交野市　山川日出子

あの家族　洗濯ものは仲が良い
通りゃんせかごめの遊び影ひそめ
故郷は童女に返る不思議な地

和歌山市　津村武春

仕えても尽し切っても愛されず
おとなしくなった男の老い進む
小さい嘘吐き続けてる二枚貝

岸和田市　亀井皎月

人生にああ疲れたと何時言おう
その話妻もわたしも聞いていた
パン食が食事楽しむこと忘れ

横浜市　福田由美子

ごみ箱の雑誌探すもリサイクル
ハンガーに干されて街のつるし柿
携帯の電話で潰す待ち時間

福岡県　本田忠男

女房の叱咤うそつく余地はなく
良く遊べ金溜めるなと子に言われ
米余り明日はあしたの風で買う

鳥取県　原みさを

陽だまりに亡母の忘れた杖がある
人脈の果てに疲れた鳩がいる
目を伏せてこころの幅を覗かせぬ

鳥取県　橋本多哥由

氷山の一角ひやっとする話題
激論の末にあくびがとまらない
秋風の中を無口な人と行く

兵庫県　西山八重子

平凡に受け答えして波静か
正直が取柄と生きて来た峠
とろとろと酔うてあなたを奪い取る

煩悩を捨てた初湯で無に浸る
老いてなおゼロ発進の風が舞う
行革へ得意の牛歩やりますか

鳥取市　冨山雄幸

手さぐりの道だからこそ面白い
その後は何も知らないだるまの目
聞き流すことを覚えてよく眠れ

今治市　塩路よしみ

初雪が庭木にくれた綿帽子
忘年会つぎつぎ埋まるカレンダー
お歳暮に義理と財布が折合わず

倉吉市　高多博丈

長廊下過ぎて検査の赤い文字
「終りました」主治医の声は仏様
検査室出れば廊下は娑婆の風

島根県　森茂美

苦労したことには触れぬ足の裏
美しい汗が神戸に纏いつき
根雪かも知れぬいろりの独り言

日立市　加藤権悟

遊びから学んだ知恵は忘れない
陽と遊び風と遊んで黄昏れる
岬から春の便りが届けられ

米子市　足立由美子

ママ同士ほめ合う裏で競い合い
気楽さをぶら下げているループタイ
古希迎え老いの字ばかり目にささり

大阪市　島崎孝一

走りたい吠えたい胸の不発弾
トーン下げて話すとみんな丸くなる
落下することは思わぬ竹とんぼ

和歌山市　山根めぐみ

よく切れる奴が輪にいてやり難い
雑草は天下御免の陽を浴びる
お向かいにばかり宅配便が来る

和歌山県　中後清史

母狂えばさらにいとおし細雪
悔ゆること多く母なり狂を抱く
海鳴りのゆきつく果てか観世音

米子市　林風子

木枯らしがおいでおいでの赤提灯
老いらくにジングルベルが追いかける
ナレーション終ったとこでコマーシャル

池田市　木村一笛

林立マンション中のひとつに丸く住み
話術なめらかつい溺れそう自制心
小春日和思い出に酔うオルゴール

成田市　斎藤房子

雨だれが私一人にコンサート
遅刻バス信号までが邪魔をする
道訊けば交番所を教えられ

横浜市　秋元和可

入院に始めて乗った車椅子
留守居する夫気にする療養記
同室の人に気がねの退院日

河内長野市　印藤智子

一人寝に心丈夫な酒がある
瞑想が居眠りになる昼の酒
香水が隣に座り目を覚ます

大阪市　小林周信

何も彼も捨てて穏和なホームレス
ときめきと哀しさがある時刻表
結納も無事に目出度い梅日和

岡山県　国米きくゑ

年金の軽い財布が嘘する
愚痴言うな眠った孫が目を醒ます
ペダル漕ぐうちに望みが湧いてくる

益田市　岡田たけを

日に一度コーヒーの香に酔う私
荒れた手に家族の命あずけられ
丑年の私は丑で亡母も丑

静岡市　中西雅

三年日記ためらい求む喜寿の春
老いてなお四季折りおりの花作り
御都合で記憶あったりなかったり

大阪府　団野恒

東京で山陰の菓子買ってくる
パチンコへ日参してる粗大ゴミ
試着室まよいなかなか出られない

米子市　池尾保子

お隣の献立わかる換気扇
実もあり情もあるが口悪し
胸襟を開いたつもりよくしゃべる

八尾市　山本宏

正月も間近　掃除に精を出す
橋渡り別の私に会いに行く
家事逃れ女性が集うレストラン

横浜市　後藤早智

列乱す蟻を待ってる落し穴
先走る舌に自慢も少しのせ
走るなよ転んだときに痛いから

富田林市　大橋鐘造

成り行きにすべて任せる葱坊主
真っ直ぐに歩くばかりが能じゃない
気のせいか背なに視線がこびりつく

倉吉市　山本玲子

東大阪市　今岡貞人

朝ほっと夕ほっとする命かな
イエス　ノーはっきり言える無位無冠
見当たらぬバトンよ二十一世紀

横浜市　山下省子

平凡な妻など止せとささやかれ
JRラッシュに乗って若返り
母さんも頑張っている遠花火

熊本県　増田一乗

税上がり焼酎咽喉に問えそう
土石流　水の恐さを見せつける
ポイ捨ての新聞チラシ無駄を売り

横浜市　保田絹子

点滴の終り知らせる寝入りばな
かたくなな静脈ナース機嫌とり
ささやかな贅に小心揺れ迷う

伊丹市　延寿庵野鶴

風呂敷に古傷包む闘病記
自尊心捨てて草書で生きてます
無防備な男だ酔うと踊り出す

島根県　菅田かつ子

おしる粉で話がはずむ忘年会
何事もなかったように布団干し
手さぐりで掘ったお芋はなおうまい

和歌山市　水田秀男

くやしいが日本の国は欠けてきた
何故だろう師走に道路掘りかえす
インターネット僕には遠くなじめない

兵庫県　円増純子

一日がとっても長い濡れ落葉
甘かった躾のつけが今にして
あっさりと諦めたのも齢の所為

大阪市　杉澤汀

腹の虫三合浴びてたわいなし
年金の鏡餅までつつましい
もう願うこともないがと初詣で

横浜市　伊藤ふみ

五十路坂　渋目の壺が好きになり
菜園のネギすき焼きへ自慢する
何年も同じ富士見て嬉しがり

藤井寺市　鴨谷瑠美子

体温を計れば恋の四十度
ひれ酒を膝も飲んだか崩れ出す
ラブレターも一度読んでねるとする

寝屋川市　瀧本八十八

伸びる芽を摘む教育も行革を
地鎮祭　祝詞古代にいざなわれ
二度の職祝いは屋台コップ酒

羽曳野市　芦田絢子

気紛れにかけた電話で聞く訃報
よう効いたうどん屋さんの風邪ぐすり
カニすきの箸置いてから盛り上がる

島根県　岩田三和

くぬぎから菊炭にして茶一服
名水の流れに育つわさび花
白鳥が今年も村へ餌もらい

神戸市　向井泰子

本箱の中身の本も齢をとり
味噌鍋がグツグツ貝や魚たち
あんた等にたのみますよと母は言う

倉吉市　田中八太郎

貧乏は病気をしてる暇がない
茹で卵　子供の頃の味がせぬ
人救う宗教にさえある派閥

神戸市　船津とみ子

有り難い日々珈琲を頂いた
目玉焼き今朝はきれいに焼けている
母さんの祥月命日すこし泣く

香川県　神保坊太郎

お歳暮がたくらんでいる横歩き
ご油断を召さるな餌の下は穴
我が家に先祖返りの花が咲き

尼崎市　岩倉キク子

ハイと答えて出来るかいなと気にかかり
何ごとを知らせたいのか風の声
嬉しい日かなしい日にも空は澄む

鳥取県　山内芳江

弱い足引きずりながら寺参り
国語など知らぬ雀が良く喋る
記念日を忘れかけてる倦怠期

横浜市　上野天々

神無月ばかりで年が暮れて行く
虚礼廃止まもり寂しい年の暮れ
孫に貯めた硬貨ときどき抜いている

鳥取県　近藤春恵

あれこれと思案リンゴの皮をむく
子を守る防波堤にもなって生き
念入りに外堀を埋め身構える

鳥取県　藤山弘子

減反で枯野が増える田舎道
虎の子が期待はずれの道を行く
かけ込みの工事がふえる年度末

兵庫県　安達厚

ドア開けて大きく背伸びして生きる
豊作と聞く松茸の香り来ず
生きられる保証はないが夢がある

松江市　松本知恵子

マンネリの海で見つけた冬の虹
立ち枯れの菊にほのかな香りする
挫折して亀のつぶやき解りだす

和歌山県　吉田武治

明日やること決めてから床につき
職引いてひる寝なんだか気がひける
大掃除せねばにっぽん沈没だ

大阪市　鈴木トヨ子

義理に負け許した傷がまだいえぬ
ふらつきもしたが射止めた的で古希
白髪がひときわ光る敬老日

和泉市　横山捷也

難病の妻を見舞うて縄のれん
父一人住んで電話は話し中
年の瀬に心開いた娘の便り

松江市　安食友子

老婆心要らぬ節介して独り
ほくそ笑むその静寂が曲者だ
ショッピングとんだストレス解消だ

東京都　井上つよし

煤払い終えておせちをつまみ食い
大掃除隣のポチも拭いてやり
つまみ食いしたほど旨くないおせち

横浜市　長島亜希子

スタイルは劣るがパワー子に負けぬ
窓拭けば客が来るかと子に問われ
欧州の土産にメイド イン チャイナ

熊本市　北川一進

今日だけは素直にしてる見合席
注文に待ったをかける空財布
答にはならず返事のぎこちなさ

鳥取市　山宮愛恵

幸せのひとつ忘れることが出来
美人には遠いが妻の片えくぼ
人脈を持たずしっかり汗をかく

枚方市　二宮紫鳳

ただいまの響きでわかる母の勘
花暦めくりめくって咲く女
子の瞳キラキラとして信じ切る

高知市　桑名知華子

約束を守れず指輪届かない
外からは見えない窓で落ちつかず
あの人と街のどこかで出合いそう

砂川市　武田正美

休日の雨寝不足を補足する
あまりにも倖せ過ぎて出る不平
心身も晴れて男の雨期が明け

兵庫県　藤本芳乃

口紅を引いて似合わぬ顔の皺
雀百まで残り香惜しむ風の詩
好かぬ人下から出れば温い風

唐津市　岩崎實

時がたちあせる心をあざわらい
しめきって一人の世界いろはにほ
折々に思いをはせる流れ雲

宝塚市　飯西ミサヲ

ルーズソックスあの娘がはけばチャーミング
使い捨てせよとばかりの値札つけ
ふる里のみんな達者かねむれぬ夜

兵庫県　仲井素水

ライバルがいるので老いも精がつき
雑魚は雑魚　鯉にもなれず雑魚の自負
託児所を併設したらパチンコ屋

倉敷市　家守政子

夫臥して嫁との距離が近くなり
校庭で子らの歓声杵の音
落穂拾い戦前生れ板に付き

尼崎市　向井末貞一

ここ一番頑張った甲斐サクラサク
想い出す落ち葉焚きから芋匂う
ぼくの出番勢いついてけつまずく

尼崎市　野瀬昌子

カルチャーショック同窓会へ行ってから
仲違いした人が来て落着かぬ
重い腰あげて師走の窓洗う

尼崎市　的場十四郎

疑いも遊びも知らぬ自動ドア
旅先のうどんが温い冬の駅
風紋に風の思いがかくれてる

出雲市　加藤スズコ

一泊に一人芝居の旅仕度
同窓会校舎はいつも消えぬまま
雷が夜半知らせた今朝の雪

尼崎市　河津正治

器用さを見せて遊ばす象の鼻
泡沫と知りつつ老いの淡い恋
誤診だと聞かせて欲しいガン告知

横浜市　近藤道子

裸木に寒くはないか聞いてみる
本心をころりと吐いてぎょっとさせ
いいトスを投げ合いながら老いていく

大阪府　澤田和重

鼻の差で抜かれて運のない馬券
花嫁の父で泣くのを期待され
満ちたりてひとり笑いが出てしまう

倉吉市　山中康子

丑年の晴着がおどる面映ゆさ
敷藁も匂う仔牛のお誕生
弱気でも意地はる虫をたんともち

唐津市　宗　弘

介護した手にしみじみと死の重さ
いつからか自慢の息子嫁につき
多すぎる汚職にニュース欠伸する

堺市　井崎ミサ子

目はテレビ耳は隣の会話聞く
口ベタに付合いベタが輪をかける
旨い物たっぷり食べて病んでいる

横浜市　菊地政勝

味加減大声で聞く妻の風邪
悪さする雀を案山子許さない
良くまわる独楽は静かに立っている

鳥取市　藤　ふうこ

讃美歌のうまい男を好きになり
屋根で見た花火美し父も居た
福耳といわれ余生をかけている

吹田市　西岡　豊

超音波　妻のお腹に石がある
酔うほどにあやしくなってきた淑女
電話口孫の後ろに嫁がおり

和歌山県　尾田綾子

父権喪失ゆらぐ予感の床柱
今日もどうやら無事であるらし電話来ぬ

千葉県　大川晩翠

上も上　下も下なら悪だくみ
置き土産役立つものがあればいい

兵庫県　西川一粲

泣くだけが女ではない黙秘権
酒ほどに効かぬ薬を飲み続け

西宮市　井上俊二

旅支度あすの天気は雨もよう
秋彼岸また来ましたと墓に言う

兵庫県　北川とみ子

あれこれと迷う軍手が干してある
倖せな人で孤独のラッパ吹く

唐津市　林　公一朗

人間の敵は誰かと子にきかれ
生き残りこの頃少し元気出し

出雲市　栂　ミツエ

戦中派もったいなくて捨てません
野のたき火孫といっしょに芋をやき

堺市　桜井荘次

回覧が座り直して聞く噂
舌の上でダンスしているスキャンダル

和歌山県　中村君枝

利腕が時に謀反をくわだてる
てまり唄遠い昔を呼び戻す

羽曳野市　山本たけし

うつされて妻にうつして風邪治る
手間掛ける割りに上がらぬ手内職

和歌山市　武本碧

言葉では言えぬ気持を目で話す
じいちゃんを骨抜きにするもみじの手

岡山県　富坂志重

道端の野菊仏をよろこばせ
クリスマスケーキを孫にお寺さん

宝塚市　黒台伊佐武

閣僚に旬の外れた顔三つ
河豚食って飲んで目覚めて一安心

鳥取県　福田登美

隠すもの無くて税務署あわれがり
振り向かぬ意地をほんとは悔いている

和歌山市　福重美子

お悔みの仲間が増える歳になり
賢い人寄って話が縺れてる

尼崎市　中澤向西

準急の茶髪に席をゆずられる
風上にラッパ吹く人いて困る

和歌山県　藤井春子

父の背を追えば喜劇の樹が繁る
愛情を溜めて木馬の不眠症

倉吉市　大下智子

磨いてもいまさら私光らない
無理をして買ったスーツが似合わない

姫路市　服部一典

寝正月亀が首だし句集読む
凧の糸切れても妻は追ってこず

和歌山市　和田美寿子

いつの日もいつものように待つ不安
餅をつく今は電気で見てる間に

香川県　向山治延

ホテルより狭い我が家が落ち着ける
鶏を横へ置きたい孫の箸

島根県　槻谷仲子

二歳児の孫がパズルに興味持つ
紅葉のかぎりを見せる山の寺

箕面市　木村天弘

借りた傘返しに飲み屋高くつき
偶然の隣人傘に拾われる

鳥取県　権代康女

中流でないが満足した暮し
くどくどと言うから子供そっぽ向く

語り合う幸せがあり風に舞う　鳥取県　高尾　京

追憶と感謝で綴る夢暦　倉敷市　戸田正志

その恩は忘れませんと沙汰がない
やるせない思いの好きな小指です　愛媛県　宮本末子

定年が来て三角の角が取れ
量目が減って料金据え置かれ　今治市　中村好恵

水のんで世間泳げるようになり
どの窓も幸せいろの灯が点る　河内長野市　妹背尽呂久

教えてる割にはうまくないゴルフ
本音すぐ読まれる薄い面の皮　松江市　松浦登志子

四回り何はともあれ生きている
よくもまあこんなに京へ来るもんだ　富田林市　杉本とも子

影法師転ぶ私を見捨てない
肩書きを除けば人が見えてくる　滋賀県　中宗明

ウロチョロと落ち着かぬ癖親譲り
正念場迎えキリキリ胃が痛む　米子市　服部朗子

空仰ぎ若木が伸びる花水木
蟹ありがとう母に挨拶初耳だ　北海道　中里つね一

白鳥のうかぶ蝦夷地の湖しずか
明日もある八十路の峠ひと休み　鳥取県　国森武子

冥土ゆき列の一番後でよい
静かです妙に過ぎし日だけ想う　大阪市　福岡雅子

才能が眠ってるのか昼の月
何時の日か覚めずに眠る時が来る　鳥取県　吉田孔美子

商いのエンジンかける午前二時
ワゴン車と荷を売り捌く策をねる　高槻市　小林一完

老妻と言うから若さ消えて行く
いのちまだ残っています君のため　松江市　小西素子

旅先で自分にも買う土産物
空箪笥嫁った娘の置土産　鳥取県　奥田信敬

松葉蟹三途の川に放しとけ
心臓が先にスタートして疲れ

富山県　増田紗弓

マニアでもないがうれしい切手くる

顔みれば言えない電話掛けてます　大阪市　野村ダホネ

二度めなりこれからゆるり参ろうか

偏屈も時には見せる置土産　鳥取市　山本益子

初雪の白さにこころ引き締まる

欲望の罠にエリート目がくらみ　米子市　猪森スミヱ

目薬をさしてダルマとにらめっこ

カタカナが噛み砕けずに鵜呑みする　横浜市　荒井広和

常識の尺度が違う定規持ち

正月の酒へ片目を瞑る医師　豊中市　岸田知香子

寒空にライトアップの映える寺

店先のポインセチアに急かされる　和歌山県　村中悦男

雑草が大地をつかむ欲をもち

豊年の野菜もらって高くつき　島根県　松本聖子

年ごとに師走の風が身にこたえ

夕食の独りの膳も慣れてきた

何ですか突然ひとに背を向ける

いろいろと思う間に魚焦げ　大阪市　塩谷徳子

匿名で恋の履歴書かいてます

天下泰平男の価値が値切られる　鳥取市　山口芦心

駈けこみ寺たまに行きたい時もあり

ふっと出るお国なまりが喜ばれ　東京都　瀬戸きん子

老いの目にやさしく映える柿落葉

人赦しまた赦されて米を研ぐ　兵庫県　倉垣恵美

老いの身の年齢を忘れた勇み足

通夜の席　亡母の愛唱歌が続き　横浜市　豊田羊子

残り火に添わせた薪が大きすぎ

お断りするしかないがやいゆえよ　島根県　福間博利

半世紀経っても美女はやはり美女

戦争を知らない孫のマイルーム　鳥取市　山本崇

胃の不調腹六分目機嫌よい

雨止んで急に掃除機動き出す　松江市　浦辺静江

鳥取市　森　明美

月下ひとり秋の名酒に酔いしれる

港から足がついてる密航者

鳥取県　橋谷静江

喧嘩にはならぬ夫の誉め言葉

二三杯呑んで無口が喋りだす

麻生路郎三十三回忌・麻生葭乃十七回忌

中島生々庵十三回忌・西尾　栞三回忌

追悼川柳大会

とき　平成九年六月二十八日（土）

ところ　たかつガーデン（大阪府教育会館）

近鉄「上六」から三分・地下鉄「谷九」から七分

☆詳細は次号で発表します。

この一句

もしひょっと妻が死んだらなと思い　路郎

数えて五十年前、病と闘っていた妻が、寝もやらず看病していた私の手を握り「お父ちゃん、わたしもう目が見えなくなった」と一言を残し逝った昭和二十三年五月一日。早朝一番に訪れられた路郎先生が「見舞いに来たのに」と声を落して、へたへたと座られた姿をこの句で思い、看病しながら不安な日日を送っていた頃が浮んで来ました。（**黒川紫香**）

寒中御見舞　ＮＨＫ川柳教室

橘高薫風　前たもつ

北畑金治　上田圭津子

藤井正雄　中山キヨ子

黒田能子　黒台伊佐武

中田純次　田中節子

伊藤武　志田千代

指宿千枝子　福岡雅子

井上直次　小林周信

海老池洋　島崎孝一

古川喜美子　野下之男

島元ふみ　井上俊二

三品征子　緒方美津子

松永会美　井上信子

鴨谷瑠美子　村上治子

渺渺抄

八木千代選

仏壇の前では油断してしまう　吹田市　山本希久子
着ぶくれて古巣に戻れなくなった　鳥取県　鈴木　公弘
座ぶとんの縦横知らず五十年　和歌山市　古久保和子
寒の月　大事な人が病んでいる　西宮市　奥田みつ子
冬の街の隅に吹き寄せられたまま　鳥取県　新家　完司
人恋し欅の下の秋を掃く　和歌山市　木本　朱夏
母だけが大事にしまう子の名刺　出雲市　竹治ちかし
ひれ酒のゆらりゆらゆらどこまで雪　尼崎市　田中　薫
結界を雪が荘厳してくれた　米子市　林　荒介
影ふたつ黄昏させて歩き続ける　宝塚市　永田　暁風
憎しみが薔薇をいっぽん買いにゆく　和歌山市　野々　圭子
限界を越えぬリズムの古時計　西宮市　牧渕富喜子
風景は冬　介添えが欲しくなる　和歌山市　堀畑　靖子
現世に停年はない道具箱　岡山県　小林　妻子
セピア色の若さを潔く捨てる　和歌山市　榎原　公子
古稀からは自分で漉いておいた和紙　松原市　小池しげお
秒読みになっても母の絵が描けぬ　米子市　石垣　花子
一人芝居のコケシを誰も見ていない　和歌山市　川上　大輪
逃げ道は確かに昨日まであった　摂津市　井上　源一
どの屋根も白旗などは掲げない　米子市　政岡日枝子

割れた玉子自由になった玉子の黄　和歌山市　田中　輝子
残像はちぎって捨てた胡蝶蘭　富田林市　池　森子
冬帽子もらってからの立ち話　弘前市　斉藤　劦
ゆっくりと眠る　わたくしの為に　島根県　松本　文子
ルール守れば百歳までも生きられる　鳥取県　土橋はるお
人指した指が私を指している　岡山県　矢内寿恵子
トンネルの前で振り向く雪女　守口市　森川まさお
雲は流れて神の居場所を知らすよう　米子市　小西　雄々
冬銀河わたしの中に横たわり　八尾市　高橋　夕花
問題をひとつ抱えて冬ごもり　藤井寺市　高田美代子
オリオンの夜空に冬の身をさらす　米子市　林　風子
きれいごとばかりはならぬ蝶結び　羽曳野市　吉川　寿美
陣取りの石に不自由せぬ仲間　堺　市　桜沢あか里
石段の数だけ浮世遠くなる　尼崎市　春城武庫坊
花手桶　母の元気を見せにゆく　和歌山市　桜井　千秀
しきたりを脱いで木馬はよく眠る　倉敷市　小野　克枝
真実を伝える手紙書いている　鳥取県　土橋　螢
気に入りの辞書で探したほめ言葉　唐津市　仁部　四郎
下り坂今更競うことも無い　和歌山市　山田　高夫
世の中で自由に出来るのは自分　香川県　成重　放任
振り過ぎる尻尾に輪ゴムはめる僕　豊中市　江口　明光
野良犬の歩幅に油断など見えず　弘前市　相馬　銀波
自転車を尊敬してる三輪車　米子市　鷲見　正子
歩を一つ持って此の世をあきらめず　香川県　木村あきら
○×をつける資格はぼくにない　豊中市　石川　勝
角道があいた戦はこれからだ　美祢市　安平次弘道

ゴキブリとだけは真剣勝負する　横浜市　丹下智洋子
すんなりと嘘の出るのが恐ろしい　羽曳野市　芦田　絢子
ロウソクを点すと亡父母の影になる　出雲市　吉岡きみえ
小さめの枕で夢も他愛ない　広島市　流　奈美子
あるがまま月こそいのち花こそいのち　和歌山市　福井　桂香
一病を明日へのつっかい棒とする　寝屋川市　森　茜
ダブル着て役場に向かう訳がある　黒石市　相馬　一花
友達に顔のないのがひとりいる　鳥取県　上田　俊路
生きている証の灰汁を出している　松原市　玉置　重人
まっすぐに歩きたいのに曲がり出す　米子市　青戸　田鶴
相乗りの薄い縁の紙コップ　岡山県　山本　玉恵
窓あけて親孝行を見て貰う　大阪市　三浦千津子
会話途切れ居心地悪いパンの耳　和歌山市　川上　富湖
過保護から猫科に変わる犬の性　和歌山県　中後　清史
忘れたいことがもくもく湧きあがる　西宮市　西口いわゑ
洗濯は体かばってくれた礼　出雲市　板垣　夢酔
好きな花活けられ壺ははしゃぎだす　和歌山市　青枝　鉄治
半分は横着な血が混じってる　鳥取県　乾　隆風
ばあちゃんが遊んだあとは風邪をひく　大阪市　神夏磯典子
したいこと次々浮ぶから不思議　鳥取市　美田　旋風
庭石に向かう姿勢はもう揺れぬ　八尾市　宮西　弥生
鬼の目に裏がないとは限らない　東大阪市　安永　暁子
夫いま昔の殻に閉じ籠もり　和歌山市　岩本美智子
休日に限って傷が疼き出す　唐津市　浜本　治幸
終わりまで聞いて下さい葱坊主　鳥取市　武田　帆雀
ばあちゃんを骨抜きにする魔女二人　富田林市　藤田　泰子

黙祷の間に十万億土往き還り　鳥取県　乾　喜与志
夢のない男に期待しておらぬ　倉敷市　田辺　灸六
座り場所夫婦に違う視野がある　出雲市　園山多賀子
ゲートボール先ずは公園掃除する　枚方市　前　たもつ
良心が疼く牛の瞳みていたら　和歌山市　宮口　克子
たまにはコントも疵だらけの街で　大阪市　町田　達子
念入りに閻魔のみやげ準備する　滋賀県　中　宗明
あなたなら援護射撃もしてくれる　和歌山市　玉置　当代
悔いのない余生　亡母から頂きぬ　八尾市　高杉　千歩
辞書の字が小さいと不足言う眼鏡　岡山県　富坂　志重
ふところに太陽　実家でやすらぎぬ　米子市　林　瑞枝
男ひとり何とか年を越しました　藤井寺市　田中　透太
岬から白雪姫がいらっしゃる　倉吉市　松本よしえ
罪多いわたしに壁は白すぎる　今治市　塩路よしみ
指輪返して男の無残見ていよう　八尾市　宮崎シマ子
満点が無いから人は面白い　貝塚市　池田寿美子
ワープロを六年いまも片手打ち　豊中市　田中　正坊
破顔一笑されてわたしが騙される　川崎市　和泉見早子
物言わぬ犬に同意を得て安堵　米子市　小塩智加恵
神様も怒り抑える立見席　茨木市　藤井　正雄
二日過ぎてうとかったなと省みる　和歌山市　玉井　豊太
間をおいて笑う　皆に笑われて　岡山市　川端　柳子
妥協した時から一歩出後れる　出雲市　久谷まこと
生活にわさびが欲しい年の暮れ　唐津市　田口　虹汀
血圧のおそろしさなど口々に　尼崎市　春城　年代
流れ星　星にも天寿あるのかも　大阪市　一本　勇太

ありがとうだけしか言えぬオウム飼う　倉吉市　野口　節子
二度わらしそれは涅槃のみちしるべ　吹田市　栗谷　春子
わたくしにゆっくり戻る刻み葱　尼崎市　長浜　澄子
亀万年生きた証があるのかな　米子市　光井　玲子
さよならと言われてシャックリが止まる　砂川市　大橋　政良
雑巾をしぼる涙のつきるまで　大阪市　鍛原　千里
それでも我慢していて誰も気付かない　米子市　白根　ふみ
言い訳は止めとく日誌汚すから　寝屋川市　井上すみれ
念仏寺あまりにちさい仏さま　富田林市　片岡智恵子
爪を切り一段落の旅支度　横浜市　清水　潮華
お仏壇の中で咲き出す日日草　枚方市　森本　節子
もう眩暈するの止めよう水中花　河内長野市　水谷　笙子
愚かにもわたし　同じ石に躓きぬ　寝屋川市　籠島　恵子
今はまだ序の口わたしの運だめし　茨木市　堀　良江
よくよく見たらまだまだ行きとない所　鳥取市　前田　一枝
ささやかな贅沢毎日炊きたてで　京都市　都倉　求芽
山羊座の僕に強い味方は北の風　三重県　佐々木森哉
いつか役立つ母の古着を溜めている　和歌山市　吉村さち子
信頼が夫婦の掟だったはず　鳥取市　春木圭一郎
あの手この手も借りてなんとか切りぬける　八尾市　村上ミツ子
レンタルのサンタ細くて頼りない　横浜市　宮村ちよ路
平均点取れぬが机よく磨き　倉敷市　戸田　正志
雨模様がまん袋を刺しておく　米子市　澤田　千春
悠々自適人畜無害無為徒食　箕面市　岩津ようじ
盛り上がる宴へ小道具大道具　大阪市　津守　柳伸
肩の荷を降ろした毬はよく弾む　尼崎市　田辺　鹿太
ねじを巻く役目を終えて日向ぼこ　横浜市　後藤　早智
先頭に乗って出口が見当らぬ　西宮市　亀岡　哲子
沈黙の母　底力見せて座す　弘前市　佐治千加子
何不自由ないと空しい嘘をつく　兵庫県　大谷幸次郎
夢の中おもちゃのラッパ吹いている　鳥取市　坂田和歌子
公園出来る話を鳩も聞いている　寝屋川市　江口　度
肩書きは捨てろと遠く雲が行く　唐津市　市丸　晴翠
登り窯熱くなってる血の鼓動　東大阪市　松山　隆
花持って男が独り暮れの町　東京都　瀬戸きん子
茶渋つく罅の温もり捨てきれず　横浜市　保田　絹子
お茶だけで逢う愛ですか恋ですか　横浜市　菱田　満秋
もう一度会いたくて待つ黄水仙　岸和田市　古野　ひで
不夜城でちょくちょく魔法かけられる　大阪市　籾山　隆盛
ぼろぼろの辞書はなされぬ年となり　鳥取県　さえきやえ
酸欠の街に一会の風があり　和歌山県　藤井　春子
とんとん板橋影絵は遠くうすれゆく　出雲市　石倉芙佐子
進め進めと亀に兎の応援歌　倉吉市　米田　幸子

山本希久子さんの油断には頷くひとが多いと思います。軽く捌かれていますが、残されたものの心理を抉ってあって、油断という一言から却って、現実の健気さ重さが痛々しく感じられます。押さえる所を抑えて書くのは難しいことです。**鈴木公弘**さんの着ぶくれにハッとしました。生きてきた道のりでどれほど余分なものを身に着けてきたか着せられたか、それはそれで一概に無駄とは言えないけれど、原点に戻れないのは確か。まして冬の心の表現にぴったりの着膨れです。**古久保和子**さんの座布団は面白い着想でした。この事に限らず何十年も人間をしていて、自分のごく身近なものにさえ無関心でいた恥ずかしさ。たぶん両方に縫い代のある方が縦です。

—水煙抄

秀句鑑賞

—1月号から

高須賀　金太

酔う前に酔ったふりして言っておく

谷口　義

日本は酔っぱらいに寛容な国だと言われているが、確かに素面では言いにくいことも、酔えばけっこう言えるものである。ただし、毎回それをやっていると信用されなくなるから、程々にしておきましょう。

わたしを変えるみんなも少しずつ変わる

村上　ミツ子

そうです、自分を主張するのは大事なことだが、あまりそればかりに拘泥していると、人間関係がギスギスしてくる。自分の方から折れていくことも時には肝要である。

頂点の男難聴かも知れぬ

大谷　幸次郎

いいえ、難聴なんかではありません。聞こえないふりをしているだけです。ゼネコンなどの大企業や、われわれ庶民の血税を吸い取る悪徳業者の声は、良く聞こえるのに…。

日本の無くしたものがあるカナダ

水田　秀男

お利息と言われるほどでない満期

古久保　和子

渋滞をしないテレビで旅をする

鈴江　純子

宅配の地酒に期待こめてあり

松山　隆

海外旅行というものを知らない私には、一度は行ってみたいのが外国である。ただし、年金生活者泣かせの超低金利政策を改善して貰わないと、とてもじゃないが無理だろう。

そこで、海外は無理でもせめて、国内旅行ならと、出かけてみればどこもかしこも大渋滞。かくて、宅配便で届いた地酒を飲みながら、炬燵の中からテレビの旅番組を楽しむ破目となる。

ああ寂しきかな日本人！

ビー玉もメンコも知らぬアスファルト

安宅　美代子

今やこの国では、どんな田舎であろうと、山奥であろうときれいに舗装されていて、その点では立派なことである。しかしながら、雨が降るとしみ込むことが出来ないから、すぐに大量の雨水が河川に流れ込んで、水害が起こりやすい。

建設コストや耐久性などの問題はあるが、「透水性舗装」にするべきだろう。

わたくしの歩幅でいつも歩きたい

村上　剛治

朝の駅リモコン操作の人急ぐ

奥野　義夫

ストレスは写らなかったレントゲン

芦田　絢子

背に腹は替えられませんリュック買う

松下　正枝

だれもがマイペースで歩きたいと思っているのだが、なかなかそうもいかないのが世の常。まるでリモートコントロールされているように、無表情の人々がせかせかとした足取りで、今日も職場へと急ぐ。

会社では、サービス残業は当たり前、休日出勤にも手当てはつかず。その上イジメ・嫌がらせの類いは後をたたず、ストレスは溜まりっぱなし、これじゃ過労死もむべなるかなである。このままではいけないと、ストレス解消のため自然に触れようと、リュックを背負い、ハイキングに赴くのである。

誌面が尽きて来ました、そのほかに。

恐いのは時々脳が白くなる

近藤　道子

女性コーナー

黄香の花

西出楓楽選

駆け込めば森は迷彩色になる　和歌山市　川上　富湖
斜からの視線　知らんぷりをしておこう　大阪市　町田　達子
分からない若者言葉　冬の街　寝屋川市　堀江　光子
着膨れて冬と相撲を取っている　藤井寺市　高田美代子
美術館へおいしい夢を食べに行く　八尾市　村上ミツ子
自分との闘い終る日が恐い　大阪市　稲本　凡子
欲あって欲の話についてゆく　富田林市　片岡智恵子
未来などどうあれ今朝のお味噌汁　鳥取市　森　明美
旅に出て忘れた笛の音さがす　米子市　澤田　千春
春の夢見ている冬の入り口で　羽曳野市　芦田　絢子
身辺を思い切り掃く荒療治　米子市　林　風子
今後など思う甲羅に日をあてて　和歌山市　堀畑　靖子
飲兵衛にやたらめでたいお正月　大阪市　本間満津子
人生の一知半解もう峠　和歌山市　宮口　克子
長生きの是非ともかくも竹を踏む　熊本市　永田　俊子
過去形にすれば痛みが軽くなる　岡山県　矢内寿恵子
決心がつきていねいに歯を磨く　富田林市　中井　アキ
乾杯にこぎつくまでの長い道　兵庫県　中野とよ子
私を励ますための赤い服　富田林市　藤田　泰子

人使い荒い日めくりあと僅か　横浜市　宮村ちよ路
痛みわけしようコップの中の乱　米子市　青戸　田鶴
焙り出しすればあなたの影になる　鳥取県　西原　艶子
不信感抱いてはるかな人となり　和歌山市　吉村さち子
順番が来るまで少し仮眠する　米子市　石垣　花子
掛算に明け暮れている子沢山　横浜市　山下　省子
花よりも私が先の霜囲い　東京都　瀬戸きん子
雪しんしん眠りは浅き種子袋　大阪市　渡部さと美
手を出せば握り返した弱い鬼　和歌山市　古久保和子
中程に未練を残す長い橋　鳥取県　土橋　睦子
距離おいて噂素通りさせている　和歌山県　藤井　春子
さよならを重ね大人になって行く　米子市　鷲見　正子
細雪ポストはさほど遠からず　和歌山市　桜井　千秀
わたくしを越せぬわたしの影法師　堺　市　桜沢あか里
忘れたい言葉を耳掻きで捨てる　和歌山市　木本　朱夏
素通りが勿体なくてショッピング　大阪市　日阪　秋子
じっくりと本が答をくれそうだ　西宮市　西口いわゑ
生き下手で仮面のスペアなど持たぬ　広島市　流　奈美子
したたかに生きる女の袖だたみ　今治市　塩路よしみ
思い出が黙秘つづけているタンス　寝屋川市　太田とし子
あいまいな言葉をつつむ風が無い　和歌山市　野々　圭子
紙人形お前も翼欲しかろう　唐津市　浜本　ちよ
首飾りはずす　おんなをとき放つ　八尾市　大内　朝子
猫被り通しわたしの顔になる　今治市　村上久美子
お悔みははきはき言わぬ方がよい　倉吉市　野口　節子

女にも戸締りをして自由席　米子市　白根　ふみ
ゲレンデは白い吐息という便り　和歌山市　福井　桂香
来し方を覗き透かして針の溝　貝塚市　榎原　公子
打解けて境界線を消して行く　和歌山市　池田寿美子
冬桜すこし拗ねてるかもしれん　寝屋川市　籠島　恵子
作り笑い身につけこころ痩せてゆく　羽曳野市　吉川　寿美
整然と洗濯を干す誕生日　西宮市　牧渕富喜子
春の潮が陽気になった網を引く　米子市　田中　亜弥
年金で歩幅を合わす夫婦箸　松江市　浦辺　静江
家出した猫　木枯しに帰宅する　横浜市　清水　潮華
買う気などなかったはずの試着室　大阪市　辻川　慶子
家計簿の赤字二月で取り戻す　八尾市　高杉　千歩
大切な器の重さ確かめる　米子市　永井三津子
喉仏になだめられてる腹の虫　岡山県　富坂　志重
犬すわる指定席だという顔で　吹田市　栗谷　春子
私の命を包む薬包紙　寝屋川市　坂上　高栄
急がない男　大物かも知れぬ　寝屋川市　森　茜
合鍵を息子に渡し安堵する　大阪府　大森　年子
華やぎを少しください冬牡丹　吹田市　茂見よ志子
老春だあと一花を咲かす欲　和歌山市　和田美寿子
地に還る日までは埃払いつつ　八尾市　宮西　弥生
温泉へなびく六十路の旅カバン　大阪市　津守　柳伸
指切りの指を信じて待つ女　和歌山市　森口　美羽
こころまでまるまる渡すお人好し　鳥取市　岸本　孝子
水仙のねじれ葉の言い分よ　守口市　結城　君子

それはもうピノキオでない子の涙　鳥取市　石上　悦子
勉強の虫も羽化して飛んで行く　横浜市　鈴江　純子
後ろから従いてるはずの子が居ない　西宮市　奥田みつ子
寒椿もの憂き中でぽとり落つ　大阪市　神夏磯典子
トンネルの出口で待っていてくれる　芦屋市　黒田　能子
鱗いちまい落せば光る鎌の月　弘前市　一戸　ツネ
退院がすべてよいとは限らない　河内長野市　植村　喜代
あなたにコール残り度数を気にしつつ　八尾市　生嶋ますみ
めっきりと老けた顔にも紅は生き　鳥取市　山本　益子
つぎの電車を待って座って行きましょう　東大阪市　安永　暁子
実印に重い約束ごとがある　大阪市　三浦千津子
日没の早さ師走はあっけなし　尼崎市　春城　年代
娘の御縁　嬉し哀しの浅い春　出雲市　石倉芙佐子

富湖さんの句―私ごとで申訳ないが、最近身辺が厳しい状況に置かれているので「森」を希求している。そんな気分に合致したからだけでなく、着想、表現力共に優れた句だから、トップにいただいた。**達子さんの句**―正面より斜めからの視線の方が、時にはズバリと的を射る場合がある。それを百も承知の上で、知らんぷりをするのも、人生の達人の知恵だろう。**光子さんの句**―「チョベリグ」や「チョベリバ」に代表される若者言葉。それらが難解になるばかりなのは、若者との年齢差がどんどん開いてゆくせいだろうか。「冬の街」が効果的で、中から諦めとも、淋しさとも、羨望ともつかぬ吐息が聞えてくる。**美代子さんの句**―こんな句に出合うと、ホッとして頬がゆるむ。そして、川柳の楽しさを誰彼なしに吹聴したくなる。

干支

寺田甚一選

還暦は働きざかり長寿国　やすお
立派な髭生やして父はねずみ年　たもつ
牛の背に重い行革消費税　正剣
干支聞いて耳をうたぐる若さ持つ　きん子
干支めぐる雪見障子を貼り替えて　螢
若いから十二支すっと出てこない　みつこ
正論を吐いて動かぬ牛となる　強一
丙午愛の炎を抱いてます　雄幸
無罪勝ちとったが干支はひと回り　鉄治
それとなく干支を尋ねて歳さぐる　あずき
こんな時代にまだ気にしてる丙牛　洋
いくつです干支で返してほんわかと　吉太郎
残り火を丑かきたてる老いの春　勇太
アメリカへ発つ荷に入れる干支暦　時弘
強がりを言うとやっぱり干支聞かれ　照子
罪もない干支口実に断われ　重人
恥ずかしや干支の深い意味知らず　有一朗
同じ干支生れが背負う運不運　晋
干支なんか何かと言いたそうな猫　保州
妻も子もねずみ揃って脛かじる　晴翠
十二神将干支の仏に祈ってる　達子
科学者も干支にあやかる初参り　弘

おとなしい干支に似合わぬ子に育ち　圭
干支の絵馬に合格せよと励まされ　典子
女三代女将はみんな強い干支　倫子
丑同士角つき合っている夫婦　久美子
母と娘が水と油で同じ干支　狸村
六度目の干支をむかえるジャンプ傘　ますみ
信じきる干支を頼りに旅に出る　康子
牛歩でもよし一筋の道を指す　岳水
生れ出る子に親と干支選べない　和枝
母子嫁寅三匹で威勢いい　好恵
サバ読んで干支が許さぬ深いしわ　登美
弱いから干支に決断してもらう　忠男
ハンサムな牛を選んで年賀状　奈美子
留年のねずみ一匹いるクラス　哲子
牛のよだれほどの儲けに甘んじる　ひでの
佳
戌と申とても仲良くフルムーン　洞庵
なんの干支モナリザ微笑ばかりする　京子
性格へうなぐく干支を抱いている　満秋
毎年一個粗品で貰う干支がある　大輪
君らしい賀状だ牛がダンスする　帆雀
人
六度目の丑です亡母を十も越え　芳郎
地
血液型も干支も理想の嫁貰う　源一
天
子丑寅よう知ってるなばあちゃん子　藤井正雄
軸
丑年に生れ二番手乙どまり

縛る

土橋はるお選

ポケベルの届く範囲に縛られる　鉄治
ポケベルに縛られ泳がされている　恭昌
縛っても縛り切れないのは心　玉恵
縛られた恋心には近寄れず　タミ
男を縛る一目一目の毛糸玉　哲子
荒縄で縛り故郷から荷が届く　久美子
束縛はされたくないが群に居る　保州
良心に縛られ主張曲げられぬ　旋風
不整脈カメラが縛る二十四時　虹汀
やんわりと縛り誘いをかけてくる　和枝
合縁奇縁二人を縛る赤い紐　志洋
縛られた化粧落とすと出る疲れ　正剣
嫁姑災い運ぶ口縛る　智恵子
バッジはずすと急に人間らしくなる　あずき
縛るのは嫌い私は蛇の仲間　雄々
偏差値でわが子を縛る親のエゴ　倫子
縛られているのか神が来てくれぬ　劦
縛り方一つでわかる宅急便　志重
縛られてあなた好みに染まります　岳水
ゆれている心を縛り小石積む　登美
因習に本家の嫁は縛られる　宵明
長男に生まれ家風に縛られる　佳雲

生まれ故郷の先祖の墓に縛られる　佳雲
特大の葬花偽善に縛られる　勇太
裏書きの三文判に縛られる　寿美
格式の家紋に死ぬまで縛られる　さち子
一本の紐が人生狂わせる　次男
大物を縛ると金ですり抜ける　隆風
五時からの夫を縛る紐がない　京子
択一と言う難問に縛られる　源一
縛られてます月給もろてます　重人
縛られてみたい女がひとりいる　東雲
週五日タイムカードに縛られる　正子
縛られて幸せを知る愛を知る　奈美子
わたくしを縛る職場の棒グラフ　公弘
札束に縛られ道を踏み外す　仁緑
臍の緒でぐるぐる巻きに縛られる　しげお

佳

いい人を縛る言葉が出て来ない　ただし
大物を縛ると水を止められる　帆雀
縛られてから言訳を考える　喬水
幸せの柱に縛りつけてある　螢
お金に縛られると人形になる　雅城

人

一粒のダイヤ女の目を縛る　美代子

地

舌足らずだった思いが夜を縛る　強一

天

融通のきかぬ時計に縛られる　矢内寿恵子

軸

職業がら親父を縛ることもある　洛酔

うとい

堀江芳子選

うとくなる仲を賀状がうめ合わす　圭一郎
家計簿にうといお方がする政治　正子
病歴が長くて世事にうとい悔い　有一朗
うとまれぬように流行追っている　保州
うといのに黙って居れぬ老いの舌　玉恵
六法にうとい女の泣き寝入り　寿恵子
うといのか女心が通じない　清芳
うとい耳噂話は好きらしい　朝子
風向きが悪いとうとい顔をする　喬水
世にうとい老いの哀しきひとり言　ひで
世情にはうとく居職の灯を守る　重人
うといけど地球を汚したりしない　三和
うといこと自覚する間は未だましか　美子
裏道にうとく世間を遠まわり　久美子
リストラにあうまでうとい夫と居る　智加恵
こんなことうとい自分と知らなんだ　一壺
うといからどん尻歩くことにする　隆風
目も耳もうとくなった八十路生き　勝美
一芸に長けて世俗にうとく居る　鉄治
疎まれて華麗に生きる闇の花　克枝
よく言えばおっとり型の妻うとい　保夫
千鳥足我が家へうとい歩を運ぶ　洛酔

花の名にうとく花屋で笑ってる　四郎
目の横のほくろにいつも疎まれる　螢
親心くどい言葉がうとまれる　宏
赤とんぼ疎遠のさとへ向きたがり　洋
老人荘村の彼方でうとまれる　宵明
うとい振りしている凄い奴も居る　ちかし
声のない声にはうといロバの耳　高夫
夜を稼ぐ女で家事にうとくなる　大輪
ぬるま湯の中に浮いてるうとましさ　政良
お隣にうとい番犬飼っている　はるお
うといから何度も同じ本を観る　和歌子
何もかもうといふりして同居する　たもつ
うとい奴と見せて心に抱く野心　恭昌
疎いので気が休まると愛される　智洋子
この土が好きで金にはうとくいる　劦

佳

冬のハエうとい動きを叩けない　善信
星座にはうとく星降る夜が好き　哲子
うといけど何時か賢い牛になる　雅城
いつまでもしっかりしてうとまれる　典子
うといからまだ気がつかぬだまし舟　佳雲

人

うといのはお互い様と笑うとく　杜的

地

目で合図どうかしたかとうとい奴　愛論

天

うとくとも箸の持ち方忘れない　小池しげお

軸

合掌にうとくなる日々支えられ

初歩教室

題 ― 水

吐田公一

前にも述べましたが、できる限り破調句は避けていただくように。確かに最近の投句は川柳の制約（約束ごと）である五七五を、守っていただくようになり、無駄な〝てにをは〟がなくなってきたように思う。

そこで十二月号では思い切って破調句だがドラマ性があり、リズムもしっかりしている句を、佳句としていただきましたが、これはあくまでも例外。

八音字で面白い例として、テレビコマーシャルで馴染みの

レンジは二役主婦五役　嫁妻奥様母女

などは実に簡潔で、リズム感がいい好例。

添削句

○名水は酩酒となって我が膳に　郁子

下五の推敲不足。参考句は〝の〟の連続で焦点を絞り込んでゆく技法

▽名水の地酒の味の酔い心地

○帰省する娘は水の荒使い　幸枝

帰省をヒントにして、都会暮しと対象的な暮しを創作してみました。

▽雨水を大事にしてる島ぐらし

○方円に従いながらも水は澄む　奴夫

中八は避ける。水を擬人的に詠むと

▽方円に従う水で多い友

○浄水は光る玉だと信じきる　雄幸

浄水と光る玉の関係が分からない。出来はよくないが「浄水」と「信する」を活かすと

▽浄水を飲んで長生き信じきる

○淋しくて水の流れに身をまかす　多哥由

下五に難。原句から離れますが

▽淋しさは水面に映る亡母の影

○水溜り選って走った大正子　一典

水溜りを喜ぶのは大正っ子に限らない。

▽長靴がチャプチャプ遊ぶ水溜り

○水も撒き幼馴染の友を待つ　忠男

「幼馴染の友を」で十音字も費やしているので冗長となる。参考句は「打ち水」を擬人法で詠んでみました。

▽打ち水が笑顔で友を出迎える

○水車小屋祖父の唄声聞えてる　みやこ

同じ文言を、ただ上下入れ替えるだけでも川柳らしくなる。

▽祖父の唄声聞えてる水車小屋

○水たまり飛んで走った猫のあと　美寿子

ここには人間が詠まれていない。いつも述べているように、川柳は人間の生活や心情を主として詩うもの。森中恵美子氏の作品を参考に掲げる。

（母はまだひとりでまたぐ水たまり）

○水鉄砲うちあった友笑みのこす　俊一

着眼点が面白い。下五に一考を要す

▽水鉄砲うち合った友すでに亡く

○お水取り手ぐすね引いて春を待つ　宗明

中七がいただけない。ここは単純に待っている心情を吐露すればいいと思う

▽お水取りまだかまだかと春を待つ

○過去はもう水に流して丸く住む　芳水

「もう」は不要。表現はできる限り簡潔に

▽過去水に流して老いを丸く住む

○過去はもう水に流して姑を看る　てる代

これも「もう」は不要。姑を恕した心の中を詠んだ美しい句

▽過去水に流して姑を看るゆとり

○不意をつく電話水道出っぱなし　隆

参考句も上五中七に冗長のきらいはあるが

▽水道を止め忘れてる長電話

○水心なくてタダ酒出しません　専平

表現に一工夫要。参考句も今一つだが

▽水心あればあったでつけ上がり

○終い風呂しのびやかなる水の音　苑　子
視点は実にいい。主婦の終い風呂は大抵家族が寝静まった後。ただできるだけ口語体で作句するように
▽水音も静かにかける終い風呂
○水に橋こころ休まる町に住む　利　徳
松江の有名な橋のことでしょうが、水と橋だけでは読む人に真意が伝わらない。これは多くを詠み込もうとする弊害です。
▽宍道湖に心休まる夕日落つ
○渋やまし水の流れの素直さが　円　女
川柳は素直なものを素直に詠むだけでなく時にはへそ曲りに考えることも必要
▽素直にも見える流れに土石流
○水源にポリ缶並べ貰い水　康　子
この場合「水源」ではなくて〝名水〟では作句した時必ず一度前後を入れ替えて、語感を試されるといいと思う。
▽飛び越えて自信がついた水たまり
○節水の解けて久々つかる風呂　ミツオ
喜びの感情が詠まれていない。
▽節水が解けて湯舟に弾む声
○欲捨てて心は清水の湧く如し　ト　キ
少し固すぎる表現。中八も省略で中七に
▽欲捨てて心清水のように澄む
○水鏡髪をなほして主迎え　ふゆ子
表現は現代仮名遣いで。下五は要一考
▽たわむれた髪型なおす水鏡
○名水は術後のガーゼの水でした　捷　也
名水＝うまいの意でしょうが、ここは素直に表現されたらどうでしょう。
▽手術後のガーゼの水のうまいこと
○幾度か水が合う頃任地替え　早　智
原句はやや説明句に近い。
▽左遷地の水も合ったか生きいきと
○地の怒り人よせつけぬ土石流　君　江
人命を巻き込む意の方が
▽地の怒り人を巻き込む土石流
○後悔を流す蛇口に口をつけ　羊　子
いやな気持を流したい表現としては
▽後悔を流す水をば一気飲み
○苦い水飲んで世間を知りました　剛　治
恐らくこれは若い頃のことであろう。初めて知った「苦い水」であれば、知りはじめの方がよいのでは

佳　句

水枕母に無理言い甘えた日　きん子
お使いを通せんぼする水たまり　宏
水溜りまだ飛び越せる父の足　徳　三
（類想句に前掲の森中恵美子氏の名句があり参照されたい。）
水加減湯加減知らぬ花嫁さん　日出子
（長い目で。下六がやや気になるが）
一言が水に流せずひっかかり　美　子
汗水を流した米を買いたたく　幸次郎
（米自由化の嵐――農家には大変）
湧き水に一息入れる登山靴　志華子
せせらぎの水音恋し里の夢　よし子
水鏡風に縺れる影二つ　つよし
水面へ心に描く好きな人　タツエ
（乙女心をいつまでも保つ若さが羨しい）
愛憎を水に流した遍路旅　絢　子
震災が教えた水の有難さ　泰　雄
（大震災の水の教訓は身にしみる）
過去水に流し笑顔の孫を抱く　ま　さ
（結婚反対の過去を上手にまとめている）
名水を汲んで寛ぐ午後のお茶　登　美
（水のよい土地は有難い。贅沢の極み）
（素直に詠まれたのがよかった。）
水ぬるみ女の胸も温み出す　智洋子
（みごとな春の詩）
込み上げる怒り水音高くする　碧
（よく感情が表われていて申し分ない）
誘われて飲んでしまった甘い水　ミツ子
（私の句と同想だがこの方が佳）

私の句

収賄が誘われてゆく甘い水

路郎賞　川柳塔賞

候補作品中間発表

平成八年九月号～十二月号

路郎賞候補作品

吉岡美房

地獄また面白からんこの暑さ　麻生アート
無策の日　空から栗が一つ落ち　荻野鮫虎狼
実が爆ぜて秋も情けも深くなる　田中　透太
淋しさを燃やして秋を暖める　木本　朱夏
懸命に生きたと自分史に書こう　木村あきら
補聴器で優しい言葉だけを聴く　淡路ゆり子
無に出来ぬ恩をいくつも受けている　堀端　三男
花火弾けて天の深さを思い知る　川上　大輪
ケンカしたことがないとはおもしろい夫婦　玉置　重人
台風はどないしてると起きてくる　安藤寿美子
ふところのふかい母ですよく笑う　細川稚代
塞翁が馬とおろおろせず暮す　寺田　甚一
出世には見事に遠い正義感　高瀬　霜石
一握の砂がこぼれていく別れ　伊藤　寿美

小池しげお

母乳呑むまるで太鼓を打つように　政岡日枝子
飲み過ぎに注意と書いてないボトル　相馬　一花
烙印が疼く背中だ見せられぬ　両川　洋々
蟻が書くシナリオ　セッセ　セッセセッセ　尼　れいじ
大根を煮ている妻に牙がない　石川侃流洞
人間を揶揄いながらカラス生き　川村　映輝
自己陶酔の幸せにちびりちびり　土橋　螢
真心のこもった嘘をついている　鈴木　公弘
一日と二十四時間とは違う　三宅　保州
町内でぼくが一番年長者　滝北　博史
今日生きて赤い夕日をかみしめる　岸　桂子
目を入れて貰ったことのないだるま　土橋はるお
菊手入れ飴一袋ふところに　武田　帆雀
賞め上手叱り上手の母の膝　細川　稚代
棄権した奴と政論して負ける　舟木与根一

板尾岳人

曼珠沙華ははのなみだの吹き溜まり　一戸　ツネ
乳房から伝わる母の海の音　政岡日枝子
正論を吐きつくしたる蟬の死や　桑原　道夫
目の奥で女は青い火を燃やす　石垣　花子
先に咲く花から散って諭される　茂理　高代
便箋が満ちて漂流するわたし　田中　輝子
一つ許してすべてを許す落し蓋　稲葉　冬葉
逆らわず母といっぽん木を移す　田中　叶
地獄また面白からんこの暑さ　麻生アート
蛇口からぽたりと漏れていた秘密　山田高夫
風呂敷に包めるほどの哀なのか　吉川　寿美
右脳も左脳も秋の荒野となりにけり　新家　完司
香水のかぐわしき哉　乱を生む　西口いわゑ
煩悩よ消えよ消えよと茶筅ふる　島　ひかる

小島蘭幸

鱗一枚はがせば涙溢れそう　一戸　ツネ
母乳呑むまるで太鼓を打つように　政岡日枝子
他所の児を叱る温さを持っている　野口節子
淋しさを分け合う猫はもう居ない　小玉満江
大根を煮ている妻に牙がない　石川侃流洞
縁側の陽ざしの中で和解する　小野　克枝
さびしい人がいつも見ているテレビ　氏林　洋敏

一つ許してすべてを許す落し蓋　稲葉　冬葉
豆の木に登るリストラ対象者　田中　叶
米を研ぐ夫のためであるもんか　槇田　英詩
ムンクの叫びにいつでもなれる水鏡　川上　富湖
空からはみんな見えてる国境　仁部　四郎
親子だな同じ所につまずいて　鈴木　公弘
この家に居るこの部屋に居る唯ひとり　麻生アート
遮断機が上がると走る癖がある　川上　大輪

河内天笑

母乳呑むまるで太鼓を打つように　政岡日枝子
お許しを得て糸屑を取ってやり　相馬　一花
一日一日　借りを返して行くつもり　野口　節子
大根を煮ている妻に牙がない　石川侃流洞
どこまでが仮面　どこまでがわたし　高瀬　霜石
負け癖がついたアキレス腱を撫で　土橋　螢
体調を計るお酒を呑んでいる　前　たもつ
ワッハッハ娘五十の誕生日　田辺　灸六
波が打ちあげしもの皆ゆるさるる　桑原道夫
目は開けているのに何も見ていない　鈴木　公弘
おこった顔を自分では見られない　大角正道
悟り切った姿で花は散るのです　岩本　笑子
落日へ只ぼんやりと吸い込まれ　西口いわゑ
こおろぎへ申し送って蟬はてる　麻生アート
騙されて騙して親と子の絆　肥後和香子

川柳塔賞候補作品

川島　諷云児

以下余白　素顔になれぬ日記帳　杉山　精子
花の種みならいなさい落ちこぼれ　山中康子
葱きざむ音が聞える浄土より　神原まさと
台風よこころして来い病母がいる　谷岡ふみ
いつからか息子の傘にいる私　中川　楓
孫の恋どうか異性であるように　藤田　泰子
貧乏に我慢強さを仕込まれる　岸本　宏章
子育てを終えて夫と恋をする　川島　良子
揉み手することも覚えたおじぎ草　田辺鹿太
嫁　妻　母　おんなに戻れないわたし　西村りつえ
頼りない記憶で辞書が忙しい　中村　好恵
ぺこぺことはがきがお辞儀して届く　猪森スミエ
俺よりもでっかい靴で子が戻る　朝倉　大柏
残り火を燃やしてくれる火吹竹　藤原　一平
死んでからもらう保険は掛けてない　谷口　義

福本英子

子を叱る私を嚇る血をしかる　藤田　芳郎
覚えてるうちに新語は使わねば　武島ちよえ
遅刻した人に上座が空けてある　佐藤　次枝
還暦の夫へサボテン贈りましょ　楠見　章子
物忘れ金庫の数字貼ってある　平川　幸枝
煽てたら男はタラの木に登る　中居　善信
二の矢まで飛んできました落ち目どき　中村　君枝
口開いて言いたいことがある埴輪　今岡貞人
ライバルの首には鈴がついてない　村上ミツ子
焼き芋を値切る夫が頼もしい　田辺　鹿太
牛飲馬食貧乏神を追っ払う　正橋　正
哲学の道でも愛をたしかめる　中井　アキ
こんにゃくの寺へ来ましたお父さん　古今堂蕉子
聞くだけの耳がいちばん草臥れる　芦田絢子

小林由多香

心まで覗かれそうで眼を逸らす　八木　芳水
窓際に行き全体がよく見える　菊地　政勝
お日さまに笑われそうで仲直り　伊藤　尚子
背伸びする男の見栄を笑えない　中居　善信
大切な一人の親をもてあます　杉本　孝男
賞味期限過ぎても未練まだ残り　塩路よしみ
讃められて花は散華を予感する　藤田　芳郎
焼き芋を値切る夫が頼もしい　田辺　鹿太
おふくろにちょいと甘えてよろこばす　木村　親蹈
落ちそうで落ちず水滴思案する　大西　文次
毎日が日曜　夫と時計見る　印藤　智子

敬老会　昭和の席がこそばゆい　岸本　宏章
切り礼の夢一つだけ掌に残り　佐々木森哉
宝物いくつ持っても重くない　立蔵　信子

榎本吐来

神主の太鼓は銭になる響き　渡邊伊津志
三猿を守る奥歯を軋ませて　今岡　貞人
丸い人ばかりで会がまとまらず　二宮　紫鳳
タイムカード今日一日を売り渡す　奥野　義夫
進化論この後　人は何になる　村上久美子
我がままをちょっぴり残す片えくぼ　岩倉キク子
新盆へ和尚ペンツで現れる　川島　良子
野良犬の確かなものを持つ瞳　森　茜
酒少しならとやっぱり名医です　三浦　強一
人の出来　血液型で片付ける　後藤　早智
ペーソスを隠すピエロの化粧台　荒井　広和
ネクタイを緩めてからが正念場　江原　秀夫
ばあちゃんの読経が朝を支配する　田辺　鹿太
めいっぱい言うて無口に負けている　山根めぐみ
母の忌やあのころ月にいたうさぎ　藤田　芳郎

宮口笛生

断りにきたのに昆布茶出して来る　神原まさと
結婚も離婚も決めたのは浜辺　平川　幸枝
出目金よ何を見たのか聞いたのか　宮本かりん
脳回路　時々ショートして困り　倉益　一瑶
薬にも毒にもなれず忘れられ　神保坊太朗
けっぱくを主張している冷やっこ　安宅美代子
焼夷弾降った河原で見る花火　和田　和風
極楽を予約して来た寺の寄付　木村　親蹄
生者必滅ひそかに写真決めておく　佐藤次枝
ドラマにはならずコントで終る恋　佐々木森哉
提案をした本人がやらされる　菊地　政勝
うぬぼれの川に時々流される　杉山　精子
モーニング着ると笑いが堅くなる　岸本宏章
無理するなするなと役をおしつける　北川とみ子
ふる里で息吹き返す国訛り　桜井　荘次

西大寺会陽川柳大会

とき　**2月23日**（日）午前9時半開会
ところ　西大寺ふれあいセンター
（西大寺税務署西隣）
兼題・選者（各題2句・11時半締切）
「面」　橘高薫風　選
「煮る」　村井見也子　選
「車」　小野真備雄　選
「まつり」　大西泰世　選
「ひとり」　石部　明　選
「欲」　政岡日枝子　選
「毒」　竹原和美　選
特別課題（当日発表）JR西大寺提供　寺尾百合子　選
会費　2000円（発表誌・昼食呈）
投句　タテ20㎝×ヨコ4㎝の句箋使用
裏面に雅号を明記、投句料500円を添え、左記へ
〒704　岡山市金岡東町3－4－16
山口流木宛
主催　西大寺川柳社

麻生路郎の作品とその周辺

大空のこゝろ (73)

橘高薫風

春雪食思　正岡蓉

―ことしの晩春の日記をみる。―曰く、

『沈丁花咲き、素袍桜も庭ざくらも山吹も飴桃も源平桃も、小庵の樹々はればれ蕾も含らませているのに、けさは雪』

春の雪は消ぬがに降るべき風情なのを、けふのは霏々と小止みなくふる。―正に萬延元年元巳以来…といふやつである。

こんな日にはさしづめ鍋ものが好ましく、貧しい厨にも青葱があるから、一と皿なにがしのあらでも購い求めて、ごく、さつかけなく、ぐづぐづ煮てみやうかとかんがへてゐる。

配するに寒さを凌ぐ茶碗酒…もよいけれど、このごろ自分は、余り我が家では親しい友だちでも来ないとのみ度いとおもはない。

…昔、細長い都々一の本を持ってゐた。開板年月が誌されてゐなかったが、弘化辺りのものらしく、その口絵に雪だるまのわきに丁稚がゐて、だるまの上には鰒と葱がおかれてあった。その絵の鰒への食欲を、さればいまも忘れかねて雪がふるとつくづくおもふ。―こういう構図はどうしても江戸らしいが、而し、この本、版元は浪華だ。最も例の四月に鰒をくらって死ぬ『らくだ』が、もともと大阪噺であることをおもへば、何も雪だから、鰒だからとて、木場辺りのしょうさい風景に独専しちまふ手はないであらう。それには

〈橋の下には鷗が来やる、木津や難波の橋の下…と旧い、哀しいおゝさかの子守唄は、こうして江戸と同じく並蔵の多い河岸のしじまをもおしへてくれるのだから―。

―序にたべもののことは余談になるが、

〈拙者　この土に用事はないが
　　お顔みたさにまかり越す

というのがあった。―いかにも故しん生の『棒だら』や、桂圓枝の『口合茶屋』へでさうな勤番侍の口吻がうかがへておかしい。

（中　略）

―所で、自分なぞことしからまた高座と文筆の二足わらぢだから、成可、時間を有効につかって、あそぶときは大いに近郊の旅へでて、英気をやしなひ度い所存だ。

片桐千春とでもまた武州飯能の春にあそんで、東雲亭で、暮春の野のもの、山のものに親しみたい。たんぽゝの花のおひたしに―名栗川の鰻も、これからは美味しくならう。鰍のあぢも、飯能はぼくをこよなき楽しみにさそってくれる。―さて春の雪は未だ熄まない。

『抱きしめて逢う夜は雪のつもりけり』

という憎い句がたしか泉鏡花にあったが、あんな境地もしみじみ恋しい。ぼくにも、雪ふれば鰒のやう、切々とおもふ女優くづれの、酒場をんなの人妻がひとり丈けはあることをか、せてもらって筆をすてやう。

雪は―春の雪は、未だ熄まないできれぎれにふる。今夜はよほど、つもるであらう。

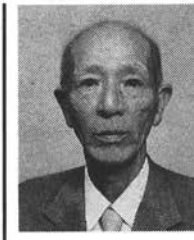
―さて、どうして季はづれのゲンコーをあへてかいたか。六月朔日は、古川柳に

御献上　富士さへ蒼くみえるころ

とある。即ち、加賀さまから冬ぢう貯へた氷をば公方さまへ献上、のこりは加賀鳶の手でちかくの町人たちへ配られた。

それをおもひ、これをおもへば、九夏三伏、あへて、たゆたな春の雪をしるした、これの小片も、一服清涼のたつきとなるであろうかと、あへて爾云。（旧仮名遣い原文のまま）

雑誌の編集はかくありたきもの。有名人による硬軟こもごもの原稿は興味が尽きない。



久家代仕男会長を悼む

尼　れいじ

十一月二十七日昼過ぎ、会長の奥さんから電話「昨夜病状急変し入院、今朝お医者さんから、一両日が山と言われました」とのこと。十二月に入ったら、来年のいずも川柳会等の相談旁々御見舞をと思っていた矢先でした。「どなたに連絡していいやら分かりませんので」との奥さんの言葉に「後は私の方で連絡しますから」と言うのが精一杯でした。

数人の方に電話し都合のついた四名で病院へ駆けつけましたが、すでに話すことさえ出来ぬ会長の姿に涙さえ湧かず、ただ一縷の望みを託して別れを告げました。

十二月一日朝、会長のことが気になりながらも、きゃらぼく忘年句会に出掛ける準備をしていた所へ会長の訃報が入りました。この日は寒波、悲報に心まで凍てつき、米子行きは諦めねばと思う一方、会長の米子へ行きなさいという声がするような気がして、予定通り米子行きの電車に乗り句会に出席。その席で薫風主幹はじめ出席の方々に会長の死去を告げました。句会終了後、早々に金築雨学氏の車に同乗し、章峰、多賀子、れいじと四人で吹雪の中、三時間半かけて会長宅へ行き、遅ればせながらお悔みを申し上げました。

二日の葬儀には、河内天笑副主幹夫妻が来られ、早速代表焼香をお願いしましたが、さぞかし会長もびっくりされたことでしょう。

久家会長は昭和六十三年四月、父緑之助亡きあと「いずも川柳会」会長に選任され、今日まで九年間あの優しい笑顔そのまま『和』をモットーに会の運営に当られました。かたわら、塩冶・高松両公民館川柳教室の講師、一方では平田川柳会・平田灘分川柳会の会長として後進の指導をされました。その上、山陰中央新報・島根日日新聞の選者として川柳普及活動にも情熱を燃やされました。

また川柳以外でも、寺の総代、JAや町内の役員などに推され、信望の厚い方でした。

「いずも川柳会」運営には亡父緑之助の意志そのままに『和』を信条として受け継ぎ、益々の隆盛に導いていただきましたことに対し、深甚なる敬意を表しますと共に、陰ながら「いずも川柳会」をお守りくださいますよう心からお願い申し上げます。

九年間の会長在任中、最大のイベント「いずも川柳会七十周年記念大会」に、今思えばかなり辛い体調ではなかったかと思われるのを押しての出席、今少しお気遣いすれば良かったと悔やまれます。

会長は非常に親思いであったことはお話する節々に感じていたものの、あらためて句を読んで、その思いは切々と胸をうちます。

穏やかな母みほとけの貌で果て
不幸なお償えぬまま逝き給う
晩年の母ひたすらに丸かりき
酢昆布と母に手渡すシクラメン
小康を得た日の老母に粥を炊く

そして、今、天国でお母さんと何を語られていることやら、また、先に逝かれた柳人との再会にあの笑顔で話されていることでしょう。安らかにお眠りください。

合掌

俗名　久家義雄（雅号）代仕男
法名　正徳庵釋義浄不退
享年　七十六歳

丸山よし津さんを偲ぶ

門谷たず子

今更に飾る気はない冬木立

平成三年NHK近畿大会での、よし津さんの特選句です。いかにも爽やかな彼女のお人柄が偲ばれます。よし津さんは大阪市玉出の誓源寺の三人姉妹の真ん中として、大事にされてお育ちになりました。ご縁があったのか小学校・女学校と御一緒させて頂きました。彼女は成績が良く、その頃の女専にパス、卒業後は就職、そして、素敵な御主人と出会われて結婚、お二人のお嬢さまにも恵まれて、倖せな人生街道を歩まれました。

昭和五十七年頃、川柳にお誘いして、故西尾栞先生の教室に通ったり、全日本川柳大会などの機会に各地へ旅行したり、川柳塔の吟行にも参加しました。アルバムのどの頁にもよし津さんのあの恰幅あるお姿が見られ、楽しい思い出をいっぱい積んでまいりました。

彼女は頭脳明晰、ハキハキと明るく、さっぱりした気性の持主で、喧嘩もしましたが、すぐ仲良くなり、同じ学校出身の私達グループの大切な一員でした。最後にお会いした十二月西宮北口句会でも、お元気でいい句を発表されていました。その折、何を思われたのか『あさひ川柳抄（朝日新聞柳壇秀句集』を「グループの皆に回して最後は貰っておいてね」と私に手渡され、そして「これは私の集大成なのよ」と嬉しそうに言われました。

花あざみ　生きる姿勢は変えられぬ

お人好しで胸のボタンを掛け忘れ

道草をしたので深い彩が出る

風当り避けて寡黙な水中花

片付けにかかる一代限りの家

行き暮れて山の高さを知らされる

どの国の母にもつらい銃の音

本の表紙の裏には、自筆で〝ほどほどのそのほどほどがむつかしい〟とサインがありました。よし津さんの感性溢れる秀句ばかりです。なお、先般、出版された正本水客先生の句集「和」に掲載された仲間の句の中にも、

次の世もやはり女で渡りたい

涅槃西風命の果てのあっけ無さ

という彼女の句があり、ギョッといたしました。近年、少し目が不自由になられ、京都の柳誌への投句も止められました。その最後の句〝保護色に馴れて林を出たがらぬ〟が互選で最高点になり、「有終の美を飾ったわね」など、何気なく話し合いました。今にして思えば、何も彼もお別れに来てくださったようでご縁の深さに涙するばかりです。

いつも、あなたのおかげで川柳ができて良かったわ、と言ってくださったよし津さんでしたのに、突然、十二月十八日入浴中に倒れそのまま、帰らぬ人となってしまわれるなんて…。お倖せな生涯でしたが、最愛の御主人を残されたことだけが、お心残りだったと思われます。でもお嬢様方がしっかりと守っていてくださいます。どうぞ安らかにお眠りくださいませ。ご冥福を心から祈ります。合掌

弔句

突然の悲報師走の風無情　はつこ

友の訃に賀状書く手が凍りつく　房子

倖せのまっただ中を散り急ぎ　文

おかっぱに還る面影香けむり　絹子

思い出をたぐればうるむ走馬灯　たず子

本社　一月句会

一月七日(火)午後五時半
メンズファッションセンター

西日本上空を強い寒気が覆った七日、本年初の本社句会は八十八名の出席により定刻開催された。

はじめに昨年末亡くなった本社同人、宝塚市の丸山よし津さんに黙祷を捧げる。

次いで橘高薫風主幹の年頭の挨拶がある。氏は十一月末からの風邪をこじらせ、年末から入院する羽目となり、一時は落ち込んだが点滴の効果てき面、食欲もでて、ぐんぐん快復し、休養にもなったと言う。病院のベッドにて、川柳塔の将来、さし当っては今年六月に行われる麻生路郎夫妻はじめ四先生の法要句会について思索をめぐらせていたと話した。

次に昨年度本社句会月間賞杯永久保持者、平松かすみさんへカップが授与された。

初出席に堺市の上野楽生さんを迎える。

月間賞は吉岡美房氏（藤井寺市）に輝く。

（司会—隆盛）（記名—月子・弥生）

（受付—金太・寿美・英壬子）

席題「ひとり」　小林妻子選

ダブルベッドで今はひとりでねています　昭子
まだひとりですかと亡妻が夢に出る　三男
ひとりにはひとりのけじめある灯火　茜
年男急きも慌てもせずひとり　満州
ひとりっ子マスオさんにもなる世相　満州
胸張って生きるひとりの初もうで　朝子
皿 茶碗 沈めひとりの喪にこもる　雅文
反対はひとりだけだが手をあげる　シマ子
母の愛ひとり占めして茶髪の子　狸村
にこにこと社説を読んでいるひとり　幹斉
思いきり泣こうひとりになってから　たつお
シングルの顔をしとこう旅だもの　良知
ぜんざいや男ひとりは恥ずかしい　東雲
裏切りが一人出てから総くずれ　文秋
一病を貰いひとりでないと知る　茜
鍵っ子のひとり灯を待っている　悟郎
ひとり住むジーパン犬がよくなつき　英壬子
仕合せでひとりになったことはない　たもつ
頑固さがひとり合点の免罪符　狸村
おひとりですか意味ありそうで気が揉める　千秀
年金の舟でゆうゆうひとり旅　夕花
独りぼっちパントマイムの寒い部屋　隆盛
橋渡しばかりが好きでまだひとり　恭昌
も一人の俺は美人が好きらしい　しげお
木守柿ひとりぼっちも悪くない　朱夏
潑剌とひとりの城を謳歌する　歌子
ふたりからひとりにかえる朝のパン　朱夏
妻の留守さあて何でもできそうだ　和子
ひとりになる準備内緒でしています　富湖
ひとりでも鍋をつつくと強がりに　信子
大阪時雨　女ひとりの傘をさす　笛生
落ち椿たったひとりを恋う雫　いわゑ
風の中春を探しに行く　ひとり　みつ子
三面鏡女ひとりをもてあます　いわゑ
佳
たった一人で春の卵を抱いている　森子
大屋根がずっしり肩にひとりっ子　かすみ
通帳をひとりにやにや見ています　金太
鏡餅たったひとりの世帯主　美房
ふたりずつ去ってひとりの花時計　かすみ
人
ただいまと誰もいないが言ってみる　信子
地
たったひとりの父へ何にもしてやれず　希久子
天
ひとりにはひとりの詩があって春　美代子
軸
老母ひとり古里に居て指令室　妻子

兼題「息子」　西口いわゑ選

疲れたら帰っておいで息子たち　美代子
息子二十歳　本音で喋る小正月　柳弘
いつからか私を越した息子たち　典子
どん底で育て息子も頑張り屋　洋
息子には太平洋を見せておく　しげお
息子だと見てしまうから腹が立つ　信子

一枚の切符と息子走り出す　寿子
長男がバトンをしかと握りしめ　寿子
寄りつかぬ息子淋しく頼もしい　頂留子
刃こぼれは見せず息子と酌む酒よ　たず子
僕よりも息子貫禄あり過ぎる　悟郎
泣かされた息子それでも宝です　一風
息子から振り込んできたお年玉　茜
息子には息子の悩み春の夢　弘直
三本の矢の一本が女装する　森子
偏差値の青春でした息子の机　桂香
男同士の酒を息子と酌み交わす　寿美
墨壺の苦労息子は知っている　たもつ
大地蹴る息子の意気を信じよう　勇太
振り向いた息子にそっといたわられ　稚代
生まれましたよ 息子です 息子です　哲夫
そのうちに息子が呼びに来る同居　鬼遊
めしよりもパソコン仲のよい息子　幹斉
ときどきは一本提げて来る息子　紫香
叱られて息子に感謝する年だ　妻子
企業戦士の貌のぞかせてきた息子　茜
しめ縄の芯に息子と置く絆　雅文
息子とは呼べなくなったニューハーフ　大輪
息子には核廃絶を語り継ぐ　正坊
奴凧も息子も糸を切りたがり　洋
父のレールを走る息子は誰もなし　武庫坊
マスオさん増えて表札ふたつずつ　満州
赤ちゃんのときもあったのだよ息子　保州
息子から花束とどく誕生日　みつ子
息子よ僕より高く翔んでくれ　悟郎

ぬぎすてた息子の靴の大きさよ　ますみ
息子には息子のビジョン核家族　三男
人
子がふたり息子も少しえらく見え　月子
地
いつのまにか私の視野を出る息子　希久子
天
巣立つ日の息子に贈る父の地図　諷云児
軸
お年玉息子にもらう年になり　いわゑ

兼題「甘い」　春城　武庫坊　選

ライバルを甘く見過ぎて火傷する　悟郎
チョベリバを否定できない世の甘さ　大輪
大福餅が甘く安心してしまう　しげお
読みの甘さで味方に梯子外される　寿美
モナリザの微笑に甘い罠がある　諷云児
ふる里に蛍がもどる甘い水　萬的
経営の見通し甘い三代目　狸村
泣き顔に弱いやっぱり女親　あやめ
不器用で甘いことばが出てこない　信子
欲しがりませんで育った親で子に甘い　三男
青信号甘い判断してしまう　夕花
爺ちゃんの甘さ知ってる肩叩き　吐来
新世紀子に甘くしたツケが来る　みつ子
父ちゃんが急に甘えてぞっとする　とし子
寒椿あまい話は口にせぬ　朱夏
焼酎の甘さが君は分かるかい　金太
甘いなあみんな味方と思ってた　ダン吉

駅前のティッシュに老いをくすぐられ　鬼遊
冬苺 好きだよという甘い嘘　希久子
撒き餌する声はだんだん甘くする　千秀
美しく光らせておく甘い罠　朱夏
甘い言葉はいらぬ空気のように添い　たず子
甘い水疑いながら飲んでいる　しげお
太陽がくれた甘味に適わない　昭子
助け舟をこころの隅で待っている　美代子
生きるため甘えさせない白い杖　昭子
甘くとも祖母のしつけにある道理　絹子
甘い顔見せぬフジモリ リマの街　柳弘
甘栗の袋とかるい旅に出る　たつお
毒舌も意外に甘い人情味　愛論
玉三郎男隠して甘い芸　章久
義理ほどの甘さ二月のチョコレート　希久子
佳
慰留されると思っていた辞表　保州
三世代同居夢見る老夫婦　正坊
枯野一枚甘い乳房が干してある　勇太
少年は親の甘さを知っている　房子
甘すぎる話へそっぽ向く勇気　笛生
人
甘えたら崩れてしまう埴輪の目　和子
地
冬山もときには甘い顔をする　典子
天
ときどきは甘えてみたい弥勒の手　和子
軸
甘い言葉にだまされておくお正月　武庫坊

兼題「時間」　吉岡美房選

時間通りにみんな来るから肩が凝る　大輪
人生のラストを飾る持ち時間　朝子
ない時間作って趣味の拾い食い　高栄
鳩時計わるい時間を見てしまい　鬼遊
運命の波にまかせた時間表　稚代
時間まで勤め無遅刻無欠勤　千秀
ロボットも時間を食べて生きている　鹿太
芽生え待つ女きれいな時間待つ　弥生
シンデレラになれる時間を持つ少女　雅文
メルヘンの時間を恋が泳いでる　朝子
時間だけは神平等にくれ給う　一歩
待つことの幸せを知る花時計　吐来
定年で余るどころか足らぬ時　一風
決断に時間がかかる風見鶏　諷云児
時間売るパートも終えてコンパクト　章久
コーヒーを少し残して待つ時間　昭子
起きている時間が勤務中の主婦　保州
生きてきた時間の中に修羅もある　いわゑ
二時間も待たせて恋も風邪をひく　妻子
暖気流にのった時間はすぐ過ぎる　茜
軽い掟のなかで時間が流れ出す　寿子
時間止まったようにロダンの像の影　萬的
一分か二分で男の骨をぬく　幹斉
十二単着るほどかかる冬の朝　満州
リトマス紙時間稼ぎはせぬように　桂香
百までは待って貰っている時間　しげお
時間よとまれ二度と逢えないひとといる　いわゑ
伝言板に待たせた時間おこっている　茜
秒読みにあわてだす勝利の女神　隆盛
氷点下の時間がつづく黒い薔薇　森子
大好きな先生がいる時間割　しげお

佳

赤い靴逢うときめきの待ち時間　正雄
あくせくと時計は見ないかたつむり　隆盛
縺れ糸ほぐす時間を稼がねば　稚代
余命表まだたっぷりとある八十路　文秋
愛ひとすじ余分な時間捨てました　幹斉

人

一秒の誤差で命が枯れ急ぐ　森子

地

ふところの隠し時間が騒ぎ出す　とし子

天

待っている時が一番好きと言う　信子

軸

アリバイが無くて時間に叛かれる　美房

兼題「迎える」　板尾岳人選

仮出所手荒く記者に迎えられ　美房
春迎う七草粥の香の中に　一二三
一番星のお迎えならば従いていく　夕花
百万人目の客がびっくりした拍手　たつお
真紅の薔薇で迎え撃ちたい人がいる　寿子
大安の使者を迎える日の正座　妻子
お迎えの車　渋滞しています　典子
初雪が迎えてくれた無人駅　希久子
迎えうつ用意は出来ている自信　房子
迎春の二字筆太に書く象寿　あやめ
ふるさとの母を迎えにいく切符　昭子
ランナーを迎える旗が温かい　狸村
定年を迎えて軽くなった靴　諷云児
はるの陽ざし迎えて光る福寿草　英壬子
七草粥春を迎えに行きましょう　しげお
お迎えはいいよ閻魔へ書く手紙　大輪
お迎えに行ったあなたも帰らない　半蔵門
迎え討つ鬼にやさしい子が一人　たず子
ふる里の駅で刑事に迎えられ　友熙
迎え撃つ敵はわたしの朝寝坊　満州
一番うしろでエプロンを取っている　冬葉
来迎を信じた母の枕経　正坊
上向いて歩くと星が出迎える　弥生
ライバルを迎える花を選っている　いわゑ
非を諭す母は捨て身で子を迎え　愛論
玄関へ妻は迎えに出て来ない　金太
友達を迎える準備トイレ拭く　みつ子
迎え酒飲んで答えを訊きに行く　金太

佳

平成九年炎の章で幕を開け　寿子
三つ指をついて迎えた母の意地　森子
迎え撃つ敵は手強い方がよい　桂香
迎え撃つ敵のひとりは妻だろう　寿美
迎春の準備に本を買いました　隆盛

人

笑顔いっぱい集めて寒を迎え討つ　森子

地

温かく迎えてやろう冬の蠅　鹿太

天

百万本のバラであなたを迎え撃つ　冬葉

軸

万華鏡　母を迎えに行きたがる　岳人

兼題「期待」　橘高薫風選

初夢へ期待をかけて焚くお香　稚代
門松のそばに期待が山積みに　武庫坊
初空の字凧に期待くっきりと　隆盛
行革の熱い期待の年が明け　高栄
期待してすこしお腹を空かせとく　月子
期待されすぎて浪人しています　しげお
子の期待親の期待がずれ始め　庸佑
いつの日か翔べる期待の竹とんぼ　鬼遊
期待と不安郵便受けが震えてる　良知
期待した桂馬動けぬまま負ける　一風
期待した新芽に水をやりすぎる　弥生
期待より花は小さく頼りなく　シマ子
ひとつ枯れひとつ育ってくる期待　洋
期待外の花が一際うつくしい　いわる
終って見れば期待通りの数字出す　三男
一番強い一番脆いのも期待　雅文
血圧がどっとあがってくる期待　朝子
遺伝子を思えば期待できません　満州
ドラフト一位金の卵が孵化しない　正雄
喚声の中で空振りしてしまう　哲夫
父さんは期待をされたなれのはて　正雄
ネクタイを締め直してる期待感　萬的
行革への期待端から崩れそう　正坊
新世紀　戦なき世を期待する　ダン吉
核のない地球期待に陽が昇る　ルイ子
心痛めユニセフ募金する孫に　千歩
お年玉期待してない一年生　楽生
散歩への期待ポチにも媚がある　たもつ
金だけの期待をされる国になり　かすみ
夢いくつ期待しながら縫う枕　笛生
期待には遠いレールがはずされる　美房
期待せず期待もされず仲が良い

佳

期待してますと話をしめくくる　寿美子
紙芝居のおっちゃん期待裏切らぬ　大輪
恋すればきっときれいになる期待　稚代
ガラスの天井にぶつかった期待　半蔵門
御期待にそうべく卵泡立てる　寿美子

人

最後には自分自身に期待する　信子

地

子供からきびしい父を期待され　昭子

天

人間の弱さが期待ばかりする　美房

軸

蕗の薹土筆少々伸び過ぎる　薫風

（清記―希久子）

原稿募集

「この一句」

心に残る句・座右の句など、一句（作者名）と二百字程度の文章をお寄せください。

番傘いざよい会 ひなまつり句会

とき　**3月8日**（土）午後1時
ところ　大阪府社会福祉会館　ホール
（地下鉄「谷六」または「谷九」）
宿題と選者（各題共選）
「カード」…柏原幻四郎・板野美子選
「ときめき」…田口一香・北沢尚子選
「空　気」…中田たつお・田頭良子選
「　岬　」…高杉鬼遊・森中恵美子選
会　費　1000円
席題なし・各題2句・しめきり2時

京都塔の会二十五周年 会報三〇〇号記念句会

京都塔の会は、松川杜的氏の傘寿祝賀も兼ねて次の要領で記念句会を開く。

とき　**2月27日**（木）午後1時から
ところ　京都府立総合社会福祉会館（ハートピア京都）
交通便　地下鉄「丸太町」駅南出口⑤番すぐ上
兼題　型・築く・面影（各題3句）
会費　1000円

老地柳壇

毎月25日締切・30句以内厳守　編集部

川柳若葉の会　宮崎シマ子報

もうこんなに指折っている年の暮れ　留吉
除夜の鐘蕎麦屋は湯気の中で聞き　清芳
七三に開いてリスクかくしてる　田実子
無駄って何寄せては返す波に問う　あずき
やんわりと妻のペースに乗せられる　慶子
酌み交わしこころ開いた仲となる　能子
あと幾年気楽にいたし気張りたし　香住
開かれた魔法の箱に夢がある　弘直
遺言に待っているよと書いてある　喜美子
そのページ開けてごらんよ君が居る　欣史子
二毛作組んで男に悔いはない　シマ子

川柳塔おっぱこ吟社　木村あきら報

マージャンの貸しご破算でご栄転　吟笑
道端で羊が虎に化けている　あきら
七癖が滲み出ている父の靴　くに子
ロボットが手ぐすね引いている人事　マツエ
酔い醒めてみれば他愛のないケンカ　ひかり
転んでも続けて走る子に拍手　治延
遺言をしとけば良かった河豚料理　坊太郎
肩書がとれて人間丸くなる　いさむ
逆転で負けた悔しさバネにする　よしみ
転んでも只では起きぬ手の早さ　正雪
傷心も刻の名医が癒やすだろ　放任
嬉しくて悲しくて呑む酒の味　ふみ
起上りこぼしの好きな老父と老母　かおり
仏壇をむかえ亡夫のご命日　チカエ
転んでも起きるファイトは持っている　はつ恵
人生の起承転結我が物語　中3なみ子
浮き沈みしつつ人生強く生き　文仙

岸和田川柳会　田中文時報

いつの間に迷うた道の寒椿　きさ子
進学の志望に迷う学期末　盛之
外出着時計横目に迷う妻　呂万
迷い出す銭と相談ショッピング　辰郎
迷いつつ迷いながらも母のもと　冨志子
サミットで未然に防ぐ核競争　さよ子
酸性雨未然に何か言っている　ダン吉
無欲などあるはずなしと見る世間　朝一
勝因は無欲でしたと金メダル　洋
被災地に無欲で尽くすボランティア　昭二
大当り無欲で回す白い玉　東雲
未だ欲と縁の切れない昨日今日　敏光
抽籤会無欲の子供当てて来る　一斎
政治家が無欲だなんてあるもんか　弘象
欲が無い顔が受けてるまとめ役　狸村
隠れ酒ナースに食った大目玉　文時
鯛も児も目玉いきいき誕生日　苑子
兄弟でお目玉食った幼き日　鹿太郎
塾通い母の目玉に追い出され　浪速子
解らぬがもっともらしい顔をする　基
もっともと思わせ買わすセールスマン　路子
野次馬がもっともらしい事を言う　輝彦
もっともらしい話に罠が掛けてある　甚一
もっともな話と母さん茶を入れる　けい子
ごもっともいつもあの人立てておく　一弥
もっともな理詰め遁れるすべが無い　白光子

ペン皿の会　鍛原千里報

自画像に今は笑える傷一つ　勝子
ひと鉢の花を咲かせている窓辺　いくの
花束を抱いて写した退院日　暁子
頭ひやして誤解といている　秋子
よろこびを分け合う人のそばにいる　久子
人生の喜怒哀楽に酒があり　慶子
よろこびを分つ親友毒舌だ　寿美子
古希迎う喜びの日も一人居て　式美
それぞれに子らが来たりて秋日和　清子
喜ぶ顔が見たくてミシン踏んでいる　智子
羽づくろいしてそれなりに老いていく　千里
花よりもケーキ喜ぶ妻でいる　友美
よろこびを勝ちとる汗は惜しまない　節子
手の届くとこで句読点を打つ　凡子

川柳東大阪　森下愛論報

ほっこりと土と対話をするゆとり　朝子

アトリエは黄昏いろを残すのみ　森子
屋根裏の詩人が抱いている未完　湖風
七五三歩幅に限りなく期待　信治
銀河鉄道乗れる期待を捨ててない　シマ子
定年の日から傾く父の船　諷云児
花嫁を乗せると速度あげる船　度
アウトロー何処へ行っても船がある　元紀
消しゴムで消された青い僕の恋　弘直
雑念を消したくひとり石の庭　ばっは
要領よい男そこらにもう居ない　柳宏子
風向きがかわり本音を裏返す　雅文
さわやかな目覚め家族のまるい風　柳伸
しきたりの風に追われてむらを出る　茶の子
ビル風が収穫のない首へ来る　しんじ
コスモスのあたりでかぜの足をみた　こころ
この恋も未完椿の花が落ち　治也
影法師がかくれて未完の笑い　白兎

久世川柳クラブ　二宗　吟平報

晩秋の夜長を飽きず視聴覚　光水
来客へ番茶一つのおもてなし　久子
お祭りが来るたび亡母の寿司の味　ただし
風に舞い歌いながらに散る紅葉　禅心
改修へ昔の川がなつかしい　亜矢
昔の事思えば懐かし母の顔　伊久栄
小春日に昔を語る二度童　冨士野
おこりん坊昔のままで手をやかせ　美恵子
昔ならビンタ一発張ったのに　善代
同じ釜食べた昔とすぐ和め　吟平
腹の底泣いて上目は朗らかに　のぶ子
朗らかで男の無口カバーする　志重
いつまでも朗らか若さ失わず　すみれ
ほがらかさ心の広いお人柄　秀香
一杯で朗らかになる下戸の酒　旭泉

川柳クラブわたの花　吉村一風報

七十年頭打ちつつ生きている　春江
礼服が女の色気漂わす　知佐子
灰色を捨てて余生に花が咲く　美代子
さっぱりとシルバー貴族街を行く　民子
ありがとう今なら言えるあの人に　八寿子
セピア色父の話を叔母に聞く　宏
華やかな舞台へ続くいばら道　剛治
礼状を書きかけ電話してしまう　ミツ子
咳に効くきんかんの色鳥が好き　道子
あたたかい柄を選んでプレゼント　君江
旗色があやしくなって呑む話　春子
朝からのテレビ夫の真正面　幸枝
頭打ち子はひと回りでかくなる　一風
背信の友へ一礼して別れ　シマ子
マージャンを徹夜で打って妻の乱　美津留
自己主張俺には俺の色がある　隆盛
叱りすぎ親が子よりも先に泣き　友甫
わたくしももみじの色で散るを待つ　朝子
去年より若い色買うカーディガン　ますみ
姫路城夜には夜の色の映え　トシエ
原色が好きで一途に生きている　まさと
園児行く黄色の帽子入り乱れ　明子
礼服がしっかり者に見せる宴　けいこ
税を食う悪の野心に憤る　いつふみ
華やかなネオンの色をひとり抜け　鬼遊

川柳後楽吟社　従野　健一報

自転車がパンクしている朝の風景　拓治
鳴り止まぬ太鼓をひとつ持っている　幸子
バイブルを徹夜で読んだことがある　まさお
どうポーズ取っても美しき欺瞞　正秀
魚道など知らぬ魚がよく釣れる　吉則
プライドを捨てて粗品の列に入る　邦季
棹さしてみたが若さに流される　浄美
インターネット言葉が一人歩きする　哲郎
鈍足でスーパー籠を持ち回り　博友
こだわりが体の中で燃えている　信善

佳句地十選（1月号から）

田中輝子

裸から男こぼれる乱れ打ち　幸子
土壇場で一枚岩になる夫婦　黙人
灯台に来て確かめる肩の雪　美子
渦一つ残して落ちてゆく夕陽　登子
赤とんぼそうしてみんな居なくなる　春蘭
回ってる間は勝負捨てぬ独楽　鉄心
絶対の自信の中に落し穴　松風
酔うと出る我が名曲は軍歌なり　喬水
亡母の味摑むにやっと母の齢　獏沓
競うことおおかた終えた日向ぼこ　扶美代

雨風に打たれ余生の破れ傘　青銅
体調を聞けばまあまあが気にくわん　柳五郎
寝つかれぬ床で余生の道探り　たけ志
儲け儲けととなえてから狂った駅　道博
いずれ来るゆっくりゆったり墓洗う　美智子
羨望の音で見送るコンバイン　佐加恵
円満に公私多忙の日が暮れる　金吾
冥土とはどんなとこかと亡父に聞く　忠成
はぐれ鳥ピンチを越える知恵さがす　桃風
犬に綱引かれ行事が一つすみ　吟平
古稀過ぎてよく働いたと医者が褒め　照路
竿先にとんぼ止まりし親子竿　典隆
新聞が見にくくなった老いて見え　敏明
野良猫の気迫に負けたゴミ捨て場　草風
吹く風も侘びし姓名旗が揺れ　秋月
口笛を淋しく吹いた十二月　鮫虎狼

川柳塔みちのく　小寺　花峯報

酋長の髭にスルメがついている　五楽庵
寝転んだ野原で青い夢を追う　花峯
髭のない男にかける唐辛子　一花
口説かれてみたいわ　わたしあなたには　集人
ほろ苦き自画像にあるレモンの絵　あかり
過去形のドラマの影を追うレモン　千加子
左遷地で口説き話を聞くトンボ　劦
剃りあとの凄まじきまで覇者の顎　黙人
不況にも陰で支える髭がある　井蛙
青い鳥探し樹海に迷い込む　ふさゑ
髭を剃る昨日の罪を根こそぎに　ツネ
騙されたふりして青い説を聴く　銀波
武勇伝髭のあるのが大将で　柳々
青空を映しぬかるみ解脱する　影郎
髭生やす人間変わるかも知れぬ　雅城
口説き落し別姓の砂噛んでいる　花匠
プライドがうっかり逃がす青い鳥　生恵子
老夫婦紅茶にレモンどっこいしょ　一光

南大阪川柳会　寺井　東雲報

口先の巧者にあった落とし穴　萬的
几帳面雑巾いつも白くする　庸佑
世渡りの巧者な妻の低い鼻　寿美
追風に乗った分家が家建てる　秋子
雰囲気に乗れぬ男の背が軋む　千里
交通マヒ高速料を返さない　度
余命表丸木の舟に乗る心地　志華子
舌は健在アドリブで切り抜ける　文秋
乗車拒否いやな予感の運転手　悟郎
相談にのりますお金ないけれど　ダン吉
調子に乗ってピエロに終るなよ　恒明
雑巾がけやってみたいな永田町　直子
乗り換えるたびに目減りのする金利　柳伸
当然の如く割り込むでかい尻　市子
歯車に油当然俺も酒　章久
自信過剰巧者の読みが狂い出す　柳宏子
物忘れ歳数えれば当り前　咲
ぎこちない双葉マークに乗る不安　正博
恥ずかしそうに雑巾を買うおばあさん　哲郎
雑巾が乾いて妻が病んでいる　智子
宮水に仕込み巧者な杜氏の味　久峰
上座当然ご来賓の顔　顔　顔　たもつ
猫をかぶって追風を待っている　千梢
雑巾縫うみんなやさしい顔になる　シメ子
追い風に乗る時を待つ花の種　公一
追い風に乗った御仁にさからわぬ　三男
追い風が優勝馬をなでている　日出子
雑巾を縫う手九十とは見えず　真砂
雑巾の気持になってよく動く　東雲
追風や七十の歩を軽くする　久子

城北川柳会　吐田　公一報

使うてもへらぬ金ほし年の暮れ　あい子
ようお参り他人と他人の交わす笑み　政子
あした散る花にたっぷり礼を言う　とし子
たっぷりと有れば有ったで備蓄米　史風
割り勘でたっぷり食べた満足だ　美代子
菊花賞たっぷり馬にしぼられる　トヨ子
一筋の灯に道を教えられ　久留美
たとう紙に晴着のままの妻眠る　秀夫
お土産を気にせぬ旅をしてみたい　あき子
たこ焼の舟のぬくもり秋祭　春蘭
裸婦像の胸から拾うノスタルジー　昭子
たっぷりと陽を浴びている素焼鉢　睦子
正確な時計が凝らす老いの肩　白峰
非行の子待って母の灯点いたまま　典子
玉子酒よく効く母の風邪ぐすり　一枝
無為無策　無策のままで暮れなずむ　登美子
野心家がすぐひっかかる誘蛾灯　ただし

ユーターン待って家中灯を点し　満津子
山ほどの話　鞄に詰めて旅　八重
地図にない道に迷っている羊　高栄
窓灯鍵っ子ほっと息をつき　達子
ひと呼吸おそい話題がはずみ出す　寿美子
あれからの歴史を語るラブロード　純子
酒冷えたまま真剣な話らし　扇帆
たっぷりと法話聞かされ眠りたい　静子
煩悩と同じ重さのいのち抱く　倫子
骨拾う箸先託びることばかり　公一

三幸川柳教室　三宅　保州報

一徹で押しまくるから嫌われる　敏子
押されても倒れぬ太い杭になる　秀男
空缶を押せばポコッと夏を吐く　親路
輪を保つために感情押し殺す　三千子
客受けのツボを押さえた渋い芸　嘉平
押し殺す思慕は花野の露となる　靖子
泥かぶる覚悟で黙秘押し通す　公子
押されても竹の撓みで跳ね返す　美智子
くどいほど念押す母の苦労性　碧
杉の子に真っ直ぐ伸びる天がある　百合子
天下とる望みは捨てぬ古帽子　さち子
超氷河抜け出た孫に天高し　千秀
足元が死角になっている天狗　保州
わだかまり捨て蒼穹に誓うもの　桂香
天を指す大きな夢がある苗木　みね
百姓が天職でした鍬眠る　貞子
ささやかな夢が遠のく低金利　和代
幸せを乗せて笹舟遠ざかる　正一
遠い日の起床ラッパにふと覚める　正匍
エアメール　ことりはるかな音で着く　章子
綿菓子に遠い祭りの味がする　鉄治
遠い日がまた甦る祭り寿司　当代
永遠に探し続ける青い鳥　武春
同床異夢あなたの背なが遠すぎる　朱夏
赤紙一枚炎の恋を引き裂かれ　初子
セールスが恋人に似て断れぬ　悟
逢うまいと決めた女の束ね髪　和子
エスコートしてもされても赤くなり　孝子
そっと椅子引いて下さる人で好き　満洲子
校庭の隅で追ってた背番号　町子

川柳塔わかやま吟社　宮口　克子報

慈悲満ちる弥陀の優しい目にすがる　高夫
内定書今年の雪は温かい　良
背伸びしているライバルは怖くない　保州
森を出たアダムとイブの罪の数　射月芳
伸びる芽を摘んでいるのは大人たち　金太
たかが法螺そんなに伸びる鼻じゃない　呑天
伸びすぎたゴムの末路を嗤うまい　富湖
淡雪の積もり積もったエネルギー　正博
北国の雪これでもかこれでもか　大輪
雪が舞い無垢の世界へ包み込む　佐代子
まならうに雪降り積もる父の墓　輝子
この雨が雪になる頃娘が帰る　英子
生きざまを黙って諭す雪しきり　美羽
君の胸めざして雪は翔んでいく　寿子
今は満足いろいろあったけど夫婦　重治
紀伊の里人の和と輪で幸満ちる　淳太郎
満ち足りた今日を大事にして生きる　和重
さわやかな心を満たすボランティア　美子
イブの日は煙突掃除しておこう　紫香
イブに逢う約束をして征ったきり　三男
手術のイブ底抜けに明るくいよう　豊太
アダムとイブどちらかが嘘ついていた　萬的
欲しいものパパのサンタにそれとなく　年子
イブ踏んだ女の性は永遠に　泰子
ありがとう静かなイブのひとりごと　めぐみ
愛一途ナースのイブの灯が温い　冨美子
ケーキ片手にイブを歩いている平和　さち子
新調のドレスにイブの鐘が鳴る　誠子
再会の約束があるイブの夜　稚代
息抜きに騒音の中イブの街　紀美女

竹原川柳会　時広　一路報

もみあげに冬が来ている寒い朝　高2史子
一日中葉っぱを食べているうさぎ　中3千枝
北の宿から絵手紙を描いている　蘭幸
我は旅人戻る気は無い始発駅　菁居
未知の旅ドッサリ発見して帰る　のばら
小間物屋ほどに並べて旅土産　静佳
紆余曲折の旅にも咲いていた野菊　房子
上昇気流に乗って旅立つ蜘蛛になる　静風
バンブーが近すぎるので未だ行かず　清水
留守番の出来る私は果報もの　喜久恵
ほめられて肩叩かれる初対面　規代

肩車した子も二児の親となり　笹　舟
孫肩に嬉し嬉しのお祖父さま　八重美
ヌード画を肩から覗きこむ男　美佐雄
一本のビールで肩の荷が溶ける　一　枝
肩張って生きた父には父の主義　貞　子
自分より大きくなれよ肩車　蝸　牛
壁一つみんなの自由守れるか　夏　喜
落書きの残った壁に叱られる　勲
蓑虫も壁の向こうを見たくなる　栄　恵
一枚のバラの絵壁を喋らせる　喜美子
君にならきっとのりこえられる壁　比呂子
夫唱婦随壁を越えたは二度三度　笑　子
壁新聞ホットな記事が目に止まる　節　夫
壁を乗り越えて表彰台の金　一　路

川柳大阪　坊農　柳弘報

缶詰の貝は貝がら捨てられて　中2　圭
生きざまを貝の器で計り見る　信　酔
我慢してラッキー台で大当たり　須賀夫
家系かも何故か諦めいいのです　多　香
繁盛のひみつ明かさぬかくし味　美すゞ
あんまりや年金暮しに消費税　河南子
被告席貝になったり喋ったり　叭　笑
貝がらに恋をしまって嫁ぐ朝　喜　楽
赤い糸互いに我慢してると言い　川　童
怒ったら負けやの我慢茶をすする　雅　巣
喉仏　男はここで我慢する　良　花
やどかりは分相応の家に住み　鉄　心
しじみ汁天守が映える松江城　しげお

深呼吸空があんまり青いから　まつお
花言葉並べ娘の域を出ず　洛　酔
しじみ汁ああ私は日本人　青　道
涙腺は我慢限界娘の挙式　司
いい人やあんまり無理は言えません　美　花
あんまりや税の行方が霧の中　比呂志
何故違うボクと社長の靴の減り　一　歩
あんまりや金利下がって夢しぼむ　かよこ
公害で蛤さんもやせてきた　敏
嫁姑我慢くらべてやじろべえ　柳　昌
貝の口開けた笑顔は本ものだ　希久志
貝になるはずの男がよく喋る　ダン吉
ふんばった形で我慢してる父　笑　風
限界が来たのにトイレ見つからぬ　金　太
しぶ柿も色づき秋の風にゆれ　三十四
我慢する顔が羅漢の中にいる　重　人
偏屈で貝になれない天の邪鬼　柳　弘

高槻川柳サークル卯の花　川島諷云児報

平気ではおれぬ相談持ってくる　白渓子
始まった妻の小言を聞き流す　よ志子
平気なら眉間に皺は寄せないで　稲　子
一人ぼっちやっと平気でする食事　ルイ子
失ったあの日あの時もう一度　東　雲
昔話なくした母のお針箱　(松)芳　子
エリートが進路失うスキャンダル　波留吉
失った月日を戻すネジを巻く　とし子
これ以上失うものの無い強み　泰　雄
失って始めて知った樹の温み　恵美子

恩を売る気持無いがと無理を言う　庸　佑
あの恩この恩玉手箱に詰めてある　杜　的
きりぎりす一日生きていちにちの恩　薫
カラオケに二つ返事が五・六人　かおり
主婦という立場で歌う軽いうた　節　子
カラオケのマイクに寄せる恋の唄　一　笛
カラオケに今日の時間を食べに行く　高　栄
出る処へ出てカラオケが役に立つ　二　南
カラオケへ寺の帰りに誘われる　しげお
三食昼寝カラオケもついている　重　人
今朝の茶の苦さにあったわだかまり　英　一
ダルマさん両目入ると上を向く　あきら
千頭の羊が運ぶ夢の馬車　源　一
忘れたい過去があとからついてくる　瀧　小
古里は遠くて地図を開くだけ　紫　香
風葬とやきれいごとすぎはしませんか　伸　子
故郷の浜が絵になる一夜干し　静　江
新しい自分を見たいベレー帽　秀　夫
ノータイのくらしに慣れてきた軍手　スミ子
点滴を見詰める瞳再起期す　柳宏子

川柳塔唐津支部　久保　正剣報

柿食えば日本の秋が語りかけ　公一朗
消しゴムで消える想い出など持たぬ　あ　き
ヘリコプター見上げる青の美しさ　タ　ミ
新製品の陰で積まれる廃棄物　晴　翠
金銀の屏風別姓包み込み　四　郎
浮動票が首相を決める民主主義　弘
ここ掘れワン黒い蓄財ざっくざく　幸　夫

医者の用心八分目に聞いておく　久仁於
夫婦して今年も聞くか除夜の鐘　虹汀
現役を引いて歳暮も大分減り　高明
赤い実が目を引く夜の寒くなり　實
不確かな世情に挑む屠蘇を酌む　正剣

西宮北口川柳会　亀岡　哲子報

片隅の机　わたしを知りつくす　いわゑ
ふるい机　起死回生のヒントくれ　義子
きまぐれな答あしたの風が吹く　能子
ひとり暮し答にいつも逃げられる　求芽
独り住み自問自答をくり返す　江美
一期一会の旅が答をくれるかも　佳秋
おおかたの答もう出た茜雲　たず子
見栄はった答が首をしめる暮れ　ひろ子
そこのとこうまく言えないけど答　春蘭
答出ぬまま母の介護に明け暮れる　ルイ子
過ぎた事忘れ上手な妻と棲む　まさお
過ぎ去ったよろこび眼鏡拭いている　みつ子
欲望が過ぎて人間狂い出す　三男
お喋りが過ぎて大根煮崩れる　正とし
ささやかな夢もつ古稀のイヤリング　泰子
ささやかな十二月八日の朝の膳　富喜子
お互いにささやかな嘘持つ夫婦　萬的
ささやかなしめなわ飾り仮設の灯　故よし津
ほんの少したしなむ母の赤ワイン　英子
缶ビールで乾杯してるクリスマス　涼子
地球儀を回して安い旅に出る　諷云児
普通の朝を嬉しく思う茹で卵　澄子
木を伐ってこだま帰らぬ森となり　てる
冬の陽に丸い背中をどやされる　鹿太
広い道車でせまくさせられて　隆子
騙されてみようニコニコ笑うから　哲子
風は気まぐれ用もないのに戸をたたく　キク子
知っているくせに何にも言わぬ妻　しげお
雑草は雑草なりに花をつけ　正坊
ノーと言う答なかなか言えません　杜的

ほたる川柳同好会　井上　直次報

四つ角で出会いがしらにまずい人　ただし
生涯の出合い不思議で面白い　純次
また会おう軽い約束永遠に消え　馬洗
今会った人の名前が浮ばない　正安
何年ぶり会っても仇名すぐに出る　竹二
空の上新年に会うハム仲間　桂子
頼りない亭主に明るい妻が居る　明光
見合しろとても明るい娘だぞ　博史
悪びれぬ子の明るさに親が負け　方郎
輪の中で輝いている明るい子　善守
窓明かりあすは試験か夜もすがら　祥風
八合目やっと明るい富士が見え　たけお
明暗を分けた主砲のホームラン　清史
明るさを余生にくれた妻の在り　よしろう
謝って元の明るい輪に戻る　英子
病床に明るいニュース置いて来る　昭子
ヘルパーと明るく笑う車椅子　まみ子
ユニークな学部で人を集めてる　吉太郎
へんくつとも言われユニークとも言われ　蛍柳
ユニークな五百羅漢に亡父の影　直次
ユニークで人を煙に巻いている　保子
ユニークなお人でと引き合わせ　キヨ子
ユニークな屋台おやじの愚痴も売る　久子
ドラフトも目ぼしい奴は逆指名　正三郎

川柳ささやま　酒井　靖子報

落ち葉踏む今年もいろいろありました　恵美
甘いのはよくないけれど孫ですの　とよ子
あっさりと世帯譲った身の軽さ　純子
乾杯の音頭受けるも齢の功　芳乃
ひらめいてみたい日願う車椅子　美智子
昭和史の傷は孫にはつがせない　多美子
時どきは泊りで出るも嫁孝行　すず子
乾杯で恋が実ってゆく若さ　末野
妻の留守メモに書き添うシラス干し　市三
米びつに女の歴史が積んである　八重子
俎板のへこみに祖母の歴史あり　素水
冷蔵庫満杯にして妻の留守　とみ子
戦争の悲しい歴史を背にたたむ　つや子
乾杯へスタンドグラスのいいひびき　ヒサ子
鍋こがす厄日になった妻の留守　和子
自分史に夫婦の歴史が息をする　冨美
ひらめきをひょいとつまんだピンセット　可住
欠伸して笑って今日も留守の番　靖子

大原川柳社　矢内寿恵子報

苦労してこいと呟く父の背な　あすなろ
半端銭幸せそうな音でなる　和子

今日も無事ひとり呟く仕舞風呂　ひでの
割りきれぬ半端で少しもめている　たづ子
半端事ならず無情の風に泣く　美佐子
呟けばわびし叫べばなお悲し　敏子
飽き性で中途半端が目に痛い　こふゆ
半端には半端で使うよいところ　喜美子
盛りすぎた愛が半端な子に育て　巴子
弓を引く力半端で矢が笑う　正己
ぶつぶつと何か気になる嫁の声　たけよ
愛情が半端で花が枯れていく　悦子
切りすてる半端の中にいつも居る　妻子
中途半端へもう決断の機が迫る　辰江
今日もまた半端同士の旗の色　玉恵
選挙戦半端な返事感づかれ　さちこ
半端でもあてにされてる今が花　やすこ
この道は半端ではない浄土道　すみえ
何もかも中途半端の半世紀　あやこ
プライドが中途半端を許さない　寿恵子
多趣多芸半端どころでない舞台　みづえ

京都塔の会　松川　杜的報

いのちの森に思い残して去る小鳥　礫
思い出に買う京人形が亡妻に似る　波留吉
国鉄マンの汗の地　瀧と清流と　武庫坊
SLの汽笛に想う故郷の秋　澄子
白羽の矢みなで立てたとおだてられ　ただし
あれ以後は糊を食べない雀です　百合子
入院のベッド慰めに来る雀　白渓子
嫁がせた日から味わう孤独感　倫子

相談でとても解決せぬいじめ　正坊
歯車に相談している水車　友熙
相談があってないよな里帰り　栄
お菜の相談しかもうないのんか老妻よ　シマ子
補聴器で相談事が遠回り　瀧小
相談にならない相談聞いている　諷云児
相談は吉祥天に聞いてから　静江
相談に行ったら居留守使われる　柳宏子
んもすんも言わずに食べている夫　冬葉
タイムトンネルの向こうへ大きく汽笛なる　葉子
水鏡うつしてみたし老母の顔　芳子
汽車走る音もなつかし梅小路　紫香
緑の館浮かべて池は秋の雲　杜的
水底の翡翠の玉も息づきぬ　京子
どこがよくて都会なんぞに住む雀　求芽
一言一句味わいながら聞く法話　庸佑
健康を気遣う妻の味に慣れ　英一
膝寄せて孫が小さな願い事　房子
老母を看る相談口が重くなる　飛鳥
墓まいりあの株どないしときましょ　寿美子
正直に言えばと少し酔うている　水客

わかあゆ川柳会　松本はるみ報

店あけるまでの苦心は口にせず　菜々
軽くとも重石は重石でいるつもり　ふじ子
ぴちぴちと曽孫三人いるわが家　一宇
湖南病院老いたわたしの休憩所　鈴江
夕映えへ心のしこりがまた騒ぐ　民子
もうすでに許しております胸のうち　かつ子

幾山河越えてもまだまだ見えてこぬ　聖子
瓢々と生きて親の歳を越え　好栄
まちまちの意見にぐらつく設計図　ちよえ
捨てて来たつもりの鬼に攻められる　英子
人間の辛さは胸の奥にある　はるみ
昼の月ひとりぼっちで峠越す　博利
ぐらつきへ陰で支える妻がおり　清泉
子午線を越して昨日へ逆もどり　白汀

川柳塔きやらぼく　政岡日枝子報

掃き寄せてみれば大事なものばかり　八重子
新婚のピアノは今日も春の歌　天雀
防音しピアノの苦闘思い出す　朗子
岬には今日も漁場の便り舞う　春枝
冬の海岬に孤独のしかかる　玲子
岬は知る千年前の海のいろ　保子
国曳き神話に明りをともす岬の灯　なみ
西方を見つめる地蔵立つ岬　寿々子
仏の立ち寄る岬をねんごろに　亜弥
岬からライバルの海見とどける　晶子
半世紀過ぎし夢路にある岬　瑞枝
羅針盤岬をていねいに回る　ふみ
岬まで引きずってきたわだかまり　日枝子
岬の灯さがして進むまわり道　恵子
守りたいものありずたずたの岬　千代
岬まで来ると帰れぬ覚悟する　紫布
生きる道教えてくれた岬の灯　千春
岬の祠は何かを知っている　蘭
灯台を支えて岬たじろがず　美世

嬉しい日哀しいときに行く岬　荒介
岬から見ると鯨がよく見える　花子
光らない岬こぶしの中にある　てい子
遠くから見ればやさしい岬です　ゆき
傷ついたかもめが安心する岬　富美子
岬から見える領土が戻らない　正子

サークル檸檬　小林一夫報

うたかたの恋　手のひらのぼたん雪　智恵子
あきらめよう雪が静かに降っている　希久子
琵琶湖風花義仲寺はどのあたり　薫
巫女袴持ちあげてくる雪解道　喜美子
風花や亡母も心配してるらし　みつ子
雪見酒明日は他人となる人と　房子
どこまでもどこまでも黄　銀杏散る　あずき
顔のないマネキン　淫らなる都会　一夫
あの人が酒の相手を女房に　雅子
冬がもう来たなと思うにごり酒　正坊

八尾市民川柳会　宮崎シマ子報

時どきは本音こぼして父の酔い　夕花
酸欠の街で本音にうとくなる　柳伸
切り捨てた尻尾の方にある本音　透太
色付けて本音話せば味が出る　和子
船乗りの酒は車座皆本音　英一
裂帛の気合へ面胴相打ちに　柳宏子
父の鞭面を外して小手を打つ　宏
冬眠のカエル気づかい鍬を打つ　たもつ
言葉に注意なさいと釘を打っておく　頂留子

さあ打てと手元に投げるボール球　八寿子
ひざを打つ行革論が進まない　美幸
丸腰になって打つ手を考える　剛治
勘冴えて打った芝居が図に当り　信博
テールライトがおいでおいでと終電車　弘直
まなうらにシェーン帰れと叫ぶ子が　賢子
駅裏の屋台ラストの客を待つ　泰
この杭を打てばラストになる仲だ　シマ子
燐寸箱ラスト一本折れやすい　祥一
涙の重さで花が散るラスト　森子
かじるだけかじって恩が返せない　ますみ
恩師とは出世してから逢いたくて　東雲
拳骨をくれた恩師も杖をつき　いつふみ
生涯の胸に一語がある恩師　欣之
恩は恩ゆずれぬ恋に燃えるバラ　朝子
逆風の恩順風でもう忘れ　洋
ねたきりの看護終って着る喪服　春子
みな消えてやれやれ思う花時計　度
帳尻が合ってやれやれ酒にする　一風
やれやれと思う暇なし蟻の列　隆盛

ローズ川柳会（前月分）　山崎君子報

遠目にも恩師哀しく老い給う　てる
目の高さ合わせてくれる友がいて　ミサヲ
桃割れにパパの目細る七五三　キク子
泣き顔をくるり笑顔に変える風　哲子
風の音独り暮しにじんとくる　トミエ
目指すもの見えず暴走くりかえす　貴代子
コスモスに伴奏託し風と旅　まさお

風ばかり読んで翔べない鳥である　いわゑ
錦秋残照夢を運んだ風眠る　武庫坊
こんぺい糖の彩に迷うたりはしない　年代
そよ風の向こうに過ぎた幾山河　はつ絵
汚れない目は陰口を信じない　民平
呆けた老母たまにしゃっきり母の目に　義子
子の知恵もかりて家族の和に染まり　笑女

川柳塔鹿野みか月　土橋螢報

若いから地球に飽きて月に行く　幸枝
あこがれていいのか妻子ある方に　明美
不注意な厚生省の首根っこ　隆風
牛飼って人に劣らぬ愛をみた　武子
丑の刻まいりやりたいのがひとり　孔美子
儲からぬ農業牛もそう思う　弘子
牛たちがお節料理を食べにくる　久枝
値踏みする内緒話を聞いた牛　盛桜
額縁に納まっている父母の顔　きみ江
肩の荷も納まるとこに納まった　富久江
居心地が良くて納屋から出られない　かつ乃
血税を納めラーメン食べている　智恵子
納めてもまかせられない使いみち　和子
愛ひとつ胸に納めて卵割る　きみ子
納税を嫌がる人を笑えない　汲香
納まるとこに納まって雨やんだ　実満
背を向けたままにさよなら言えますか　三千代
見送りの母へ背を向け辛かった　くに子
同情はされたくないと背を向ける　睦子
あざわらう声に背中が慣れてゆく　諷人

挨拶をしてゆく人に背を向ける　はるお
不器用はおたがいさまよ茶番劇　節子
おたがいに謙虚なハート持っている　茂
おたがいに我を張り合っていたらしい　喜与志
おたがいに持ち味もった双子です　菊乃
おたがいにゆずり合います温い道　八重子
おたがいに噂の人になってゆく　螢
納骨のこんな哀しい音がする　宣子

富柳会　池森子報

外に出て我慢の石を持ち帰る　とも子
バラの首切って妬心の花鋏　紅紫朗
焦点をぼかせばわかる風の向き　鐘造
これで好しつぎはどうくる相手駒　久則
業界では顔でも好きになれぬ人　方子
落選がまだ笑顔の選挙ビラ　柳太
日々好日気ままに生きる胸の鈴　文子
傷心の娘をそっと包む母　(田)勇
苦手には相手の苦手探しとく　宗一
叩かれて叩かれ強くなりました　昭子
顔ぶれにいとこはとこの名を忘れ　秀樹
叩かれて木魚ぽくぽく経おぼえ　冬虹
石橋を叩く努力は惜しまない　智久
叩かれて回れなかった道がある　悦子
煮え切らぬ男をそっと突いてみる　(伊)勇
愚痴るまい顔は親から授かった　登子
神仏ひとりになって門叩く　二三子
そっとふれると真っ赤なバラが眠り出す　花梢
似顔絵が僕よりずっと男前　昭水
ふくらはぎ叩いて此処まできた私　アキ
童顔のままで五人の親になる　絹子
叩かれて叩いて太くなる絆　欣之
生年月日そっと教えた五目めし　岳人
秋霖や枯れ葉のコント聞く夜更け　美代子
一本の竿に風月遊ばせる　森子

岬川柳会　八十田洞庵報

じわじわと嫁が暮らしを変えてゆく　幸子
節くれた指でダイヤが泣いている　里子
野良仕事昭和を語る指の節　みや子
小指たて何か男の高笑い　洞庵
貧乏を売りものにする暮らしぶり　鉄男
ワープロは指の運動ボケ防止　龍弘
発掘でわかる古代の暮らしぶり　俶子
靴底で暮らしを当てる床屋さん　ヤエ
ピアニスト指が魔法で動いてる　とみ
終戦後暮らしに耐えた芋お粥　正美
窓の影指笛吹いて女を呼ぶ　悦子
終戦時飢餓の暮らしを忘れかね　庄六
感動のない暮らしボケ要注意　みつ子
難民の指をくわえて食を待つ　末吉
母だけに分かる指切り思い馳せ　孝子
指切りをしながら口実考える　勇
指切りはしないがきっとまた逢える　年子

川柳高知　川竹松風報

行楽の風に誘われ歩く山　和子
誘い水やっとポンプが生きかえる　典雄
一本の注射が誘う悪の道　子龍
末っ子に母の甘さを利用され　春枝
先の事考えないで寝るとする　菊野
ある時は旅の出合いで若くなり　竹萌
スケッチへ旅の風情を持ち帰る　有佳
誘惑を期待している紅の濃さ　美々
羽根布団少しおもしが欲しい老い　幸
羽根布団ローンの重み肩がこり　功
布団干し電気毛布にない温み　快風
JAの旅はふとんが敷いてある　孝雄
座布団を枕に心地よいいびき　松風

尼崎いくしま川柳会　春城年代報

古ピアノキーのどこかが狂いだす　ハツエ
嫁った娘のピアノの跡が真っ白い　弘治
ピアノが鳴ると一緒に吠える犬がいる　すみ
鍵盤を叩けば冬の月昇る　比ろ志
夕焼けに沈む教会のピアノ　義芳
生きのびる白髪励ます頬かむり　十四郎
処世術一時凌ぎの頬かぶり　昭三
頬染めて女はジョッキ彼コーラ　孝一
赤紙を受けたあの日の赤い頬　伊三郎
頬そめた思い出もある杉木立　愛
悪党の頬はつるんと柿を食う　薫
イヤリングはずして終る今日の貌　こころ
終電車今日一日の顔が乗る　三代子
引き際を美学で終えて墓参り　渉
遺言状書けずに余生終らない　紫香
終章を書いて序文がまだかけぬ　昌子

燻ったままで終っている日記　歌子
終る日が分かればもっともっと遊ぶ　武庫坊
リストラの首が浮いてる露天風呂　夢之助
月桂樹つぼみを付ける霧の朝　正子
文学の遠さと荒れた手の熱さ　美子
吉祥天女のゆたかな微笑ゆたかな海　光穂
鎌を研ぐ三日月寒し通夜の道　まさお
バカラグラスと独りの闇をぬくめ合う　澄子
冬の雨小暗きままに暮れ落ちる　年代
ひとりいて音なき雨に耳すます　千恵
仲裁を頼んだ人でまた不仲　一笛
終演を見事に湧かす斬られ役　嘉矩
チャンスにも道化になれず悔い残る　吉太郎
枯れ菊を束ねて秋をやり過す　芳子

いずも川柳会　園山多賀子報

長所だけ探してみんないい仲間　芳子
幸せのネジが一本見付からぬ　文子
冬の川女の渡る橋探す　芙佐子
身の程を探して温い風に逢う　義良
欠点を探して他愛なく好きだ　草丘
雑談の中で本心探り出す　まこと
見栄捨てて赤札探すたくましく　蘭水
反省の度に人間らしくなる　きみえ
反省をするには塀が高過ぎる　章峰
反省をしても小舟が未だ揺れる　昭二
時計の針は反省しても戻せない　裕
一日の反省大きな陽を拝む　房子
棚の上から降りて来ぬ反省　篤子
つまずいた石の数ほどする反省　治代
思い出の旅の記憶の冬帽子　多賀子
初冠雪北の旅情に花添えて　茂美
来年の旅のプランを練っている　清子
人間の終りは告げぬ弥陀の慈悲　水煙
陽が昇り沈んで終りなき戦　ちかし
レンコンの穴から覗く世紀末　流石
終りには誰も仏の面を持つ　陽子
悔いのない一日終りうまいお茶　しま子
終りまで一緒にいると決めた仲　昌枝
元朝の海から二十一世紀が匂う　青湖
冬のバラ匂うあたりへ老いていく　嘉寿子
それぞれに違う匂いの花言葉　明子
食欲を誘う匂いにはずむ箸　正朗
松葉がに海の匂いを秘めて冬　満江
つづれ帯亡母の匂いの帯締める　おしえ
悔いる朝海の匂いを浴びてくる　あきら

翠洋会　藤井正雄報

初恋は本物バージンロード行く　真砂
児の夢にサンタがくれた赤い靴　志華子
ポマードで行政改革研ぎすます　蕉子
月世界靴の足跡未だ有るや　綾子
間違い電話偶然だとは思えない　ひろ子
木に登る少年の目は本物だ　蛙
そっくりさん本物よりも出来がよい　照子
本物が本ものを知る筆使い　光子
六十歳の眼にほんものが見えだした　希久子
正装の靴は一足あればよい　正坊
ほんものは一般席の隅に居る　佳秋
本物が返事しそうな通夜の世辞　源一
本物の涙は扉閉めてから　正雄
プラス思考ハミングで研ぐ米二合　みつ子
片方の靴が昭和を脱ぎきれぬ　宣司
脳細胞研ぐに書店のひろい読み　絹子
来る年へわが刃こぼれを研ぎながら　さと美
間の悪い同じ服着た人がいる　叡子
本物は決して前に出たがらず　義
研いだ刃の邪心を神は見逃がさぬ　澄子
彫るよりも研ぐ方が長い指物師　東雲
本当の幽霊もいた肝試し　恭昌
本人である証明に判がいり　鬼遊

とっとり川柳会　武田帆雀報

話題作りが十八番で飽きが来ぬ　静生
十八番の歌がボトルをキープする　多哥由
奥さんの十八番ラーメン卵焼き　一枝
ライバルの十八番が風を斬る　睦子
これという十八番はないが生きている　圭一郎
十八番歌ってからの修羅に立つ　螢
十八番はらはらさせて綱渡る　輪多朗
十八番出すほど怖い敵じゃない　帆雀
鼻下長を誘う女に策がある　和枝
あの丘を越えると誘い水が湧く　隆風
ジャスミンの香りが誘う諾々と　茂
貴方よりきれいな人は誘わない　よしえ
チョンマゲのまんまがよいと誘われる　忠良
私にヘッドハンターなど来ない　悦子

欄干に立つと悪魔が誘い出す　鬼桜
身の上ばなし流す涙に誘われる　美恵子
合い鍵を渡され思案しています　一瑶
風化したラッパで僕を誘う気か　洋々
根が横着で遊ぶ事なら参加する　きみ子
横着な爺が囲炉裏で芋を焼く　明美
横着をしてもご馳走食べたがり　銀嶺
横着な夫婦でいつも揉めている　一夫
土壇場で横着をした付けが来る　粗粒
横着を重ね哀しい歳の暮れ　一京
横着で手抜きのうまい人になる　大漁
横着を笑った末は発明家　孝男
お刺身がパックのままで膳にのる　和歌子
横着で相撲部屋から破門され　喜与志

倉吉川柳会　谷口　次男報

そら逃げろ日本人の群れが来る　完司
ネクタイの群一斉に青信号　天雀
じいさんはそう簡単に群れられぬ　石花菜
声援が追いつけ越せと群に言う　秋草
くんれんされた群音楽に踊り出す　菩句
セクハラに群で怒ったオバタリアン　次男
紅白の餅が目当てか人の群　(山)康子
集団でいのちを守る稚魚の群　御前
オリックス群れて監督宙に舞う　和枝
整然と蟻の群から教えられ　常代
稚魚だけど大きな群はおそろしい　よしえ
雁の群一かへの字のパスポート　康志
病人に告知できない胸の内　智子

川柳塔おおとり　上田　俊路報

門前に着けば食い気が先に立ち　宏章
でんがくも世間の風と波に乗る　道子
御利益はあの世へ行ってからわかる　真一
木の間縫う風が木魚と戯れる　しげる
刈り上げの少年一寸大人振る　崇
松を刈る庭師無口で枝はらう　せつ子
雑念を刈って心に風入れる　俊路
刈るほども無い髪床屋念を入れ　由多香
刈りとった愛地下茎にまだひそむ　芳子
娘の調度オチのないようメモつける　静枝
メモ用紙枕の下に置いて寝る　伝住
つぶやきをメモに残すと僕になる　艶子
老い二人メモがあちこち貼ってある　孝子
木簡に千年前の世が匂う　幸次郎
メモをして母の心を置いて出る　友子
郵便に一筆託す旅の空　清子
航空便ロンドンの風連れてくる　風花
沖縄も近所も同じ五十円　半畳
京からの郵便香りほんのりと　登美
局止めの便りが少しきなくさい　みさを

横浜あおば川柳会　菱田　満秋報

ガキ大将長じて役に立つ男　明玄
悪いかな気にかけながら義理を欠き　トヨ子
悪い人と言われたかった若い日々　天々
マニキュアの色が悪女になりたがる　良子
悪いねの例の一言また許し　亜希子
本当の悪は福祉の裏に棲み　よし一
気がつけば横に夫がただ一人　芳江
達筆の横でふるえる祝賀帳　見早子
スキャンダル類は友呼ぶ厚生省　政勝
只今と母を呼んでるランドセル　広和
宝くじつき呼ぶ人と買いに行く　純子
教え子に呼ばれ出費の結婚式　雅子
痴呆症今日も亡き妻呼んでいる　ちよ路
赤子泣く声で母乳があふれ出る　早智
大病院電光板に指示される　羊子
横顔をほめられ一人斜に立つ　愛生
横車押して道理の輪を干切る　加津子
大の字にときになりたい修行僧　笑子
横顔に面影残すめぐり逢い　和可
横顔を載せてつっこむインタビュー　由美子
横丁のご意見番が消えた町　マサ子
おしゃべりが横いっぱいに歩いてく　絹子
横糸のほつれたままに年が暮れ　徳三
君が代も第九も横で聴く炬燵　潮華
おやつだと呼べば友達ついてくる　満秋

川柳藤井寺　高田美代子報

しぶちんが土産はりこむ下心　志洋
義姉さんを味方につける下心　正一
ご親切　何かお返しいりますか　桂子
酔ったふりして下心読む上司　みよ子
下心無いが今年もする歳暮　史郎
澄み切った目に覗かれる下心　修六
何歳になっても愛に迷うてる　昭水

迷うてもどうにもならぬ事があり　吸江
縁むすびいろいろ聞けば迷うだけ　キミ子
迷ったら訪ねて行こう父の墓　悦子
あれこれと迷い進路に青がつく　利武
あれこれと迷うた末のじゃんけんぽん　アキ
迷わない女で可愛さに欠ける　扶美代
迷い猫いつか我が家の顔で住み　敦子
安心な妻が操る夫婦舟　三郎
金を借る奴が安心せいと言う　柳太
今ならば親に安心させたのに　昭子
安心感　父の大きな傘の中　花梢
人真似で安心同じ旗を振る　かなめ
安心は大地に足が着いている　智久
金だけの安心のどが渇きだす　和樹
安心をつなぐ絆を太くする　美房
古里の妻子夢見るホームレス　恒雄
神戸まだ仮設の夜があるという　淑子
性格が変わる陽気な父の酒　トミ子
モノクロで書く続編に味がある　美代子
縛るものなく伸び切った若い脚　みのる
片方はとても素直な耳である　しげお

尼崎尾浜川柳会　前田いわお報

年だなァ頑固親爺も丸くなる　末貞一
叱る子へ親のマグマが動き出す　六浦
おうどんの味はやっぱり大阪や　ハツエ
たこ焼きとうどんの好きな女に惚れ　勇次郎
このへんで昼はうどんにしまへんか　一完
うどん屋の前でお腹がグーッと鳴る　昌子
思い切り捨てて片付く十二月　すみ
義理と見栄財布が寒い十二月　弘治
鍋焼にキャンパスの顔偲ぶ夜　正治
頑なな心を許す仏間の灯　澄子
へそくりは疑われるほどたまらない　江美
露ほども疑いません夫と子　まさ
脚光を浴びると疑いつきまとう　十四郎
疑えば僕の心が曇りだす　夢之助
疑い深いトンボは人に近寄らぬ　鹿太
喜寿迎え同窓会も数が減る　いわお

打吹川柳会　奥谷　弘朗報

腹の中虫が弱音をはいている　勝見
すっきりと出来ぬ猫ばばしてしまい　節子
み仏にすべて任せた果報者　喜与志
直線に進むと亡母に出逢えそう　幸子
カンナ咲く一直線の道が好き　きみ子
極楽へ行く直線の道がない　かつみ
生き地獄すべてに金がへばりつく　螢
一直線に生きてまわりと軋みだす　季芳
そう言えばそんなあだ名で呼んだ仲　佳女
猟夫が一直線に獲物追う　博丈
故郷のすべてが好きで農を継ぐ　みほの
どうしてもあの直線と交われぬ　柳風
嘘も喧嘩もすべては生きている証　雄々
げんまんの指きりすべて明日の詩　仙岳
地球上平和が進むこぜり合い　小生
割り切ったあとは若さで一直線　玲坊
花園のすべてに注ぐ陽の光り　和枝
直線もままにならない墨の跡　玲子
秋晴れに大根の畝一直線　獏沓
薬では進む老化は止まらない　喬水
あだ名聞き会って見たいなその人に　冷泉
土建屋の社長あだ名でよく稼ぐ　帆雀
近道を進む男に御用心　弘朗

堺川柳会（前月分）　河内　月子報

モデル地区住んで良かったとも思い　春蘭
デザイナー次第でモデル血が通い　勇太
よい天気今日の私に嘘はない　福一
なにもなかった一日どうもありがとう　こころ
女だから女の痛みよく分かる　扶美代
木枯しが吹いて野性が目を覚ます　美代子
マナーなど捨てて食べたいフルコース　喜代子
天気予報今日は外れてほしいです　冬虹
どうもどうも圭三さんの懐かしい　哲平
お天気がええのでごはんよく食べる　天笑
さかむけの痛さで冬を正面に　美子
野生かも私の中で滚るもの　泰子
どたん場でどうも力が抜ける癖　りつえ
どうも困った子でと自慢をしてしまう　みつこ
野性美の妻を少々持て余す　梓
猿軍団野性を捨てて芸に生き　彰
菊人形秀吉猿に似ていない　健吾
荒削りの男でどこか憎めない　寿美
束の間をモデルのように試着室　芳水
ゲバ棒を持った野性も都会人　洞庵
両親をモデルに子等の羽繕い　文

野性の証明おばさんが群れたがる　菜々
堂々と野性のままにかくいびき　かりん
八十歳未知の世界がまだ残り　紀美女
イチローの苗字は知らぬおばあちゃん　満州
目の奥に野性がひそむ反抗期　小雪
酔うほどに特攻隊が増えてくる　東雲
給食を食べてお腹が痛くなる　道胤

はびきの市民川柳会　榎本　吐来報

秋灯下　素直になれる人と居る　美代子
詩人にも画家にもなって里の秋　たけし
蒸発の子に賭けている村祭り　聡
割り切って病を友にして暮す　はるよ
年金が少し貯まって秘密ふえ　敦子
白か黒つけず時には灰色も　昭平
秋空へ誓う六十路のマイペース　吐来
腑甲斐ない親で息子も頼りない　さとみ
頼り甲斐あるから妻の掌で遊ぶ　金太
金だけに頼ると絆細くなる　和樹
土壇場で意外な人の頼り甲斐　晋
ステッキに頼り年寄り臭くなる　二南
贅沢な悩み余裕のあかしです　俊男
余裕ある笑顔は母になる自信　まつお
にこにこと罠にはまって見る余裕　辰子
余裕などないがお話なら聞こう　ダン吉
あり余る暇を余裕と読み換える　かつみ
ゆっくりとコーヒーを飲む指定席　重人
未知数の男に粘るスカウトマン　獏沓
粘るのが身上というお人柄　敏

説明だけでもとハンサムくいさがる　みつこ
もうひと粘りあれば許してあげたのに　昭子
粘り抜いた汗しばらくはそのままに　扶美代
倒れてもコピー内閣また生まれ　専平
肉筆を添えてコピーに温か味　庸佑
コピーして置かねば愛が風化する　絢子
コピーしたように並んだセト狸　利武
とりあえずコピーで我慢しときます　一壺
息づまる試合にゲスト喋りすぎ　志洋
売れっ子のゲストが稼ぐ視聴率　泰子

豊中もくせい川柳会　田中　正坊報

清流にもどす元手がかかりすぎ　蕗児
体が元手　大事になさい息子たち　きく子
一匙の塩に生きてる旬の味　弘直
塩辛を酒のさかなに妻の留守　慶子
汚職にて日本沈没　夢でない　吉太郎
キャンパスに沈む王者のうつろな目　計光
退職後　地盤沈下のおやじの座　正三郎
本心を写すとめぼしい影が見え　明光
仏壇のめぼしい酒が減っていた　しげお
貧乏に耐えてめぼしい子が二人　瀧小
衝動買いめぼしい柄につり込まれ　ただし
めぼしいと見込み師匠の目が厳し　庸佑
飯茶碗幸せいっぱい山盛りに　悟郎
やり手だと言われながらの裏仕事　知香子
浜風をくぐってかれい一夜干し　登代子
老夫婦並んで白い海を見る　紫香
佗助を今日か明日かと待ちわびる　博史

駅前の矢印行けば縄のれん　一笛
日銭手に握ったままで新世界　柳宏子
寂聴の恋の話が面白い　杜的
年金が人と争うことはない　正坊
信号を疑いなしに渡れるか　武庫坊

堺川柳会　河内　月子報、

老い二人玩具のような鍋で足り　春蘭
いりません言うて左手受けている　哲平
学歴は無用論者で流す汗　芳水
再婚に子供三人ついて来た　東雲
政治不信絵の餅などはいりません　寿美
送られて持て余してる河豚セット　八千代
生きてゆく力へ妻がプラスする　洞庵
プラス思考の女と楽しい酒になる　昭子
ケチンボの妻がどんどん具を入れる　扶美代
いらないとはっきり言えば角が立ち　りつえ
男ひとり鍋に浮かして姦しい　勇太
何事もプラスにかえる母の知恵　みつこ
妻の留守鍋を使わぬものを食う　道胤
闇鍋にわたしが何故かまぎれ込み　美代子
変身のチャンスプラスになるように　喜代子
断っているのに冬が戸を叩く　美子
お箸割ってあげる愛するひとと鍋　こころ
時々は喧嘩　プラスとなる夫婦　紀美女
鍋料理眼鏡はずして構えてる　冬虹
元気ならお金はたんといりません　梓
持ちきれぬほど飲み薬貼りぐすり　一二三
古希過ぎてもう矢印はいりません　彰

聞き上手プラスアルファーついてくる　満州
平凡な日々を大事に積み重ね　楓
だんまりへ土鍋ぐつぐつ吠えてきた　かりん
折り込みのチラシ新聞より多い　小雪
私の聖域お鍋光らせて　泰子
住専と厚生省をつつく鍋　天笑

川柳塔まつえ吟社　恒松　叮紅報

誤魔化しも忘れることもお手のもの　邦代
飽食へ芸を忘れた猿が居る　満江
遺産分け忘れた人も顔を出す　雄々
忘られぬ思い出連れて雪が降る　一葉
我が年も忘れ哀しい紙オムツ　房子
老妻がやんわり責める忘れ物　茂美
残り火を抱いてまだまだ女です　長吉
残り火の愛に逆らう乱気流　早苗
残り火におでんの鍋をかけておく　清子
癌という残り火がいま燃えている　螢
愛憎の残り火がくすぶっている　鶴丸
残り火へ一途に母が縄を綯う　太泡
留守番電話早口言葉になっている　みえ
妻の留守初めて米を研いでみる　米子
留守電は一部始終を聞いている　静江
留守電へ予約のメモを入れておく　静恵
嫁の留守昼寝を少し長くする　きみ子
ふるさとは留守電の鳴る街となり　静枝
急ぐとも転ばぬ杖がたしなめる　多賀子
あの人が急ぎ足なら注意する　知恵子
ゆっくりと位置確かめてから急ぐ　寿美子
弱点を握ってからは急ぐまい　桂子
急いで急いで心失う十二月　文子
結論を急ぎ船頭増えてくる　与根一
落書きの如き師走のカレンダー　畔
良い事も予定に入れよとカレンダー　れいじ
永遠にカレンダーの娘笑ってる　友子
福寿草こっそり咲いた春暦　義良
絵がきれい捨てるに惜しいカレンダー　午朗
一年の悲喜を知ってるカレンダー　叮紅

ローズ川柳会　山崎　君子報

身辺整理古恋文を如何せん　てる
何度目の恋になるのか雲走る　ミサヲ
穏やかな水面に石は投げられぬ　みつ子
愛哀し老いたペットの目は無心　哲子
落ち葉掃く土に返して春を待つ　トミエ
恋人と歩けばなんと近い家　貴代子
気がつけばいつか跳んでた恋の淵　まさお
ばら千本一度に咲いたような恋　いわる
来る年の夢の下絵がまだ書けぬ　武庫坊
愛哀し子の旅立ちを許さねば　年代
他人の真似こんなに出来て充たされず　はつ絵
亡き母を愛した風が包む墓　民平
しまい風呂ゆずの温もり亡母恋し　君子
夕やけにカラスも愛の森がある　義子
老いらくの恋も楽しいホームの灯　笑女

ふくべ川柳会　橋本多哥由報

浮世絵が背の裏に書いてある　和歌子
飲み歩くまでは何でも覚えてた　輪多朗
募金箱に心の裏を見透かされ　孝男
まじめに歩く人だが恋はゆずれない　明美
先人の歩いた道に花が咲く　帆雀
大掃除探しあぐねた指輪有り　一夫
中三が太平洋を独り漕ぐ　寛子
裏などは見まい他人のことだから　昭恵
口裏を合わせ会議の席につく　春恵
森へ行き緑の風で掃除する　ひろ子
汚染一掃みだらなものを考えぬ　諷人
掃いて拭く朝の掃除に汗をかく　信子
父ちゃんは掃除母ちゃんテレビ見る　銀嶺
歩道橋歩く手すりに愛がある　一枝
掃除洗濯嫌いでもいい嫁にする　喬水
宗教の教えにもある裏表　単車
ハイヒールしゃれて歩くと腰にくる　栄乃
昼の月みながら歩く影一つ　多哥由

御　礼

江原とみお遺作集「居酒屋」おかげさまにて完売致しました。ご支援ありがとうございました。

江原とみお遺作集刊行会
新家完司

柳界展望

★第21回全日本川柳三重大会は**6月8日**午前10時から三重県総合文化センターで開く。宿題第1部（事前投句・5月10日締切）の選者は、パレード＝成田孤舟▽波＝保地桂水▽民話＝長谷川芙美女、同第2部（当日出句）は、太陽＝早川双鳥▽流れ＝奥田みつ子▽音＝田中新一▽港＝加藤翠谷。投句料1000円、会費3000円。2次選者は仲川たけし・渡邊蓮夫・礒野いさむ・山田良行・大木俊秀・橘高薫風の6氏。前夜祭は6月7日午後6時半からホテルサンルート、会費8000円

★朝日新聞なにわ柳壇の平成8年度の十秀が決った。最優秀句は次のとおり。

〈橘高薫風選〉

ストレスのゴリラ逆立ちばかりする　西澤　耕司

〈片岡つとむ選〉

飄飄と万年床の数学者　藤原　弘

なお、本社同人の川原章久・藤井正雄の2氏が薫風選、堀良江・岩佐ダン吉の2氏がつとむ選の十秀に選ばれた。

★読売新聞とっとり文芸川柳の平成8年度賞が次のとおり決定した。

しぼんだハートへ明日は空気を入れとこう　福井　智子

また、同人の田村きみ子さんが秀吟賞に入賞した。

★京都塔の会は平成8年度の年間賞を決定、12月句会で表彰した。カップ賞は都倉求芽氏、優秀賞は①山本礫②都倉求芽③大野百合子④川島諷云児・松川杜的氏

★川柳サークル卯の花は平成8年度の年間優秀賞を決定、1月句会で表彰した。①川島諷云児②河瀬芳子③山本礫④田中薫・小池しげお⑤大野百合子の6氏

★西宮北口川柳会は平成8年度の年間賞を決定、1月句会で表彰した。カップ賞は松本正とし氏、優秀賞は①山本礫②奥田みつ子③門谷たず子・浅雛美智子⑤田辺鹿太・西口いわゑの6氏

★産経新聞社後援・大阪川柳の会は**2月4日**午後5時からサンケイビル3222号室で例会を開く。宿題と選者は、カルテ＝榎本信治▽なぜ＝高須賀金太▽冷える＝中田たつお▽泥＝礒野いさむ（各題2句・午後6時締切）会費500円

▽同人消息△

■小林由多香氏（本社参与・鳥取市）は旧冬、川柳普及による功績により地域文化功労者として文部大臣から表彰された。

新同人紹介

橋本多哥由（たかよし）
―紫香・公一推薦

森茂美（しげみ）
―薫風・れいじ・きみえ推薦

▼訂　正▲

■**1月号**＝P103上段14行目・作者名「**忠男**」▽P121上段6行目「日技子」→「日**枝**子」

▼訃　報▲

■中西兼治郎氏（大阪市・翠洋会会長・元本社同人）12月8日、ぜんそくのため死去、85歳

■丸山よし津さん（宝塚市本社同人・西宮北口川柳会会員）12月18日、急性心不全のため死去、73歳。法名・静月芳香大姉

2月各地句会案内

句会名	日時と題	会場と投句先
尼崎 いくしま	7日(金)午後1時から 人・迎える・雑詠(A・B)	サンシビック尼崎3F　阪神尼崎南西徒歩5分 〒661 尼崎市武庫之荘5－25－17　春城年代
川柳塔 まつえ	8日(土)午後1時から 荒れる・策・充電	松江市雑賀町　雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686　恒松叮紅
堺川柳会	9日(日)午後1時から 包む・水面・文句・手	堺市総合福祉会館　南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2－16－3　河内天笑
川柳塔 わかやま	9日(日)午後1時から 鬼・近道・黙る	近鉄カルチャーセンター　JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111－2　牛尾緑良
西宮北口 川柳会	10日(月)午後1時から セーター・煮る・ほどほど・自由吟	西宮市立中央公民館　阪急西宮北口駅南出口徒歩5分 〒662 西宮市両度町2－19－515　山本義子
ほたる 川柳 同好会	11日(火・祝)午後1時から 匂う・捨てる・サイン	豊中市立蛍池公民館　阪急宝塚線蛍池駅西へ150米 〒560 豊中市蛍池中町3－10－28　井上直次
八尾市民 川柳会	11日(火・祝)午後6時から 良心・迷う・逃げる・隅	八尾市文化会館4F　近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1－15　宮崎シマ子
岸和田 川柳会	15日(土)午後1時半から 優雅・陽気・落語・利口	市立福祉総合センター2F　南海線岸和田駅東歩3分 〒596 岸和田市上松町610－85　芳地狸村
川柳 ねやがわ	16日(日)　正午から 女傑・新築・改革・自由吟	寝屋川市立総合センター　寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9－9　高田博泉
もくせい 川柳会	17日(月)午後1時から 腕・煮る・苦しい・自由吟	豊中市立中央公民館　阪急曽根駅南東歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5－801　田中正坊
高槻川柳 サークル 卯の花	20日(木)　正午から 脱皮・たっぷり・ひどい・自由吟	高槻現代劇場306号室　阪急高槻駅徒歩7分 〒569-11 高槻市宮田町3－8－8　川島諷云児
南大阪 川柳会	21日(金)午後6時から 家柄・意識・意外・威張る	玉造老人憩いの家　JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1－5－2　金井文秋
東大阪市 川柳 同好会	22日(土)午後6時から 針・しっかり・背伸び・雪	東大阪市立社会教育センター　近鉄布施駅北長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3－21　片岡湖風
はびきの 市民 川柳会	23日(日)午後1時から はしゃぐ・さっぱり・セリフ・説明	羽曳野市立陵南の森公民館　近鉄高鷲駅北東歩10分 〒583 羽曳野市高鷲8－31－11　塩満　敏
京都 塔の会	27日(木)午後1時から **25周年・300号記念句会**	ハートピア京都　本文P97参照 〒600 京都市下京区諏訪町通松原下ル弁財天町　都倉求芽
富柳会	27日(木)午後1時から 少年・満・自由吟	富田林市立中央公民館　近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4丁目1－10　池　森子

★日時・会場などが変更になる場合は、高須賀金太(0724-43-4889)へご連絡ください。

編集後記

★今年からこの欄への執筆を辞退したいと思っていたが、編集長からの要請もあるので、しばらく駄文をつづることとする。

★昔は図書選択のしおりは新聞の読書欄であった。ここに大きく掲載されると、一万部は堅いと言われた。しかし最近では、この欄を見て本屋へ走るということはほとんどなくなった。これはどうやら私だけではないらしい。

★ところでここ数年来、年間読書量を百冊と決め、ほぼ達成している。書名・著者名・発行所名を毎月記録しているが、読書傾向が一目で分かるし、物忘れがひどい昨今、同じ本を二冊買ったり、借りたりするのを防ぐメリットもある。やはり川柳にとりつかれていると、句集はじめ短詩型ながみが三十五冊もあった。

★平成八年で特筆したいのは、長編物を読み通したことで、宮城谷昌光著の『孟嘗君』全五巻は一気に読んだが、塩野七生著の『ローマ人の物語』は三か月かかってやっと五巻を読み終えいま第六巻の発行を待っている。久しぶりに手ごたえのある読書であった。

★その他は肩のこらない大衆時代小説で、藤沢周平・白石一郎をかたっぱしから読み、いささか中毒気味。

さて内容的に見て今年のワースト1は、春山茂雄著の『脳内革命』、正に独断・憶説で塗り固めた本で、これがベストセラーとは恐れ入る。そしてベスト1は、見田宗介著の『現代社会の理論』（岩波新書）、まずは一読を薦めたい。（正）

ひとこと

鶴彬にかわりて

鶴彬にかわり一筆もの申す

十一月号の田中正坊さんの句を拝見して、この鶴彬の「残酷な獄死」（河野春三）に関連があるといわれる『三味線草』の主幹、森鶏牛子へのインタビューの載っている『川柳雑誌』一九三一年正月号の記事を思い出しました。

この号には、麻生路郎さん選の「近代柳樽」に投句した私の

死んだ真似したまま
蜘蛛は殺された

など三句が載っているために現在まで保存しているのですが、右の記事の中で鶏牛子の「句の善悪は第二とし…真面目に時代に適合した句を作り…たいと思って『三味線草』を刊した」との言葉に出会い、〝時代に適合した句〟の持つ意味の恐ろしさを改めて知らされた私でした。（永田暁風）

▼あの阪神・淡路大震災から、丸二年が経過した。地震さえなければ、ぜひとも行こうと思っていた所があった。それは「灘の生一本」で知られる灘五郷である。

▼灘五郷とはご存知の通り、京都・伏見と並んでわが国屈指の酒造地帯であり、ことに灘区から東灘区にかけて広がる西郷・御影郷・魚崎郷は、昔ながらの酒蔵が並ぶ通りや資料館、おいしい酒処がたくさんある地域と聞いていた。

▽中でも、江戸末期に建てられた酒蔵をそのまま利用した資料館、重要文化財に指定されている酒造の道具など、酒にまつわる歴史や資料、それになんといっても、灘の銘酒とあてを実際に味わうのが、最大の目的だったのである。

▼ほかに行っておきたかったのが、福寿酒造というあまり馴染みのない小さなメーカーがある。この会社、博士号を持つ社長が特許を取った凍結酒があり、「酒心館」という記念館で飲めるらしいから、一度味わいたいと思っていた。

▼これらの施設がどうなったのか、そして私の落とすお金が神戸の復興に少しでも役立てば（大袈裟やな）と思っている。春は絶対に神戸に行くぞー！（金）

川柳塔・水煙抄投句用紙

種目「　　」発表（**4月号**）　地名　　雅号

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

きりとりせん

同人　・　**誌友**　マルで囲んでください。

本社2月句会

とき　2月7日（金）午後5時半
ところ　メンズファッションセンター3F
中央区内本町1－1　電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車（3番出口）交差点南西角

兼題
「ゆったり」　桜井千秀選
「木」　高須賀金太選
「猫」　宮口笛生選
「フルーツ」　河内天笑選
「やがて」　橘高薫風選

席題
1題　当日発表（各題2句以内）

会費
500円

本社3月句会　7日（金）予定

兼題　「昨日」「グラス」「旅」「秘密」「花束」

作品募集

4月号発表（2月15日締切）

川柳塔（8句）　橘高薫風選
水煙抄（8句）　高杉鬼遊選
渺湖抄（3句）　八木千代選
茴香の花（3句）　西出楓楽選
「魚」　玉置当代選
「出発」　土橋睦子選
「ようやく」　辻白渓子選

課題吟（3句）
初歩教室「堅い」（3句）　吐田公一担当

5月号
課題吟「壺」「手本」「あいにく」
初歩教室「コース」

夜市川柳募集

第9回「癖」　小松原爽介選
ハガキに3句　2月末締切
投句先　〒593 堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方　堺川柳会

本社句会の投句について

川柳塔社本社句会への投句は、平成7年4月から中止してまいりましたが、地方からの要望もあり、常任理事会で検討した結果、4月句会から復活することになりました。投句者は句箋（19×4㎝）に1葉1句、各葉ごとに氏名を明記し、投句料（80円切手5枚）を同封、川柳塔社事務所へお送りください。

NHK川柳作品募集

課題「誘う」　森中恵美子選
ハガキに3句　2月10日締切
投句先　〒540-01 NHK大阪放送局
「文芸部」川柳係
発表　2月22日（土）午前11時5分からラジオ第1放送（予定）

定価　六百円（送料76円）
半年分　四千円（送料共）
一年分　七千九百円（同）
平成九年一月一日発行
編集兼発行人　橘高薫
印刷所　美研アート
〒545
大阪市阿倍野区三明町二－一〇－一六
ウエムラ第2ビル202号室
発行所　川柳塔社
電話（06）六九一－六九一四番
振替　〇〇九八〇－五－三三三六八番

昭和四十一年一月九日　第三種郵便物認可
平成九年二月一日発行（毎月一日発行）

本のことならご相談を…

●川柳・俳句・短歌集
●画集・写真集・絵本
●社史・小説・エッセー
●創業・喜寿を祝う記念誌
●故人を偲ぶ追悼誌
●郷土誌

図書出版　教育情報出版
〒557　大阪市西成区千本南1-12-8
☎06-658-8741(代)　FAX. 06-652-2928

第12回国民文化祭・かがわ'97

川柳　作品募集要項

―みずみずしい詩歌を玉藻の国から―

一　応募受付期間　平成九年四月一日(火)～六月三十日(月)（当日消印有効）

二　応募規定

(1)　作品

一人各題2句詠（未発表作品に限る）

宿題（事前投句）石　打つ　島　寺

照る　ドラマ　瞳　的

宿題（当日投句）絵　情　橋　幕

(2)　応募料

一人につき一、〇〇〇円

(3)　応募方法

香川県実行委員会作成の「募集要項」を御覧のうえ、所定の応募用紙を使用して御応募ください。

(4)　応募先

〒七六〇　香川県高松市番町二丁目八―十五
第12回国民文化祭高松市実行委員会事務局
「文芸祭」川柳係

三　選者

（事前投句）

石井　有人　石原　伯峯　谷口　幹男　西田柳宏子
藤沢　岳豊　松岡十四彦　山田　良行　吉岡　龍城

（当日投句）

安藤富久男　片岡つとむ　塩見　草映　渡邊　蓮夫

第二次選者（五〇音順）

仲川たけし　西村　在我　福家珍男子　福田　白影
宮本　時彦

第一次選者（五〇音順）

石原　伯峯　谷口　幹男　西田柳宏子
松岡十四彦　山田　良行　吉岡　龍城

四　賞（予定）

文部大臣奨励賞・国民文化祭実行委員会会長賞・香川県知事賞　他

五　発表会場

川柳大会（入選発表・選評等）
平成九年十月二十六日(日)十時～十四時
高松テルサ

入選作品は、作品集として刊行し、応募者全員に無料配付します。

六　問い合わせ及び募集要項請求先

〒七六〇　香川県高松市番町二丁目一―一
第12回国民文化祭香川県実行委員会事務局
「文芸祭」川柳係
（Tel〇八七八―三一―一一一一（内線三三七〇））

七　主催者

文化庁　香川県　香川県教育委員会　高松市教育委員会　㈳全日本川柳協会・香川県川柳協会　第12回国民文化祭香川県実行委員会　第12回国民文化祭高松市実行委員会

雑誌　05703―2